都市戦記・妖魔アルディーン 3

香港五星家

ホンコン ファイブ・スターズ

井上ほのか



teen's heart

栄光と豪奢の都・香港。繁栄を続けるこの地に、ふってわいたような〝幽霊船〟事件。人々は恐怖におののくが、これはまだ、次に始まる惨劇の、序章にすぎなかった……。涼・雨宮。ネオ・ナリタの妖魔〝アルディーン〟という、もう一つの顔をもつ彼は、ヒョンなことから、香港の〝幽霊船〟事件にかかわるハメとなる。もちまえの正義感と好奇心から、事件解決にのりだす涼だが……。『元宵節』を舞台に、香港三部作スタート！

teen's heart
X95-12

講談社X文庫

都市戦記・妖魔アルディーン3
香港五星家（ホンコンファイブ・スターズ）

井上ほのか



目次

序章——長い物語のはじめに ……8
第一章　香港序曲
——レン・巧猿と涼 ……12
第二章『誘惑の騎士団』
——我が名はアーサーと彼は言った……79

第三章　幽霊船の噂
——従兄妹アリエナと巧猿……152
第四章　千人会議の賭け
——五星家の麗王……220
あとがきの国から、こんにちは!!……280


涼・雨宮
（闇の皇子）
真夜子

都市戦記・妖魔アルディーン3

「香港五星家（ホン コン ファイブ・スターズ）」おもな登場人物



ナイトハンド（ナサニエル・ゴードン）

イグナチウス

レン・巧猿（こうえん）

アリエナ・ライル

イラストレーション／瀬口恵子（せぐちけいこ）

都市戦記・妖魔（ようま）アルディーン3

香港五星家（ホンコンファイブ・スターズ）

序章——長い物語のはじめに

——長い物語のはじまる前に、一言。

かつて……世界には〝力〟があった。

それは、魔術また妖術と呼ばれ、人が超常の力にふれるために必要な掟や……犠牲についての膨大な知識であった。

世代を超えた術者たちの知恵のつみかさね……時には生命とひきかえにして得られた知識である。

これらの鍵によって大きな〝力〟に続く道の門がひらかれたが、力はまた手のつけられない混乱や争いを生んだ。

そして150年にわたる長い暗黒の時代を、世界がようやく抜け出した時。

——時に、まさに、連邦歴元年。

世界は、力へつながる技とその担い手を、ほぼ完全に失っていた。

魔術者といわれ、導師といわれ畏怖された超常の力の使い手たちは、あるいは滅ぼされ、

あるいはみずから力の鍵を手放して、霧のかなたへと消えさってしまった。
——彼らがあり、世界が極限までの繁栄と恐怖に満ちていた過去のことを……人々は現在、〝旧世界〟と呼ぶのだ。
荒れ果てた旧世界から、少しずつ都市や国家が復元されていった。
切り裂かれた絵の断片を持ち寄るように、人々は失われんとした知識の破片をたずさえて〝連邦〟という一つの機構に集まった。
まだ存在していた国家は、ほぼすべてがそれまでのシステムを離れ、連邦に合体した。
やがて新しい世代が立ちあがり……すでに連邦の歴史も2世紀を数えている。
しかしながら……。
——旧世界の技の知識は失われても、力そのものは扉のむこうにあって、消えてしまったわけではない。
連邦が生まれた時点でさえ、ごく……小数の地域に、その技やきらめきの破片が残ってしまっていた。
旧世界の遺産をわずかに受け継ぐ土地と人々……古い記憶を捨てさることによって、再生した連邦世界において、彼らはあきらかに異質である。
連邦の常識には入りきらない独自の法則と自治。
それに手をだして変えさせるほど、連邦は愚かではなかった。

――ほかとは違う超常の能力が、存在する街や土地が、連邦世界においていくつかある。それらはみな〝自治区〟とされ、連邦に属してはいるが、独自の自治や慣習を残すことを許されているのだ。

多くは閉鎖的だが、活発な少女のごとくに外交を好む自治区もないわけではない。

――連邦歴211年。

現在、連邦の機構は次記のごとく構成される。

すなわち、五つの直轄都市国家――ワシントン、ハワイ、ウクライナ、ベルリン、北京。

これらは連邦の主要な機能を受け持つ〝首都〟として、それぞれ役割を担っている。

無数の中型、ならびに汎的都市国家。

そして16の自治区があった……。

――その一つ、香港がこの物語の主要な舞台になる。

これは商都・香港において伝説が再び動き出し、旧世界に似た惨劇をおこした事件の顛末である。あるいは、流浪の王家を守護する騎士団についての物語か……。

――栄光と豪奢の都・香港。

この地の人々は華やかさや美貌をことのほか愛し、おとずれる他国の旅行者が、その華麗さに目をみはるさまを見ては、誇らかに胸をはったものだ。

――旧世界の昔から、4年にいちど、守られる大きな祭りがある。

それはこの都市の海の上の祭りである。
人々には『元宵節』と呼ばれていた……。

第一章　香港序曲――レン・巧猿と涼

「愛によって、互いに盲目」

――レーテア騎士団、第一の言葉。

――これは、連邦歴２１１年の物語である。

連邦歴２１１年。

ネオ・ナリタ。

……ネオ・ナリタは連邦数万の汎都市の一つで、市の東南に中規模な港と飛行場を、西北に連邦直轄の最高教育機関である〝アカデミア〟の一つが建つことが、主な特記事項だ。

しかし、ネオ・ナリタという名前についてもっともよく知られる事柄といえば、市の中心部に――ほぼ円状に――広がる、〝旧市街〟と呼ばれる悪名高いスラムだろう。

空が見えず、日のささない奇妙な街なのだ。

この街にはかつて、奇妙な伝説があった……そして現在、伝説よりもっと奇妙な存在が生

まれて、鬼火のゆれる魔の淵から立ちあがろうとしていた。
——それは少年の姿をしているが、力は妖魔をもしのぐとか。
黒い髪に、漆黒の瞳をして、旧世界のそれをしのぐかもしれない強靱な妖気を身内に宿している。夜と血と魔物を統べる『闇の皇子』。
——そしていまでも陽光を愛し、ただ一人の少女を愛している。
人と妖魔の融合した不可思議な生命。ネオ・ナリタの人々に〝アルディーン〟と呼ばれてはいるが、その正体は闇のなかにまぎれ、まだ誰にも知られていない。
人であった時の名は、涼・雨宮といったのだが……。

ネオ・ナリタ。よく晴れた日の昼さがり。
旧市街の路地の奥に、一軒の定食屋がある。
よくあるちっぽけな食堂で、亭主とお手伝いの坊やだけでがんばっているのだが、店の中はいつもこざっぱりして気持ちがいい。
——〝赤鍋亭〟というカンバンが、出入り口のドアの上にかかっているのだ。
表の石段の日溜まりで、エプロンをかけた少年が幸せそうに居眠りをしていた。
お昼の忙しい時間も終わり、ホッとひと息ついたあたりだ。ちなみに手には、半分まで剝きおわったジャガイモの籠を抱いている……。

しばらく前からこの赤鍋亭でマスターの手伝いをしている。働き者で可愛い子だ。年齢はまだ16歳。黒い髪に黒い瞳で、年にしては少し小柄だろうか？　笑顔がとても人なつこいのだ。

まだまるで少女のように優しい顔だちで、赤鍋亭の常連客には〝涼ちゃん〟と呼ばれているが、本名は涼・雨宮……つまりネオ・ナリタの妖魔の昼の姿だった。

……彼はいま夢を見ていた。

夢の中で、空は輝くような赤い月夜だ。

——満月は……大好きさ。

黒い髪が風になびいているのを感じる。軽く宙を蹴れば、旧市街をビルからビルへ駆けぬけることなど、いともたやすい。

——気持ちがいい！　今夜はもう夜明けまでずっと遊ぼう！

その時……ふと、どこからか甘い声が耳に入ってくるような気がして立ちどまった。まるで歌のように、風にのって流れてくる。

——あの声、僕を呼んでいる……？

歌声の流れてくる彼方が、自分を呼んでいるのだ。耳を澄ませば不思議な感覚が、胸いっぱいに流れ込んでくる。胸がざわつくほどの何かがあった……嵐の気配、そしてこんなに遠くても感じられる未知の魔の気配。

そこで鏡のように光る海の幻を、見たような気がした。
誰かが、どこかから呼びかけている。誰だろうか？　なんだろうか？
――誰……僕を呼んでいるのは？
「あたしよ！　涼ったら……ヘイッ、起きなさいよ！」
突然、少女の声が元気よく彼をたたき起こした。
……ガバッと目を開くと、ポニーテールの少女が一人、手を腰にあてて涼を見下ろしている。赤いジャンパーのその少女は、気の強そうな眉をこわい角度にして〝もう、あきれはてた〟と言いながら、グイグイ涼をゆさぶった。
「なんなのよ、もうッ、あんたったら、あきれちゃう……こんな昼間から居眠りしてねぼけて！　ドジドジッ、恥ずかしいと思わないのッ？」
この少女の名前は、真夜子というのだ。
やはり16歳で、生粋の旧市街っ子で、ケンカっ早いので近所に名が売れていた。痩せがたで、髪の色が赤っぽくて、見るからに気の強そうな面構えだ。ミニスカートの足は蹴るためのものと心得ていて、その蹴りがまたなかなかに威力がある。
――職業はなんと新聞記者だ。
涼とは同じ旧市街の廃品置き場の倉庫で暮らしている。仲はいい……一言で言って、親分と子分という関係のようだが。

しょっちゅうケンカをしたり、はげましあったりしているのは、元気な2匹の子犬のようだが、黒髪の少年の目を見れば、いつも真夜子への憧れが輝いている。

ポニーテールの少女はといえば、まだ娘というより山猫のような代物だが、それでも弟分の涼をいじめる奴がいれば、そくざに全力で飛びかかっていくのだ。

……たたき起こされた涼は、真夜子を見てにっこり笑ってえくぼを作った。

「あ、真夜子……おはよ」

「おはよ、じゃないわよ！　本当にもう、どうしてあんたはどこでも寝るの!?　まだ昼間なのに」

昼間だからこそ眠いのだ。闇の皇子を身内に宿している涼は、どんなにおとなしい、殊勝な見かけをしていても半分は妖魔。血を好み、基本的に夜の生き物である。

目をこすり、はにかんだような笑顔を見せてから、またジャガイモの続きにとりかかった。手伝ってあげる、と称して、真夜子も隣に座る。

器用な手つきの少年の横で、少女はイモの皮を、なんというか……削りつつある。

目をすえて削っていた真夜子が、ふと涼をこづいてうれしそうに言った。

「ね……あたし、昨夜またアルディーンを見たわ」

「そう？」

……少年は目をあげずに短く答えた。

「もうッ、あんたったら……一大スクープだったのよッ！」

……ネオ・ナリタの旧市街には、かつて『七賢人』という名の邪教の一団に支配されていた過去があった。

路地裏の伝説によれば、邪教徒たちは、その祭壇に古い力……危険な強い妖力を呼び出して、呪法でそれを支配しようと試みていたという話だ。

――力はアルディーン、または『闇の皇子』と呼ばれていた。

その力はたしかにある時期、七賢人のものだったようなのだが、邪教徒たちはおのれの呪術の限界を知るべきだった。

なぜなら。

呪術・魔術というのはすべからく旧世界の知識であって、完全な形で残されているものは、いまやどこにもない。だからこそ、賢い人々は不完全な呪力、魔界との深いかかわりを避ける……魔力には裏切りがついてくるからだ。

七賢人の〝力〟もある日暴発して、邪教を神殿もろとも滅ぼしてしまった。

――邪悪な探求者たちは滅びたが、ネオ・ナリタの呪いはこの時からはじまる。

7年あるいは17年ごとに、七賢人が呼び出して鎖を切った魔の力が、旧市街で復活するようになってしまったのだ。

超常の強い魔力……ただし誰にも従わず、コントロールすることさえできない災厄の代

物。

従って、連邦への自治区の申請などは一度もなされなかった。

ただ人々は、家族をつれ、潮が引くように旧市街から離れていったのだ……残されたのは、ほかへ移る力のない弱い者か、犯罪者のどちらかである。

――こうして、ネオ・ナリタの一角に、類をみない無法地帯ができあがった。

そこでは、7年あるいは17年ごとに、古い悪霊が蘇るのだ。

それはどうやら血に飢えていて実体がなく、旧市街にいる住民をかならず一人、新しい宿主にしてしまう。宿主となったものは、妖魔にとり憑かれて人並みはずれた能力を得るが、あまりの妖気の激しさに、心や人間らしさのいっさいをなくしてしまうのだ。

瞳が赤く変じるのが、その第一の兆候だ……彼らは殺されるまで、妖魔の操り人形になって、目に入る者すべてを殺しつくす！

『魔都ネオ・ナリタの闇の皇子伝説』。繰り返す惨劇は7度まで続いた。

――だが、アルディーン復活の7度めの年がきた時。そこには涼・雨宮という少年が待っていた。

涼は……もとから旧市街の住人ではなく、とある事故のため、市のはずれにあったアカデミアから迷いこんできたのだった。

わずか16歳にして、最高学府アカデミアを、首席で卒業するはずだったほどの英才児。

ネオ・ナリタの妖力は、あらたな――そして完全な――宿主たるべき者に出会った。
きわだった頭脳、純粋な心、無垢な勇気。
運命は時に一人の人間に、これだけの希有な資質を与えることがあるのだろうか。
だが、運命は同時に与えただけの試練を用意する。
――涼・雨宮にとってのそれは、闇の皇子の呪縛である。
並の者では魂まで裂かれてしまう、強大な呪力のエネルギーを、彼は初めて受け入れて融和した。そしてアルディーンそのものの力を手にした。旧世界にも匹敵する魔界の力、妖魔の生命力。
だが『闇の皇子』の要求するものは大きい。古い呪いは涼・雨宮を通して、はじめて陽光を間近に見たのだ。彼らは決して涼を離すまい。
逃げようとすれば、ズタズタに引き裂かれてしまうだろう……。
「アルディーン……素敵だったなァ！　遠くからで、いつもみたいに素顔は隠していたけど」
スラムで生まれてスラムで育った真夜子にとっては〝力こそすべて〟……かたくそう信じている。長い長い間、恐れられてきたネオ・ナリタの妖力を支配したアルディーンは、もちろん最高の憧れの的だったのだ。
「街の人たちの中には、あの方をまだ怖がる人もいるけど……」

〝アルディーン〟の悪夢を忘れていない者も、もちろんいる。あれもいつか妖気に負けて、血に飢えた怪物になって人々を襲うのではなかろうか？

「大ウソよッ！　あの方だけは大丈夫だわ！　だってそばで会えばすぐわかるわよッ、怜悧で知的で気品があって……」

とにかくヒーローだ。記者としての全能力をそそいでプロフィールを集めてさえいる。

〝顔はわからないけど、髪の色はたぶん黒で、高等教育を受けていることは間違いないの。それでこの街を救ってくれたっていうことは、ウーン、そうね……素性は案外、雪村市長の身近あたりかも？〟

「背だってすっごくスラリとしていて素敵、身長は絶対１８０センチ以上ねッ」

――そんなにあったら苦労するもんか！

たびたび女の子あつかいされた屈辱の思い出の数々に、一瞬、目がランと光った。

涼とアルディーンは、もちろん同じ身長・体型をしている。真夜子のノートで、なぜアルディーンのほうが高く見えているのかは……永遠の謎である。

「若々しいけどすっごく大人。渋いのよッ。年齢は25歳くらいかしら？」

涼が真夜子の記者としての能力を疑う一瞬である。

「図々しいのはわかっているのよ！　だけど、いつかあの方から打ち明けた話が聞けたら、あたし、それを本にして返せないかしら……」

――この真夜子という少女には、旧市街にはめずらしい努力家の一面があった。
スラムの子供……特に、旧市街の治安が、いちばんひどかったころに生まれた現在の十代は、読み書きすらまともに習わずに育ってしまった。
通りにでる年になれば、すぐにケンカやナイフの使い方を覚えたがる。読み書きなどできて、なんになるのか？　勉強をしてもスラムでは、上にのぼる道はあまりにも遠く長い。
そんななかで真夜子だけは、不思議なくらいがんばりをつづけたものだ。新聞記者になりたいという夢を持っていて、最後まで捨てないでやりとおした。
いま彼女の心の中で、新しい夢ができかけていた。
「ちゃんとまとまった本よ、誰に見せても恥ずかしくないような」
目をキラキラさせて、まっすぐ前をみつめる。そんなふうに輝く明るい瞳が、涼は何よりも誰よりも大好きだった。
――僕の中にある、温かくて大切なもの……。
そっと真夜子の横顔をのぞいていると、胸に不思議な感覚が広がっていく。痛いほどに温かくて、鼓動が速くなるのになぜか安心する……。
温かいもの。明るいもの。
それがどんなに大事なものかは、涼にはよくわかっていた。
――アカデミアで彼はたくさんの人々に称賛され、注目されていたが、とてもさみしく

て寒かった。

光り輝く白亜の学院なのに、どうしてここはこんなに寒いのだろうと、涼は……よく不思議に思ったものだ。

笑い声の響く温かい場所もあったはずなのだが、首席生徒の涼の姿を見つけると、誰もが他愛ない話などやめてしまい、称賛と羨望の視線ばかりで涼を見るのだ……わずか9歳で学院へ入学をゆるされたという伝説の英才を。なによりも入れてもらいたかった温かい場所は、涼が近づくたびにかき消えてしまうように感じられた。

いつでも一人で取り残されて、とても寒かった。

――だがこの街に迷い込んで、真夜子と出会ってから、涼は自分の胸の奥に、なにか温かい輝くものを見つけだしたのだ。

それは真夜子のそばにいると、もっと強くなる。

どこにいても、もう二度と〝一人〟にはならない――温かさはなくならないのだ――と気づいて、喜びで息もとまりそうなくらいだった。

――だってそれは僕の中にあるのだから！

明るい夢を見て笑っている少女のそばで、少年はそっと黒い瞳をふせた。

――大好きな真夜子。ごめんね。僕にはまだ打ち明けられない。

シミだらけの廃品置き場の倉庫を思い出していた。子供が二人だけで住んでいる……旧

市街でさえお粗末な住み処だったが、涼にはどこよりも温かな場所だった。

アルディーンは僕なのだと打ち明けて、あの家に帰れなくなってしまったらどうしよう。

この瞳が……妖魔の赤に変わるところを目の前で見て、その一瞬真夜子の目の中に、わずかな恐怖でも起これば、もう自分はどこにも帰れなくなってしまう！

――何よりも大事な温かい光。どんなに壊れやすいものかもわかっていた……。

〝ウソなんかつきたくない。でも打ち明ける勇気がないんだ、まだ……〟

涼はこの少女が好きで、少女がくれた明るい光を何よりも愛していると知っている。

だが漆黒の瞳はもう、闇をみつめる運命から逃げられない。彼の王国であり、人々の悪夢の底ふかくにある魔の世界を……。

もっと力があればいいのかと思ったこともあった。もっと大人になってみせれば、とも思った。

――だが、そうではない。大切なのは、胸の奥のこの光なのだ。

この光を強めよう。胸が熱くなり、輝くのがわかる……黄金のようなこの光を、どんな闇からでも輝くようにすればいい！

――もっともっと強くなれ！　その時にはきっと……。

「涼ったら、何をぼんやりしているの？　ちゃんと聞いてる⁉」

隣にいる弟分が黙りこくってしまったのを感じて、真夜子は力いっぱい脇をこづいた。

――アルディーンの話をするといつもこう、こいつ、すねるの！

涼は思わずこぶしを握った。

「すねてなんかいないよ！　もうッ……濡れ衣きせないでくれよ！」

こんなにも複雑な悩みを……真夜子はちっとも感じてすらくれない!!

フフン、と真夜子は鼻で笑った。

――ウソウソ。でも、しかたないわよね？　涼は弱虫で、アルディーンなんかの足もとにもおよばない臆病なチビなんだからさ！

真夜子にとって涼は第一に〝居候〟で、〝大弱虫〟だった。

スラムで生まれた真夜子にとって、優しいという言葉は臆病と同じ意味だと思っている。

涼が本当はアカデミアから来たのだと知ったあとでも、それはあまり変わらなかった。

結局、とんでもない世間知らずだということは、間違いないのだから。

〝アカデミアにいれば、たいへんなエリートでいられる……それがわからないのかしら？　バカな奴!?〟

あまりの無邪気さに、アタマにくることもあった。

――でもいいの、だって涼は本当にいい子なんだもの！

優しいのも、死んだ子猫のために涙を見せるのも、やめろと言っても涼にはできないらしい……自分は本当はそんな部分も、嫌いではないのかもしれない。

――あんたはあんたよ、涼……それだって、悪くなんかないわ。涼については考えれば不思議なことがたくさんある。〝泣き虫で臆病のくせに、どうして旧市街に残りたがるのかしら？〟たまに……ほんのたまにだけど、涼がそれほど弱くも情けなくもないと感じる時があった。

――アカデミアを捨てても、あたしのそばがいいって言ったわ。思い出すと胸がへんに熱くなる言葉。弱虫のくせに……まともなケンカ一つして見せない涼のくせに……。

一度も考えたことなどなかったが、真夜子にとって涼はたった一つの宝物だった。……慣れない優しい手をのばして、真夜子は涼の髪にさわった。

「忘れちゃだめよ、あんたには真夜子さまがついているんだから！　何があってもこの真夜子がついてんの。こわい時にはそう言ってやるのよ……あとできっちりやり返してやるから！　ね。わかった？　わかったら返事はッ？」

胸の光が、また少し強くなるのだ。

――同じ日の夕暮れ時。

ナリタ日報のオフィスでは、編集長が新米記者・真夜子の席を通りすがりに、デスクにき

てくれと肩をたたいた。

「はい編集長、真夜子です」

「あ、よくきたね！　まず、そこにかけてくれないか」

ナリタ日報の編集長は、まず始めに真夜子の仕事ぶりをほめてくれた。

「……入ったばかりなのに、特ダネをもう4本も抜いているし、先日の倉庫の事件の記事もなかなか凄いよ。ウン、文もよく書けている」

「そんな……ありがとうございます」

ウンウンと編集長はうなずいた。この少女は掛け値なし、いい新人だと思っていたのだ。

「ところで、お話というのは……？」

編集長はなぜか額の汗をぬぐった。

「ウン、じつは君に相談があってね。その……いささか微妙な頼みになるんだが……」

4日前からナリタ港に、豪華なクルーザーが停泊している。

純白の船体に、紫金のライン。たいへんに人目をひく。

船主の名前はレン・巧猿。

「香港の大富豪の家の当主なんだ」

それもただの富豪ではなく五星家と呼ばれる5つの最高の家格のうちの一つだ。

「香港五星家といえば、なにしろふつうの存在じゃないぞ！　連邦世界と同じほどの歴史があって、ひとつの街を代々動かしてきた名家なんだからな」

本物の大金持ちで、すべてにおいてケタが違うと、編集長が意味もなくうなってみせる。

「なにしろ超高速クルーザーを自家用に使っているんだからな。2年前から世界周遊の船旅に出て、ナリタ港を最後の寄港地にして香港へ帰るところなんだと」

美術品や宝石については、その道で知られたコレクターなのだそうだ。

代々の富豪なので教養も高く、インタビューができれば貴重な逸話が聞けることだろう。

そもそもこの手の有名人がネオ・ナリタにくるなんて、10年に1度あるかないか……。

「だから、ぜひインタビューをもらいたいのさ。そうだろう、真夜子君？」

「ええ……すごいですね！」

とは言っても、編集長がなぜその話を聞かせるのかがわからない。

――だって大金持ち・プラス・美術品・アンド真夜子・イコール無関係よね？

事件のかけらもないじゃないの……首をかしげていると、編集長がまた額の汗をふく。

「ところが残念ながら彼は、なんというか……非常にインタビューしにくい人間でね。金持ちだし、めったなことでは記者など船にあげてもらえそうにないんだ。特にウチみたいな地方紙はメチャ厳しい」

そこで……話がようやく微妙になってきたようだ。

「だがもしその記者が非常にきれいで、可愛かったら……ウーン、事情もかなり変わってくる気配があるんだ」

「ええッ、編集長！　それって、いわゆる……」

——色仕掛けというやつだ。

うんと若くて、うんと可愛いのが緊急に必要だという。

さすがに目をまん丸くしている真夜子の前で、編集長はやたらに両手をふった。

「いや！　いい手段じゃないのはわかっているが、ナリタ新報社も手をつくして可愛い子を探している最中なんだ……抜かれるわけにはいかないよ！　さいわい、こっちには社内にいいアテがあるじゃないか……なあ真夜子君？　どうだろう、まずは君に承知してもらえると、アー……非常に助かるんだがなあ？」

信じられない！　うつむいて爪をひねりながら、真剣に考えている。

——そりゃ、あたしだって取材にそういう手があることは知っていたわよ！　でも、そんなの考えたこともなかったもの！　嫌だわ……やっぱりきれいじゃないわよね？　もちろん毒をくらわば皿までって言葉もあるけれどッ、だけど……。

やっぱり、真夜子は顔をあげてキッパリと口をひらいた。

「編集長、やっぱり困ります！　すみませんが、あたし、そういうのは慣れてませんし……」

だが編集長は一瞬ギョッとした顔になって、両手をふった。
「違う違う！　真夜ちゃん、君じゃないんだッ……まさかそりゃあ無理だよ、不可能だ！」
「……不可能？」
「あッ、いや違う、まさかまさか」
血圧が上がったり下がったりしているのがひと目でわかる。ナリタ日報の編集長は、しばらくのあいだこめかみを押さえて、もう一度最初から説明をやりなおした。
「……はじめにキチンと言っておかなかったのが悪かったんだね、ウーン……若くて可愛いといっても必要なのは女の子じゃないんだ。女性が必要ならせめてニーナ君を出す……いやいや！　そういう話でもないんだ！」
この場合、必要なのはきれいな男の子であると編集長はきっぱり言った。
「どうも香港では、そのほうがうけるらしいよ。で、ほらっ！　男の子なら君の家に、メチャクチャ可愛いのがいただろう？　名前はたしか涼君とかいう……」
――ウソでしょう!?
「……編集長。それ……まさか正気で言っているんですかッ？」
真夜子が、恐ろしい形相で立ちあがりジリジリと彼を椅子ごとコーナーに追いつめた。
「およ……いや、真夜子君。落ち着いて……」
「本ッ……気でそんなこと言ったんですかッ!?」

爆風でガラスがたしかに2枚、割れた。
「不潔ですッ!!　不潔すぎるわッ……冗談じゃありませんからね！　たとえ業務命令でも、絶対にお断りします！」
キッタナイ!!　何考えているのかしら!?
「わかった、真夜子君……気持ちはわかるが落ち着いてくれんか……」
――落ち着けですって!?
「無理です！　いいですか、編集長、涼は大事な弟分なんです。きっちり健全なんです！」
「だから、もちろんインタビューだけだったら！　ちょい着飾って、うまく話をさせるだけ！　メモとペンを持って、レン・巧猿と軽くお茶を飲むと考えてくれればッ……」
インタビューだろうがなんだろうが、そんな野郎に涼を見せるだけでも嫌!!　話をさせるのも嫌!!
――100パーセント完全、真剣！　回復不能のお断りよッ！
そうでなくても竜巻のようなエナジーの真夜子である。こんなことが原因で生命を落とすのだろうか……編集長の頭にチラとそんな考えさえ浮かぶ。悪かった、許してくれ。どうせ死ぬなら天国にいきたい。
――おお神よ、バ……バイト代は……はずむつもりだったのです……。
「あらやだ、編集長！　それ、先に言ってくださればよかったのにィ！」

胸の前で、手を優しく組みあわせて、うつろなまなざしをあげた編集長の前で、明るい笑顔の真夜子がキャッと手をたたいた。
「あれ、編集長ったら……いつのまに机の下なんか入られたんですか？」
「あ……いや、それはべつに」
よろめきながら出てきた彼に、真夜子がすかさず肩をかす。
「……で、1時間につき、いくらですか？」
まかせてくださいと胸をはった。

「フッフッフ、可愛いわよう、涼」
翌日、朝から社につれてこられた涼は、いきなり服をわたされ、着替えろと言われたのにめんくらっている。
「いやァ、可愛いな」
「本当に可愛いのねえ！」
ここしばらく忘れていた種類の上着とタイ。シャツは借り物だがシルクだった。
「女子社員のヤマシナ君のだが、まあ着られるだろう」
「あの……どうして僕は着替えをしなくちゃいけないのですか？」
ようやく、機会をとらえた涼が周囲に訊ねると、彼らはなぜだか顔を見合わせた。

はじめは彼もパリッとした清潔な服がうれしかった。だが髪は熱心すぎるほどブラッシングされ、シャツにリボンタイをつけられ、コロンをかけられるにいたって、漠然とした不安が胸にうかんできたようだ。

真夜子がテキパキした口調で、質問をひねりつぶす。

「いいのよ！　あんたは言うとおりにしていれば……説明もさっきしたでしょう？　簡単なインタビューだけど、どうしても今日は記者の人手が足りないの。だからあんたにアルバイトで行ってきて欲しいのね！」

「でも、真夜子……これって、つまり取材だろう？」

「もちろんそうよ！」

――取材に行く時に、真夜子はいつもこんな正装をしていただろうか？

悪魔のような真夜子はペロリと舌をだした。

――いいところに気がついたじゃないの、居候！

だが、フフン、涼の弱点についても真夜子はとっくに知っていた。好奇心がとても強いのだ――しかっても、しかっても知らない人間のあとについていく――アカデミアから出たばかりで、人が珍しいのかもしれない。

インタビューの相手は外の世界・香港の人間だとふきこんでやれば、もう自分から行きたがることうけあいだ。



〝あんたの知らない街の話とか、大好きな珍しい話が、いろいろ聞けるわよ、きっと〟
「こういうのが香港の礼儀なのよ！　もちろん、嫌ならあたし、無理になんて言わないけど」
「えっ、真夜子、僕は嫌なんてぜんぜんッ……行くよ行く！」
――ほらね、計算どおり。
「それなら、ほら、メモとペン！」
とにかく、しっかりやって！　黒い髪をクシャクシャになでて、耳もとでささやいた。
「……バイト代もいいのだぞ！」
「うん、わかった」
それから、涼が編集長にインタビューのポイントを聞いているあいだも、真夜子はずっと涼のそばに立っていた。
――世間知らずの涼。あんたって、やっぱりおっとりしてマヌケなのよねえ！
だからこそ、この自分がしっかりしなければいけないと思う。
――だって、このお金が入れば蓄えが2倍になりそうなのだもの。引き受けたほうがいいわよ……この冬もあるし！
涼には旧市街での初めての冬になるでしょう？　コートとか、要るものがいっぱいある……つらくなくしてあげたいもの！　ごまかして行かせるのは悪いけど、話したって違いも

たいしてないと思うわ……だってこいつときたら、どうしようもなくお坊ちゃん！

「それじゃ、真夜子。僕、行ってくるね！」

真夜子はどうもまだ何か隠しているが、とりあえずベストをつくして行ってこよう。けなげに手をふって別れようとする瞬間、真夜子は最高に謎めいたことを言った。

……きついリボンタイをグッとひいて、真剣な顔を寄せると、

「いいわね、涼……とにかく油断しちゃ駄目よ？　百歩ゆずってヒザくらいならなでさせてもいいけど、それ以上なんかしやがったらブチなぐって逃げてくるのよ！」

「……ブチなぐる？」

――真夜子って、もっとはっきり教えてくれればいいのにと、ときどき思うな……。

しみじみとそう考えてタメ息をついた。隣でなぜか編集長も同じことをしていた。

だが、しかし、レディ・アリエナ号。

レン・巧猿氏の船で、涼はたいへん楽しい時間をすごしていた。

予想に反して巧猿氏は、すぐに船へあげてインタビューを承知してくれたし、編集長がチラリと言った〝気難しい〟ところもまるでなかった。

――なんだろう、こんなに親切で立派な、いい人なのにな？

レン・巧猿はほお骨の高い、異国的な顔だちの美青年だった。

深い茶の瞳にあう、青絹のスーツを着ていた。
洗練された話し手で、さまざまな見聞もとても広い。それだけでなくて、稀に生き生きした生気と冒険心を感じるのだ。たちまちのうちに、涼は心からこの人物が好きになった。
「それはうれしいね！　どうやら僕たちは気が合うみたいだね？」
巧猿氏は笑いながら、涼にさまざまな美しい品やアルバムを見せてくれた。ヒザについてはとりあえず注意しているが、何が注意なのかはまだいっこうにわからない……。

――船内をひと回り案内してもらってから、お茶をごちそうになった。
「最新鋭の設計クルーザーで、航路はコンピューターで目的地まで自動制御されているんだよ。エンジンは7機で、時速80ノットまで楽に出せる」
豪華な船の中でも、巧猿氏個人の船室は涼を特に驚かせた。まるでどこかの庭園のあずまやをそのまま運んできたみたいに、風変わりで、しかも魅力があるのだ。
――レン・巧猿は18歳の時に香港を出港して、いままでこの船ですごしてきた。
2年間各国を見てきたと言っていたから、いまはちょうど二十歳なのだろう。2年の航海を終えて、ようやく香港に帰るのだと懐かしそうに言う。
2時間あまりのインタビューの中で、涼がいちばん魅かれたのもその故郷・香港の話だった。

「ほかの都市とくらべると、いささか風変わりで底が知れない部分があるといわれるのが香港さ。だが僕にはどこよりも好きな街だ。香港の人間は、美人と商売とお祭りには弱いものでね……もうじき、いちばんの大祭・元宵節が始まるよ」

彼自身、それに間に合うように帰路を急いだのだという。

「元宵節……ですか？」

涼にとっては、初めて聞く名前だった。そもそも自治区であるあの街について、アカデミアで育った涼はあまりよく知らない。

巧猿は笑顔で説明してくれた。

――香港は地図で見るとおりに、三日月形をした奇妙な島だった。

三日月がちょうど上下にわかれるように海で分けられていて、上の陸地を本島……下の陸地を新界と呼び習わしているようだ。

二つの間に橋は特にない……人々はいつも小船で行き来する習慣になっていた。

「新界は本島よりもやや面積が小さくて、三日月形の下にあたる部分だよ」

香港の商業、行政の中枢はすべて本島にあるという。

レン・巧猿のような――名家といわれる財閥の屋敷も――たいがいは本島にある。

「だが、いわゆる香港らしい部分はほとんどといっていい、新界にあるのさ。香港のもっとも香港らしい部分……つまり香港というところは、この連邦下に旧世界の遺産と共存する数

少ない街だからね」

「旧世界の……何と？」

「魔力と、さ」

その時、涼と巧猿がおたがいのもう一つの面に気がつかずにいたのは不思議なことだ。

巧猿のゆるやかな笑顔が、ふと奇妙な角度になる……さまざまな事を少し知りすぎる青年の表情だ。一方、メモをとっていた少年の瞳が一瞬とても奇妙な光を見せた。

レン・巧猿は語る。

「魔力に興味はあるかな？」

……メモをみつめたままで、少年がただうなずいた。

「香港にはね、古い世界から続いた本物の魔力が、まだいくつか残っているよ。信じてはいないかな？　まあいい、連邦世界の街では、あまり信じる人もいないものだからね……だが香港の人間たちは知っている。つまり……古い言い伝えや呪文のなかには、時には本当のものがあるってことをね」

ふと、彼は思い出した。

「そういえば、このネオ・ナリタにも何か妙な伝説がなかったかな……闇の皇子とかいう？　7年に1度、蘇って人にとり憑き、人ならぬ力を与え、ひきかえに、その者の魂を食い尽くす悪霊とか……」

「……ありました、ええ」
——オッ、この子はなんて奇妙な笑い方をするのだろう⁉
ふと息をのむほどの、何かが……妖気が、なんの構えもない巧猿の寸前で立ち上り、一瞬、前後を忘れた。
「あ……いま、何の話をしていたのかな……？」
「新界と魔力のお話を」
——そうだ、新界には魔力の末裔がまだ存在している。
街を歩けば本当に〝呪術士〟の看板が見られるよ、と巧猿は笑いながら言う。
恋する娘たちは占い師の助言を聞きにいく。海に出る男たちの胸には、かならず航海の安全を護る魔符がある。
レン・巧猿は手をたたいて、この船の乗組員を一人よんだ。
「漢……漢、ちょっとここへ来てくれ」
あらわれたのは古参の航海士で、香港からずっとこの船に乗りこんでいた乗員だった。
「漢はね、正真正銘、新界の船乗りなんだよ」
日に焼けた老航海士がうなずいた。
「ネオ・ナリタの記者くんに、君の護符を見せてやってくれないか？」
新界では8割近くの男が、腕のよい船乗りであるという。この漢という名前の航海士も、

腕利きで、アリエナ号の操縦は、巧猿より全権をあずかるほどの信頼をおかれている。

老航海士はこころよくうなずいて、上着を脱ぐ。

「この漢の護符は徹底していてね。ハリケーンの中でも絶対に身体を離れないように、彫りこんでしまったわけなのさ」

シャツをあけると、ぶあつい胸いっぱいに見事な呪符が入れ墨になっているのだ。アッ……と、思わず息をのんだ涼に、巧猿が笑いながらうなずきかける。

――だけど、本当に……力になることがあるのだろうか⁉

〝ありますとも！〟と、漢航海士が断言した。

彼がまだ若い船員だった時、嵐にあって甲板から一人はじきとばされてしまったことがあったという。

救命胴衣をつけていたから、かろうじて近くの暗礁まで泳ぎついたものの、海は暗く、通信機はおろか信号灯ひとつ持ってはいない。発見されるまでには凍え死ぬ、と覚悟を決めたのだが、護符が夢で母親に暗礁の位置を教えたのだという。

「ありがとう、漢。ついでに僕と、この記者くんにお茶を」

ごましお髪の漢航海士は、ニッと敬礼して出ていった。巧猿はちょっと脱線して、マホガニーの机の引き出しから、あやしげなコレクションを出して見せてくれる。

宝石類、奇妙な柄のついたナイフ、不思議な模様のカード……。

「白状するが、僕は美しいものの次に不思議なものに目がなくてね！　旅のあちこちで見つけたのもあるが、本当におもしろいのは、やはり香港から持ってきたものだったなあ」

〝たとえば、これ〟。ひと組の古ぼけたカードを取って、涼に見せようとした。

「これで占って外れることはないという魔力のカードだよ。香港の知人にもらいうけた」

――まさか、そんな？

「本当さ。ただし占うことは、恋に限る！」

〝あッ……僕、やっぱりいいですッ！〟、のばしかけた手をあわててひっこめて赤くなっている涼を見て、クスクス笑いながら巧猿はカードを引き出しにほうり込んだ。

……レン・巧猿はさらに言う。

「五星家というのだって、もとは呪術士の家柄だったんだよ」

非常に力のあった5人の術者たちの、それぞれ末裔であるということだ。

「ミスター・巧猿……あなたもなのですか？」

「そう、系図によればねっ」

いまでは、五星家のどの当主にも魔力と呼べるものは伝わっていない。ただし、言い伝えが本当である証拠には、五星家にはある強力な術具が――各家に等しく一つずつ――遺されているのだ。

それは美しい5個のクリスタルだという。

「クリスタル……？」

黒髪を小さくゆらして、首をかしげた。レン・巧猿はその姿を見て、チラリと歯を見せた。

香港呪術の特徴は、クリスタルと呼ばれる術具の力を借りることなのだが、この少年記者は、まだそのことを知らないらしい。

さっきの漢航海士の護符にしても、どこかの術士のクリスタルで彫り込まれたものに違いないのだ。

新界のクリスタルは大きさも形状もそれぞれに違う……手にする術士の能力によって、使われ方もずいぶん違ってくるらしい。

「その中でも五星家のクリスタルは特別でね。元宵節のためにしか働かない性質を持っている」

そして不思議なことに、五星家の血筋から魔力の素質が消えうせたいまでも、まだそれぞれの当主に従うという。

「……元宵節、ですか？」

涼には聞き慣れない名前だが、

「そうさ、君……4年ごとに行われる、香港最大の大祭なんだよ！」

祭り好きといわれる香港仔の血が騒ぐのか、レン・巧猿の瞳が輝いた。

それは自治区・香港の海の祭りだ。

「香港では五星家と当局が……責任をもって4年に1度、これを執り行うことになっている」

五星家の当主たちにとって、元宵節の日に各家のクリスタルを携えて集まることは、相続の条件にすら入っていた。

その一人レン・巧猿もいま、こうして香港への帰路をいそいでいる。

「元宵節の夜には、鏡のように光る海が見られるのさ！」

光る海。涼が瞬間、ハッと顔をあげた。

香港の人々はみな――本島か、新界かを問わず――はた目には不思議なくらいこの祭りを愛し、楽しみにしていると巧猿は語った。それには理由もあるのだ。

「元宵節の夜は、五星家の船が海に進むことからはじまる……」

香港・五星家の5隻の船が、そのほかの大商人の船などを従えて、海上の……香港の湾のちょうど中央にある小さな神殿をめざすのだ。

――それは島ともいえぬような小さな陸地で、満ち潮になるころには、ほとんど波の下に沈んでしまう。

わずかに浮かびあがっているところは、不思議にも小さな祭壇の形をしているのだ。香港の人々はこの小島を『元宵神殿』と呼び習わしている。

「その時、海はいつも鏡のように光っている」
巧猿が、ふと夢見るような口調で言った。
「美しい光景なのだよ……」
4年に1度。元宵節の夜にだけ、香港の湾は輝きだすのだ。真昼の黄金のような、力強い光は、海の底ふかくから沸き起こってくるようだった。
五星家の船はそのさなかを進み、『元宵神殿』へ到着する。
「船から小島に降りたつ時、それぞれの家の当主は自家のクリスタルを捧げていく。島はそのまま天然の結界の役割をしているのかもしれない……五つのクリスタルがすべてその場のなかに入った瞬間に……」
香港の海上の光は、まっしぐらに矢のように元宵神殿へと集まり、その岸辺から天をめざして立ちあがる。
「遠くから見ると、天をめざす巨大な光の柱のように見えるのだよ！」
それは連邦下のほかのどの地区の祭りとも違う、独自の現象だ。だからこそ、連邦はこの地を自治区にせざるをえなかった。
……目をみはっている涼に、巧猿がほほ笑みかける。
「あの光は……僕は何にたとえたらいいのか知らない。心を洗うような、この世のものならぬ光なのさ」

「それはなぜ……起こるのでしょう!?」
「知らない……香港では今はもう誰もそのわけを知らない」
レン・巧猿は首をふった。
「昔……300年ほど前には、五星家はすぐれた呪術士の集まりだった。彼らがクリスタルを子孫に残し、4年に1度の祭りを絶やさぬように言い伝えたんだ」
連邦設立のころに、わずかに残っていた資料もバラバラになってしまったらしい。
しかし、香港ではまだ誰も、この祭りを忘れようと思ったことなどないという。
「なぜなら……いや、あの光を一度でも見れば君にもわかる。懐かしい、すべての罪が許されたようにさえ感じる、不思議な魔力の海をね……香港の街では、元宵節の夜に死者たちがあの岸から、天に還るのだという人もいるんだよ」
香港、華やかで油断のならない街。連邦で数少ない大貿易の中継地点で、富と成功に生命を賭ける者たちが集まっている……ネオ・ナリタとはべつの意味で危険なところだ。
幸運をもとめて花火をちらす街でありながら、人々の欲望が真の大事をひきおこさずにいるのは、たしかにあの祭りのおかげなのかもしれないのだ。
「4年に1度のあの光が、人々の心を洗いながしてしまうようだよ」
悲劇を招くほどの執着や憎悪の多くが、その夜、形を変える。多くの罪が許しをえる。
「それだからというわけでもないが、香港では契約や負債の多くは4年を単位に……元宵

節をひと区切りにして結ばれる傾向があるねえ」

万が一の失敗が過度にむごく裁かれぬようにという、商都の本能であった。

「駆け落ちも、この年にはやたら多いんだよね！」

レン・巧猿はそう言って歯をみせた。

考えるよりも先に、涼の口から言葉がでていた。

「僕も……光る海を夢で見ていました。本当にあるのなら、見てみたいなあ！」

夢で？　レン・巧猿の目がキラリと光った。

「それはおもしろいね！　僕もぜひ……見せてあげたいよ！」

涼は疑いもせずにうなずく。レン・巧猿は話を続けた。

「元宵節が楽しみにされるのは、それだけじゃないんだよ……なにしろ香港仔はいつも船で動くものだが、元宵節の日には、どの船も飾りたてて花で一杯になるくらいだ」

派手好きなのが証の香港仔が、面目にかけて飾りつける。

「もちろん人もね。フフフ、派手好みは香港では美徳の一つさ、思いきって豪奢に凝る！」

花と金で埋まったような船が、湾いっぱいに群れ集う。

すべての望みがかない、すべてが許されるカーニバルの夜だ。

「ああ、本当にぜひ見てみたいですね！」

レン・巧猿はにっこり笑った。その時、ノックの音がして、

「レン船長、お茶をお持ちしました」
さきほどの漢航海士が、銀の盆を持ってかえってきたのだ。〝ありがとう、入りたまえ〟。
巧猿は新しくきたポットから、珍しい香りのする赤い茶をついでくれた。軽い酸味があり、ハイビスカスだと言う。
「どうかな？　口にあうなら代わりを……」
2杯めの茶をそそぐ時、巧猿が急に話しかけて気をそらしたので、その中に彼が何を入れたのか見ることができなかった。飲みほして数分で、効きめがあらわれる。
ミスター・巧猿は新しい表情をしている……涼は、ぼんやりと考えたのが最後だった。
さっきまでは気づかなかった顔……なんだっけ？　うまい言いあらわしかたを、たったいま耳にしたはずだけど……。
――ああ、香港だ。底知れぬ……っていう感じなんだ。
絨毯の上に倒れて眠るアルバイト記者を、見おろして巧猿の茶色の目がにっこりと細くなる。漢航海士が入り口からヒョイと顔をだして肩をすくめた。
「こうなると、すぐ出港ということになりますかね？」
「うん、もちろんだ。さっそくにね！」
〝海賊あがり〟の彼は頭をふりふり出ていった……この大将にも困ったものだ。
巧猿が愛想よく言う。

「おやすみ。目が覚めたら香港だよ」

予定をくりあげてアリエナ号が出航し、港で遊んでいた子供たちがレコーダーを届けにきた事態になって、編集部は大パニックに陥った。

「……編集長ッ、どうしてくれるんですか⁉」

半分泣き声になった真夜子が、血相を変えてつめよっていく。

——そこまで変な人だなんて、ぜんぜん言っていなかったわ‼

ほかの記者たちも右往左往して駆け回っている。

「いや……これは予想と話が違う！」

編集長の顔色も尋常ではない。薬がききすぎたのだ。

「と、とにかく……警察に連絡をとって、レン・巧猿氏の船を止めてもらおう！」

ナリタ署に緊急手配の電話をすぐかけるが、アリエナ号は手回しよく、昼すぎには外海に出てしまっている。

「……最新船だから、こちらのほうで追いつけるかどうか？　とにかくやってみてください！　もし逃がしたら、なんですか……香港の海上警察にまわすッ？」

真夜子が横から受話器をひったくって、なにやら怒鳴っている。

「香港ですって？　冗談じゃないわよッ……それまで涼を悪党の船に乗せておけって言う

の!?　そんなことできるわけないじゃないの、バカッ。あれはね、旧市街一の世間知らずなのよ！　なんかされたって泣くだけなんだから!!」

たたきつけるように電話をおくと、真夜子はクルリと踵を返して、足早に部屋を出ていこうとした。

「ど……どこへ行くんだ、真夜子君？」

「決まってます、香港です！」

ふりむいて矢のような指を編集長につきつけると、

「もうこうなったら、あたしが行くしかありません……行って、取り返して、牢屋にたたきこんでやるわ、レン・巧猿!!」

風雲急を告げる香港。だが、さすがに編集長は青ざめながらもうなずいた。

「わかった。とりあえず、香港警察にはこちらから連絡をしておく……待ちたまえ、パスポートも必要だぞ!!」

ナリタ日報から緊急紹介状で、連邦正規のパスポートはなんとか手に入った。

香港警察へも打電した。

全部で1日半という奇跡のようなスピードで真夜子を香港に送りだした編集長は、旧市街のオフィスにもどってくると、残る気力をふりしぼって最後の大問題にたちむかう。

——どうやって、ぜんぶ経費で落とせばいいだろうか？

さて……人は時として涼の外見だけを見て、実際よりも〝か弱い〟生き物であると思いがちなのだが、事実ではない。その証拠に、海上で目覚めた時の涼は、文字どおり烈火のごとく怒っていた。ナリタ港を出てから、ちなみに15時間たっている。

「どッ……どういうことですか！　これはッ？　僕はどうしてこんな海の上にいるんですか⁉」

レン・巧猿は笑いながら両手を広げ、船出してしまったものはしようがないと、おおらかに笑顔を見せた。

「元宵節が見たいと言っていたじゃないか？　こうなったら、君もおとなしく香港へきてみたらどうかね？」

冗談ではない！　涼は怒りで目がギラギラしている。こんな時は真夜子ゆずりのスラムのタンカだってどんどん出る。

「ふざけんなよ、バッカ野郎！　悪党、イカサマ師ッ……やいエテ公、船をネオ・ナリタへ返せったら！　返せッ！」

つい口をおさえようとした船員を、意外な機敏さで投げたおした。

「……ミスター・巧猿、これはほとんど誘拐ですよ‼」

怒ってはいても、このあたりが涼のまだ甘いところだ。〝ほとんど〟ではなくて完全な誘

拐なのだが……巧猿はニヤリと笑った。

――おやおや、スラムの子にしてはずいぶんおっとりした性格なんだね？

思ったよりも勇敢だが、まだまだつけこめる。彼はわざとすごみのある口調をとり、飾り棚から柄のついたムチ（柄の部分が宝石工芸品だ）をとりだすと、空中で強く鳴らした。

「おとなしくしないと痛い目にあうよ！」

「なんですって⁉」

ふりむいた涼は、信じられない光景を見て目をみひらいた。さきほど、涼がいきおいで床にたたきつけた船員が、ぶつけた腰をさすりながら起きてきた。

巧猿は笑顔で彼を前に呼びよせると、いきなりその胸にナイフをつきさしたのだ。

――アッ……なにを‼

涼の見ている前で、船員はうつぶせに倒れた。あまりのことに声もでない彼にむかい、きわめて冷酷に脅しをかける。

「ネオ・ナリタの坊や、よく見ておくことだね。君が元宵節を見たいというから、つれてきてあげただけだ……誘拐犯あつかいされるのは心外だな！　僕は自分の船での失態は許さない。反抗されるのはもっと嫌いだ……あと一言でも逆らえば、次は君の番になるよ？」

「人殺し‼」

叫ぶと同時に、べつの船員の胸にナイフが飛んだ。

「あと一度だけ、チャンスをあげることにする……」
思わずあとずさって左右を眺めた。残っている船員たちは無表情にただ前を見ている。青ざめた顔で口をつぐんだままの涼に、巧猿が悪魔のような笑顔で笑いかけた。
「わかってもらえてうれしいな。おとなしくして、この船の航海を楽しみたまえ……夜が明けたら、アリエナ号は香港につく」
彼を5号船室へ。巧猿の指示で二人の船員が涼の腕をとって、下へつれていった。
「漢、お前がついていけ。バカな考えをおこさないように」
足音がしだいに遠くなっていく。
「クックッ、ククク……」
優美な船室にレン・巧猿の低い笑い声だけがするころになって、足もとの死体がようやく息をついて、顔をむけた。
「レン船長……もう起きてもいいですかね？」
「いいよ、いいよ！　ありがとう！」
死体・その2も目を開ける……胸にささったナイフ（刃の部分がオモチャ）を巧猿に返しながら、〝ちょっとやりすぎではないですかね？〟と言った。
「船内であまり興奮されて、ケガでもしては可哀相じゃないか？」
「もう少しべつの方法があったはずですがねえ……」

もどってきた漢航海士が、かなり非難の目で見ながら入室してきた。
「あったと思うが、あれほど楽しくはないだろう！」
レン・巧猿の〝楽しさ〟は、他者にはどうも理解しにくい。
「うん、楽しかった！　まったく純情ないい子だね……あの目、見たか？　本気で君らの死を怒っていたな！」
「……知りませんよ、やっかいなことになっても」
とっさにつきあって倒れてしまったが、いまではかなり後悔している男たちが顔をしかめている。
「香港についたら誤解は解くさ。だが、それまでにあと1回くらい芝居できないかな……」
船員たち全員は、顔を見合わせている……巧猿はしかし上機嫌だ。
「ともあれ諸君、協力ご苦労！」
そう言うと、ワインとグラスの一式をとりだした。〝幸運の祝杯ということでね！〟
ごちになりやす、と船員はよろこんでグラスをうけとった。
「でも、どうなさるつもりなんですか？　あの子は」
あらためて、片方の船員が訊ねた。巧猿は真剣に眉をひそめて、
「さあ……どうしようかな？　そこはまだ考えてもみなかった」
グラスをもった船員が、思わず口をあんぐりあける。巧猿は言い訳をするように、

「いや、その……とりあえず、あまり可愛いからつれてきたのさ。さて、どうするかな？」
「あきれたよ……本当に！　なあ!!」
――レン・巧猿は、さまざまな意味で生粋の香港人である。
豪胆で、ぬけ目なく、美しさになぜか過度な価値をおく。香港の申し子のような男なのだ。彼の常識では、あれほどの器量の子供がネオ・ナリタなんかの野蛮な街にいることがすでに不合理だ。
――なにしろ繊細さよりも、なぐりあいの腕を競う粗野なところだからな！
放っておいて顔に傷でもつくられたら、考えただけで惜しくてならない。真珠を見て、はきだめに放りだしておくバカがどこにいる？
より洗練された香港につれていくのは……香港仔の正義といってもいい！
「未成年ですしね……ケーサツがうるさいんじゃないですかねえ？」
「案ずるな、いとこが香港警察の署長だ」
レン・巧猿はケラケラと笑って、再度、祝杯をあげた。
最後の寄港地、ネオ・ナリタで、思いがけない掘り出し物（ただし生き物）が手に入ったのは、じつにラッキーだった。
――長旅の記念に東洋の真珠をつれて帰ろう。なかなか清楚な趣があるぞ……。
2年もの旅だったので、最上の記念品が欲しかったのだ。あの少年なら、愛しい香港への

なによりの土産になる。

「……彼もね、落ち着いて考えれば香港のほうが絶対に気に入るよ」

——なぜならあれは〝旧市街〟の少年だったからだ。

「悪名高いスラムの街だぞ……どう見ても借り物のシルクのシャツできた子供さ。いずれ香港について、4、5日もすれば優雅な生活にも慣れてくる。そうなればどちらがいいかは、自分からわかってくれるというものさ……だろう？」

——見かけが第一！　それがすべてなのが香港仔だとも！

巧猿は自信をもって胸をはった。

「あんな顔なら真珠やレースがきっと好きに違いない。それで笑顔を見せてくれるよ。ネオ・ナリタのことなど忘れてね！」

「そうですかねえ……」

それまで黙っていた漢航海士が、ふと疑わしげに首をひねった。繰り返して言うが、彼はこの船ではいちばんの古参で、経験の豊かな老航海士だった。巧猿が彼をジッと見た。

「……漢の意見は違うというのかい？」

漢航海士は首をすくめた。

「意見って、そんなたいそうなんじゃありませんや。ですがどうも、首のへんがチリチリする感じでしてね。あの子は……どうも、ただの子供ではないような気がするんですがね」

——どうも何か……見かけどおりのものではないような気がするのだが……。

まさか！　巧猿と若い船員は笑いとばしたが、どちらが正しいかすぐにわかることだ。

北西の海上から嵐が近づいてきている。

一方、涼を船室につれていった船員たちは、あかりをつけたあとで外からカギをかけた。

一人になって、あたりを見回す……巧猿が5号船室と呼ぶこの部屋は、1等の客用船室で、豪華だが窓の一つもない部屋だ。アリエナ号のちょうど中央に位置するらしい。

——外が見えない。

座ってこぶしを握りしめて、不幸な二人の船員のために少し泣いた。

——ごめんなさい、何もしてあげられなかった……。

とっさのことでどうすることもできなかった。許せない！　瞳に青い稲妻がひらめく。

「ひどすぎる……あの人たちが何をしたんだ！」

正直にいえば死んだふりを。涼にも——突然であれほど驚いていなければ、すぐわかるはずなのだ——そら、血の匂いを少しも感じなかったではないか？

つまりは巧猿にのせられたのだ。

——レン・巧猿、なんて悪魔なんだ！　人殺し！　人殺しめ!!

「チクショウ！　絶対に許さないからッ……」

……ドアに目をやって、しばらくみつめていた。

アルディーンの力があれば、ここを破るのはたぶん簡単だ。力が欲しい……目を閉じ、自分の奥に眠るネオ・ナリタの妖魔を呼びだそうと集中した。いつでもたやすいことなのだ……いまもすぐに手ごたえがあった。瞳の色が赤く変わりかけていくのを感じたが……。

——どうしたんだろう？

ふいに糸がプツンときれるように、集中することができなくなった。妖気がスッと遠のいていく……かわりに涙があふれてきた。

涼はくちびるをきつくかんだ。

突然、妖魔の力が入らなくなった理由はわかっていた……怒りと同じだけ、悲しかったのだ。彼には好意を持っていたぶん、心が深く傷ついていた。

こぶしを目にあてて必死で押さえるが、とてもつらい……涙がとまらないのだ。

——レン・巧猿……いい人だと思ったのに……思ってたのにッ！

涙は妖魔の気配を遠ざけてしまう。まして、こんなに気持ちがバラバラではいけないのだ。だけど……涼は涙をこぶしでぬぐって立ちあがり、懸命にあたりを見回した。

片隅に、端末機も設置されている。ビジネスで必要な客用に置いてあるのだろう。

「動くの!?」

すぐさま駆け寄って、スクリーンのスイッチを入れた。青白い光源に照らされて、はっき

りと勝利のほほ笑みが浮かんだ。〝これがあれば〟

——巧猿は、この船がコンピューターで制御されていると言っていたんだ……。

それならば、この端末機も全体の一部に属しているはずだ……ここから中枢に食い込んでやることは不可能ではないはずだ。

このほうがいい！　僕ならやってみせる！　涼はグイッと涙をぬぐい、端末にむかった。

「ようし、人殺し……仇はすぐにとってやるから！」

あわてふためく航海士が巧猿をたたき起こしたのは、真夜中もすぎたころだった。

「レン船長!!　起きてください、えらいことですッ！」

なにごとか!?　とび起きた巧猿は、航海士の顔を見るなり、すぐにただごとではないと判断して上着をつかんだ。

「どうしたんだ？　嵐が激しいのか？」

アリエナ号が香港へむかう途中に、嵐が近づいていることはとっくにわかっていた。この船の出力なら、暴風雨でもまるで心配はないはずなのだが……。

「嵐も嵐ですが、とにかく来てください！」

駆けだすあとからついて行くと、航海士は機関室に行き、巧猿もそこで愕然と目をみはった。自動制御のプログラムが、次から次へと消えているのだ。

アリエナ号の航路を守る鍵が、かたはしから外されているようなものだ。
「ど……どうしたんだ、これは!?」
まるでその時をみはからったかのように、機関室に音声が流れた。
『レン・巧猿、この船の機関は現在僕が支配している……』
さらってきた坊やの声じゃありませんか……航海士と巧猿は顔を見合わせた。
『繰り返して言う。この船の中枢制御は、いま僕による指令だけで動いている……アリエナ号はのっとられている。港への無事な到着を望むのなら、巧猿氏に香港警察へすみやかな自首を要求する……』
――5号船室のコンピューターだ!
「……航海士、すぐ5号船室への送電を切れッ」
「駄目です、こちらからはまったく手がだせないんで!」
そんなバカな!!　思いもかけない痛烈な一撃だが、次の放送を聞いて巧猿の顔はカンペキにひきつってしまった。
『巧猿氏に告ぐ……要求が受け入れられない時は、アリエナ号のエンジンをカットしていくつもりだ。エンジンは7機。7機めまでに回答が得られなければ、香港湾内で船を静止させ警察に出向を要請する……そうなれば、自首のチャンスさえなくなるぞ!』
巧猿らの背中では、滝のように汗が流れる。

「船長ッ、この嵐に出力をカットされちゃあ！」
「いかん……あの子はこの外が嵐だとは知らないんだ！」
5号船室は船内の中央にあって、どんな嵐にも揺れのこない設計になっている。だから特別なのだ。船に慣れないはずの涼のために、わざわざその部屋を選んだのは、
――ちくしょう、大失敗だったぞ！
5号船室には窓もない。〝声〟は着々と、巧猿に自首をすすめる。
『ミスター・巧猿……心からあなたに自首をすすめます。どうか目を開いてください』
「どうするんですよ、船長!?」
いまやほかの船員たちもきて、巧猿を囲んでいる。
「……だから、あっしが、どうなっても知らないと言ったじゃないですか！」
――参ったなあ、あの子はハッカーだったのか？
旧市街の子供とあなどったのがまずかった……巧猿はイライラとくちびるをかんだ。
「5号室のドアは開きません……電子錠と、中から何か積みあげてあるみたいで」
「ウム……いま大嵐の中だと、聞こえるように怒鳴ってはどうだろうか？」
「信じるわけねえじゃないですか！」
手荒なことは、したくないのだ……腕を組み、考える巧猿の耳に放送の声が響く。
『よろしい、では第1エンジンをカットする』

「5号船室のドアをぶち破れ!!」
……船長命令で、さっそくハンマーやドリルが船室の前に集められる。
「よしッ、やれ！」
中では物音を聞いて、涼が顔色を変える。
――まだ、あきらめないのかッ……悪魔ッ！　ようし！
『第2エンジンをカットする！』
「……まだ破れないのか!?」
「もう、ちょっとです！」
悲鳴に近い声で航海士が叫んでいる。第3エンジンまでカットしたところで、ようやくしつこい鍵が壊れた。
「おい坊や！　頼むからやめてくれッ！」
なだれこんできた船員たちの、ちょうど真ん前にいる男がそう叫んだ。
闘志をいっぱいにしてふりむいた涼の動作が、凍りついたようにそのまま止まる。
――いッ……生きている!?
その時、横からの大きな波がアリエナ号の船体を襲った。
出力を三つ失っていたクルーザーは、一瞬、木の葉のように回る……室内の家具や調度が、壁からはずれて人間に倒れかかってきた。

アッというまもなく、廊下まではね飛ばされる。

……機関室では係が懸命に、アリエナ号のエンジンを復活させようとしていたが、

「駄目です、船長。いまの波で機関がかなりやられました！」

「右舷から浸水がきていますぜ！」

「メチャメチャに流されています！」

その時さっきの船員が、ショックでまだ呆然としている涼を捕まえて、機関室につれてきた。

「……生きている、生きている、でもどうして……？」

まだ目の前の光景が信じられない。こきざみにふるえている少年の姿を見て、部屋中の船乗りがいっせいにため息をついた。

——しかたないやな……こいつァ船長の天罰だよ。

なんだか急に小さく、たよりなくなってしまったような顔で見上げる涼に、レン・巧猿もさすがにどうする気にもなれなかった。

「やれやれ……なんだ、ケガをしているじゃないか……」

たしかに右腕のシャツが破れて、血が少しにじんでいる。巧猿はチェッと舌打ちしてから、少し笑った。なにしろ外は凄まじい嵐で、千金をかけたアリエナ号も相当、破損をうけてしまったようだ……それでも巧猿は笑った。

「おい誰か、この子を手当てしてやれ！」

それからしばらくのあいだは、荷物のようにあっちにやられたりこっちにやられたりした。巧猿と船員たちはなんとか舵をとるのに、夢中だ。

――本島周辺の最悪の海流にぶつかったな。

どうする？　通信装置はすでに故障して役にたたなくなっている。送電が切れているのだ。係の船員は、予備の小型機をとりに走っていった。

「……とりあえず、新界に転進して流れをかわす。面舵転進！」

……10分後、アリエナ号はもう一度大きな衝撃をうけた。

「こんどはなんだ!?」

暗礁にのりあげたのかと思ったら、そうではない。レーダーを見ていた船員が、大声で叫んだ。〝船です！　他船と衝突しました！〟

「やっちまったかッ……船籍は？」

「あ……ありませんッ、まったくの所属不明船です」

――なにィ!?

すべての船員が顔を見合わせた。香港周辺の船であれば、本島・新界の所属を問わずに、自艘の名前と登録番号を発信し続けているものだ。それは特殊な周波数で、たとえ沈没しても発信し続けているはずなのだが……。

「アリエナ号の倍近くあるって？」

確認できる船体の大きさを聞いて、巧猿が眉をひそめた。巨大な船。それなのに、この嵐の中で所属発信をしないのはどういうことだろう？

「まさか幽霊船じゃあ……」

海の男は迷信深いのだ。海図を見ると、あたかも新界のちょうど裏だ……この付近には昔からいろいろ妖しいウワサがあることを、誰かが思い出していた。

……この前の寄港地で聞いたのだ。

「最近、このあたりに魔の船が出没するから、どこでも避けて通るようにしているとかって」

「うっかりコースにした船は、皆殺しにされたとか……」

〝バカを言え〟と巧猿は一笑した。

密輸船か海賊、それとも……。その時ちょうど、船内に二度目の衝撃が伝わった。

ほぼ同時に、予備の通信機をかかえてきた船員が機関室にもどってきて報告をした。スイッチを入れたとたんに、狂ったような救難信号が流れだした。

〝ＳＯＳ、ＳＯＳ、ＳＯＳ……〟

――難破船ではない、このシグナルは何者かに襲われている船のものだ。

奇妙なのは、その中でも船名と船籍をあきらかにしないことだ……にもかかわらず、機関

室の乗組員たちの表情がもう一度変わった。巧猿が強くうなずき、
「よろしい、総員戦闘配置……漢、ウルマ、ついでに手のあいている者は銃をとって上甲板へついてこい！　状況を確認するぞ！」
同時に、アリエナ号からの救難信号も打たせた。
「待ってください、僕もッ」
隅にいて泣いていたと思われた涼が、パッとはね起きて一緒にいこうとしたが、
「馬鹿を言うんじゃない！　この子を適当な船室に閉じ込めておけ！」
「ワッ……」
奇妙なことはまだ残っている。これほどの必死の打電が流れているのに、付近にはアリエナ号以外の船影が見られないことだ……ともあれ、彼らは嵐の甲板に上った。
――甲板に出た巧猿らを待っていたのは、凄まじい雨と風だ。
デッキドアを開けた瞬間、横殴りの雨のまじった風が、体当たりをするようにぶつかってくる。船が大きく揺れ、すこしでも踏み外したら、
「……地獄へまっ逆さまだな」
「こんな嵐の中で、いったい何をやってるんでしょう？」
不安げな漢の声に、巧猿もうなずいた。たとえば海賊といえども、ここまで激しい嵐に姿を現すものだろうか？　いまや、彼自身はっきりと何か魔界に近いものを感じている。

「やっぱり幽霊船じゃ……」

見上げると、謎の船は高波の上からのしかかるようにアリエナ号にむかってきている。

「船長ッ、あれをッ！」

めざとい船員の一人が、悲鳴をあげて一点を指さした。

高波にもまれる船の上に、黒い人影がむらがっている。どこか異様で、獣じみた動きをする一群だった……彼らは舳先にむかって、たった一人の少年らしき影を追いかけていた。

嵐のために予測のつかない動きをする船の上では、追う方も追われる方も、思うように進むことができないらしい……それでも、奇妙な追っ手たちはジリジリとその距離をせばめているように見えた。

追われている少年はなかなか勇敢に、揺れる甲板の柵を伝って進んでいる。

「救命ボートを下ろす気かよ……命しらずな」

銃声が響き、少年がハッとよろめいた。肩をおさえ、なんとか船縁にしがみつく。

「チクショウ……撃ちやがったぜ、子供を！」

漢航海士が、いきどおった声でうなり、巧猿をふりむいた。

——だが、あの船はどこか変だ。

「まともな船じゃないかもしれないぞ……どうする？」

どうするもこうするもない、やつらは子供を撃っているのだ。漢が腕をふりまわしてわめ

いている。

「よし、助けるぞ！　いいか……きっかり3分後に、もう一度あの船にぶつけるんだ！」

すぐさま一人が命令を伝えに機関室へ下りていく。

黒い船の上では、追っ手がついに少年をとり囲んだようだ。ボートへの退路をたたれた彼は、そのままさらに舳先へ寄るしかない。

目をこらすと、追っ手の輪の中から何者かが一人進みでて、何か話しかけたようだった。何かは聞こえない……だが、少年は大声で怒鳴りかえしていた。

「死んでも渡すものか!!」

――彼は何か持っているんだ……。

稲妻がひらめいて、巧猿の目にも、彼が必死でかかえる何かがあるのがわかった。どうやら追っ手は、それを渡せといっているらしい。

追っ手の頭らしい影が手をのばしている。だが二度目の稲妻が輝いた瞬間、少年は胸にしっかりとそれを抱いたまま、舳先から身を投げてしまった。

「ウワア、船長！」

うしろで誰か叫んだ。巧猿の胸のなかでは、すでに1分……2分……3分……。

「……いまだ、行けッ！」

――アリエナ号は完全に舳先から、その船にぶつかった。

暗礁にぶつかる寸前の身体をギリギリで捕らえたのは、巧猿ではなくうしろの船員のロープだ……バタバタと全員が、船縁へ引きあげにいく。

しかし、彼方の船では奇怪な連中がアリエナ号の存在に気づいていた。

アッという間もなく、数人が人間離れした身軽さで甲板に乗り移ってきた。

「かまうものか、甲板からたたき落としてやれ！」

間近で見ると、いっそう気色の悪い連中だった。鉛のような顔色、声ひとつたてずにヒタヒタとせまってくる。しかもさっきは銃声がした。つまり何人かはライフルを持っているが……。

「……選んだ相手が悪かったなッ！　この船の乗員は船長の好みで、もとは海賊あがりって奴が多いんだよ……素人じゃないんだ、かかってきやがれ!!」

漢航海士の怒鳴り声にあわせて、手に手に獲物をとる。ロープ、ナイフ、海の上なら一人で三人前は戦えるという連中ばかりだ。レン・巧猿はニッと笑って手をあげた。

「やっちまえ、おう!!」

チェーン・ジャックと呼ばれる武器をふりまわしていた漢がまず、いちばん端でライフルをかまえていた男を倒した。暴発したライフルの銃弾があたり、敵のうち一人がのけぞって嵐の海に消える。

――だが最後にきた妖しい影が、この時進み出てきて前に姿をあらわした。

さっき、船の上で指揮をとっていたのも彼だったのだろう。顔は隠し、全身もスッポリと屍衣のような衣服で覆っている。背はかなり高い。

ほかとは比べものにならない邪気が漂ってくるのだ。優勢だったはずの巧猿たちが、総毛立つように数歩あとずさった。

「その少年を、こちらに返してもらおう……」

重い布に覆われた闇の中から、寒気がするような声が要求した。

「だ、だめだ！」

相手は何も言わずに、配下の男たちに手をかざした。一瞬、妖しげな集団を後光のような輝きが覆った。見たこともないまがまがしい光線である。

――ふたたび、むかってくる敵はライフルさえも捨てている。

「船長!!　こいつらおかしいッ……」

いちばん端にいて、侵入者とむかいあった男がまず悲鳴をあげた。なぐりかかっていった手が相手に触れるなり、いきなり焼けつくような痛みが走ったのだ。

思わず叫んでうしろに退いたが、手は何か黒い火がついたように、ますます激しく痛む。

「た……助けてくれ!!」

黒い炎は彼の身体を食うようにして、腕から身体へと広がっていく。

全身が火でつつまれたようになって、甲板を転がりまわっている。そして黒い火は次々に

残りの船員たちを襲い、甲板に倒した。漢すらやられた……巧猿は、一人になった。

「さて、その少年をこちらに返してもらおうか……」

――返しても、この船も生きて放すつもりではないな。

「こ……この船が、香港のレン・巧猿のものと知ってのことか⁉」

何かできるとしたら、逃げることだけだが。

それでも巧猿は、デッキドアに立ちふさがる形で銃をかまえた。数発、撃ってみたが、やはり効果はないのだ。足もとでは、黒い火につつまれた船員がうめいている。

「ほう、そうか……五星家の巧猿とは珍しい……」

黒い覆面の下で、妖しい敵がニヤリと笑う気配がした。胸の澱むような瘴気とともに、魔の配下たちが押し寄せてくる。自分でも情けないほど、恐ろしさで顔がゆがんでいた。

――く、来るなッ……来るな！

青黒い火につつまれた手が四方からのびてきて、巧猿がたまらずに悲鳴をあげた瞬間。

――突然、奇妙な燐光が目の前で爆発したように感じて、数人の魔手がのけぞってはね飛ばされた。

驚いて目をあげると、メインマストの下にいつのまにか、あのネオ・ナリタの黒髪の少年が立っていたのだ。

逃げろ、と呼びかけようとした声がでなくなってしまったのは、ほっそりした小柄な影の

周囲で、青白い燐光が躍りながら取り巻いていたからだった。
その光に触れた瞬間、男たちは倒れていた……まるでさっきの黒い火のように。
「お前たち……人間じゃないね？」
うたうような声で、笑いながら少年が訊ねていた。
――涼には甲板にむかった時から、なんとなくわかっていた。
もっとも厳重な小部屋に閉じ込められてしまったので、壊すのに時間がかかった。だが、機関室にいてさえ危険な強い妖気は感じられた。自分デナイ、ナニカノ気配ガスル。はげしい不安にかりたてられるように、涼は廊下を走りだしていた。ナニカ邪悪ナ気配ガ。
一歩外にでた瞬間、強い妖気の衝撃を感じた……同時に、アルディーンの魔性が完全に目を覚ましていた。
――涼の中で、目もくらむほどの妖力が不安にとってかわる。
異様なほど胸が高鳴るのだ。目の前にいるのは間違いなく敵だ……うっとりするような笑顔が頬に浮かんだ。殺意のある目が、四方から自分を取り巻いている。
「素敵だな！　初めてなんだ、僕以外の魔物に会うとは……ねえ、君たちは僕を相手にしてみないのかい？」
そう言いながら、自分から軽やかな足どりで忍び寄っていく。それは妖魔の本能だった。
燐光が死闘を求めて燃えさかる。戦いの味を……現実とは思えなくなった巧猿の目の前

で、あの子供が小さな牙を見せてニッと笑った。

黒い船からきた男たちは、少年の鬼火に押されるようにして数歩さがった。そして一人が宙を踏んで襲いかかると、

「……ギャッツ」

白い細い指が一閃し、指先から血がしぶいた。

飛びかかった男の顔に、骨にとどくほどの爪痕が残されている……続けて数人も同じに。

「……これはお前たちの相手にはならない、さがれ！」

覆面の妖気の主が男たちをうしろにさがらせた。周囲の妖気が高まるのがわかる……さっきよりもさらに強く、男が奇妙な手招きをすると、宙空から青黒い塊があらわれて、涼にからみついた。

「クッ……」

「殺せ！　絞め殺せッ！」

数メートルはあるが蛇ではない……黄色い目が三つ光っている。怪蛇のようなそれは、恐ろしい力と瘴気で獲物を弱らせ、絞め殺すのだ。

首筋に三重にも回り、ゆっくりと絞めていく……その喉から笑い声が聞こえた。

「アハハハ、こんなオモチャ！」

かたずをのんで見守るなかで、少年は怪蛇の顎に手をかけると、楽しげにそれを引き裂い

た。あふれる黒い血が、肘から伝って足もとに波うつ……。

——まばたき一つする間に、奇怪な襲撃者の群れはアリエナ号の甲板から飛びさっていった。

幽霊船が不気味なほどの船足で遠ざかっていくのが見える……。

〝あきらめてくれたのだろうか？〟

嵐の甲板には、巧猿とそして妖魔の少年がまだ残っていた。ふりかえった少年は、胸から血まみれである。濃いまつげの下の瞳が輝いて赤い。

レン・巧猿は一度目をつぶって、この夜、航海士が言った言葉を思い出していた。

〝船長、あの子供はどうも、見かけどおりの代物じゃないように思いますけどね……〟

「……君はなんだ？」

「僕の名前は、ご存じのはずだと思いましたが？」

——ネオ・ナリタの……アルディーンか？

そのまま気が遠くなっていくのを感じた……。

意識がもどったのは、ごくわずかあとだったようだ。

「ミスター・巧猿……巧猿！」

気がつくと、青ざめた子供が彼を懸命に呼んでいる。巧猿が目を開くと同時に、あわてて

数歩あとずさった。もうすっかり少年の表情にもどっている。

気を失ったのだと思うと、情けない気持ちだった。そればかりではなく、まだ愕然としている。簡単にさらってきたはずの少年は……。

〝ただのきれいで、おとなしいお人形さ！　見ればわかるじゃないか？〟

――見ためですべてがわかると、うぬぼれていたバカさかげんを、ぶんなぐられたような気持ちだ。

目を閉じればまだありありと浮かぶ、赤い目、青白い燐光につつまれた妖魔の顔だち。背筋がふるえてくる。いまはまたもとの優しげな少年にもどっているようだが……。

――不安そうな目をしていると、ふと思った。

あの手なら巧猿の生命をとるのも簡単なはずだ……ジッと見ているとまた数歩、あとに退がった。

――僕が怖いようだが……？　そんなまさか。

涼は、巧猿が怖かった。別人のような目でジッとこっちを見ている。

――あの人はもう知っている。

自分の妖魔の顔のことを。彼は〝不思議なことはたまらなく好きだ！〟と言っていた。その気持ちはいまもそうなのだろうか？

かつてアカデミアにいた時の記憶が蘇った。涼は12歳で……高等科の単位をとっていた。

同じ学寮にいた誰かの妹が訪ねてきて、たまたま通りかかった涼を見て目をみはった。

〝まあ、こんな小さな生徒もいるなんて……とても頭がいいのね！〟

手招きされたので近寄っていくと、名前を訊ねたり、弟のように可愛がってくれたのが思いがけずにうれしかったものだ。けれども、彼女の兄だった生徒がきて、涼が同じ高等科の首席であると聞いてしまうと、彼女はそれまでの手をふっと離してしまった。

彼女はたぶん、涼を初等科の生徒だと思っていたのだろう。それだけでもたいへんな英才だが、それ以上となると……。

〝学院の首席？〟、けげんそうに見る目は別人のようだった。二度と、頬に触れたり他愛もない質問をして困られてくれたりはしなかった。

〝それじゃあ何を話せばいいかわからないわ〟、その人は困るようにつぶやいて目をそらした。長いこと忘れられなかったつらい思い出だ。

力は素敵だという人はたくさんいても、本当に手をとってくれる人は少ない。知るとすぐに離れてしまう……まして、これは妖魔の力なのだ。

血のついた手をソッと握って、涼は目をふせた。血を好むことと、死闘に夢中になることは妖魔である本性だ……もう変えることはできないのだ。

——しかたないな、この人はもう二度と僕に、気が合うねとは言わないだろうな。

もう知っているから。

巧猿はどうするだろう？　いまにもなんと言うだろう？　みつめる前で、巧猿はかすれた声をようやく発した。

「……僕は君をまったく知りもしないで、つれてきてしまったんだな」

「ええ……そのようですね」

彼の目には、ずぶぬれで悲しげな目をしている子供がうつっている。〝正体を見たから、殺されるのだろうか？〟、チラリと真剣に考えたりした。

――それならなぜ助けにきた!?

「ネオ・ナリタの悪霊の主を船に乗せたんだ」

こんどは言葉にせずにうなずいただけだ。いまにも泣きだしそうなあの目もウソなのだろうか？　この船は食い尽くされた無人船となって港につく運命なのかもしれないが……。

〝なんでもいい、この目で見ていることだけを信じて死んでやれ！〟

そう考えた瞬間、不敵な笑みで巧猿がニヤリと笑った。

馬鹿なことをしているのかもしれない……と思いながら、相手の目をみつめてゆっくり両腕を広げた。

あらためて聞く。

「僕たちは……友達になれるのかな？」

そう言ってためしに手をさしのべてみると、驚いたことに、少年は頭からつっこんでくる

ような勢いで、その腕に飛び込んできたのだった。

「レン・巧猿！　もちろんだよ！」

第二章　『誘惑の騎士団』――我が名はアーサーと彼は言った

巧猿と涼はそれから、まだ倒れている船員らをたたき起こして正気にかえらせた。
「ネオ・ナリタの坊やが幽霊船を追い払ってくれたよ」
と聞くと、みんながゲラゲラと笑っていた。
――機関室にもどると、航海士の一人が報告しにきた。
「船長、我々はどうやらレーテア騎士団の領海に入っていますが……」
巧猿と漢が同時に首をかしげた。
「レーテア騎士団か……」
最強の傭兵集団レーテア騎士たちの本拠地は、この香港……新界の領域にかかる小島の一つにある。輝く白亜の塔が目立つ、堅固な要塞島だ。
許可もなく付近を通過することを、彼らは嫌うかもしれない。
「無線士、アリエナ号から挨拶の打電を送ってくれ。あの人々の機嫌をそこねたくない」
漢航海士が巧猿の注意をひいた……黒い船から助けた少年のことだ。

深い傷はさいわいに撃たれた肩だけだったが、まだ意識がもどる状態ではない。手当てをして船室に寝かせてあるが、

「ひょっとすると、あの子は騎士団の人間だったんじゃありませんかね？」

「エリュシオンか？」

漢がうなずいた。巧猿はしばらくあの少年の容貌を思い出していたが、そうかも、と肩をすくめた。ただし、ある理由で可能性は薄いとも考えていた。

彼が命がけで守ろうとしていたあの品だ……アリエナ号に引き揚げられたあとでも、しっかりと手から放さなかった。巧猿は、それがなんなのかもう見ておいたのだ。

「だが、万が一の可能性はあるな。無線士、ついでにそのことも送信してくれ……騎士団にはできるだけ礼をつくしておきたいからな」

「レン船長はそうでしょうよ！」

誰かが言って、ドッと皆が笑った。

「あれは、どういう意味だったのですか？」

機関室から出て、廊下を歩いていく途中で涼が巧猿に訊ねていた。彼ら二人は水浸しでないシャツなどを探しにいくところである。

レーテア騎士団という名称を、この船で初めて聞いた……巧猿はなぜその人々に丁重で

いたいのだろうか？　おまけにみんなはなぜ笑ったのだろう？

ああ、あれね。レン・巧猿は、軽く頭をかいて答えた。

「それはまあ……あの騎士団には素晴らしい美貌の者が多いからだろうな。妖しくも麗しいレーテアの……別名を〝誘惑の騎士団〟というのさ」

――誘惑の騎士団？

見る間に好奇心でおぼれかける涼に気づいて、巧猿がにやりと笑った。

「そういえば君にも教えておいたほうがいいな……」

固い結束と特異な掟を守り、流浪の王家に忠誠を誓う無敵の騎士団レーテアの噂……香港を底知れぬ街だと語るなら、避けてとおれない異様な物語だ。

巧猿が話すあいだ、涼はヒザをかかえて座っていた。

「レーテア騎士団は香港を拠点とする傭兵集団だ……人数は限られているが、戦闘能力はきわめて高い。一人一人が超Aクラスでね、しかも特殊なある力……を、持っているんだ」

「力……どんな力？」

「レーテアの騎士となった者は、生体エネルギーを自在に操ることができるらしい」

香港では、たぶん子供でも知っている。それは大きな2種類の技となるのだ。

――片方は、人体の生気を増幅してほかに与える癒やしの技だ。

「並の人間なら助からない傷でも、騎士団の手にかかれば異常な早さで治ってしまう。また

彼らは自分自身のエナジーを増幅させて、人並み外れた耐久力を示せるとも言うよ」

たとえば厳寒のアルプスで、騎士団の者なら香港にいるのと同じ軽装で立つという。

「もう片方の〝技〟は、つまりその逆の力なんだね」

それは〝癒やし〟とは逆に、敵に負の気を増幅してたたきつける武器であるらしい。まともにくらえばスタナー（電針銃）のように、一撃で人を失神させることも可能だとか……。

――まさか……この世界に、そんな力って本当にあるのだろうか!?

自分のことは棚にあげて、涼は目をみひらいた。

「だが片方は僕も見たよ」

「えッ？」

巧猿は以前、香港で、騎士団の人間が戦地で重傷を負って帰ってきたところを見ていた。あきらかに瀕死で到着したものが、数日後には平然として街路を歩いていた。レーテアが敵に〝魔物〟と呼ばれるゆえんである。

――どの騎士も、これら二つの力を持っている。

どちらの能力にもある程度の個人差……強い、弱いということはあるらしいが、これあるがゆえにレーテアの騎士は、戦場で不死身に近い強さを誇っているのだ。

彼らはもとから香港の人間ではなかった……と、巧猿は言った。

「40年ほど前に、故郷からうつってきたんだね」

かつて彼らは故国にいて、その地区は連邦によって自治区として認められていたという。呪術とはいえないが、彼らの持つ特異な能力のためだ。

「でも、とにかく初めて香港が彼らを受け入れた時、まっさきに目をみはったのはその美しさだったというよ」

とにかく絶世の美貌の騎士たちだったという。自治区香港の決定権を担う、千人会議が棒立ちになったという伝説があるのだ。

――彼らと、その王家は遠い内陸の山岳地帯にルーツを持つといわれている。

険しい山間の小王国はおそらく、狩人たちのあいだから興ったのだろう。

短く輝かしい夏と、雪に閉ざされる長い冬。切り立つ山々の間でたがいに呼びかわすため、王家にはいまも独特の歌曲が残る……それらはみな非常に高い音の転調だけで歌われるのだそうだ。

人々は誇り高く、幼時から狩猟の技術に長けていたことだろう。

彼らの目に映る美しさは、その地を囲む山々のなかにあって、清冽であるがつねに厳しさとともにあった。それゆえ彼らは華美を好まず、誓いは必ず行うことを尊しとした。

またそのあたりは古くから、隣国同士の紛争の絶えないところであった……。

「レーテアはとりわけ美しい土地だったらしい……隣国の野望にもつねにさらされていた。けれど異能の騎士団を有する王家は、侵略を一度も許さなかったものさ！　レーテア騎士団

は勇猛で、王家に対する忠誠心も並みはずれて高いんだ」

しかも、騎士一人一人があの能力を保持している。

「どうして、その人たちは国を離れて香港などへ？」

巧猿はさっき彼らの本拠がいまは香港にうつっていると言った。だが、そのような性質で成り立つ集団と王家が、故郷を簡単に替えるとは思えなかったのだ。

「もちろん、事情がある……内乱があったのさ、国の内部からね」

——いや、正確には裏切り行為というべきかな？

レーテア王家は旧世界より続く長い自治を、その地で守り続けた。夏季には白い花が一面に咲く美しい王国だ。だが、40年ほど前に異変が起きた。

「40年前、隣接する公国で大騒乱が起きた……公国と聞けばわかるだろう？　そこも半自治区で、古い大公家による君主制が敷かれていたところなんだ」

その最後の当主となった男は、稀に見る悪逆な施政者であったらしい。非道・残忍を極め公国の人々を苦しめた彼には、

「反抗勢力が立つのは時間の問題だったのさ。実際に反乱は起きたし、大公も一度は処刑寸前までいったんだが……密告者があって、間一髪大公をとり逃がしてしまったんだ」

秘密警察の部隊と側近数人だけをつれて、大公は国外へ逃亡した。

「彼は、隣国のレーテア王家に駆け込んだ。理由は大公家がこの王家とは、遠い縁つづきに

あたるからなんだけどね」

数代前の姻戚関係。迷った末に王家は、大公を亡命者として国内にうけいれてしまった。

「蝮を客間に通すようなもんだよね？」

……香港仔なら、五つの子供にも笑われるような判断のミスである。香港では、信義は通じる相手にだけ守ればよいもので、悪党にまで適用すべきものではない。

レーテアの王室はそれまで波風もなく、愛されており、とりわけ騎士団の王家に対する忠愛はほかに類を見ないほど強いものであった。

「それで、確かにすこしおっとりしすぎた面があった。大公という男の人物について、彼らは考えが甘かったのさ。レーテアの騎士にはいろいろ……噂もないわけではないんだが、あの騎士団が日ごろ信義や礼節をきわめて重んじることは、かけねのない事実なんだ」

――そうした人々が、命ごいにきた亡命者をつきはなすことは難しい。

「奴が正体を現した時には、もう遅かったんだな」

……実際に何が、どう進められたのか現在となってはよくわからない。だが、とにかく大公はある時点までは王家の賓客として柔和にふるまっていた。

しかしその陰では、逃亡先から国内に残してきたひそかな配下や結託者と連絡をとりあい、あらゆる手をこうじて手もとに武器を隠しためていたらしい。

そして人々が完全に油断したころをみはからって、いっきに内側から襲いかかったのだ。

「凄まじい戦いだったそうだよ。レーテア騎士団はよく〝騎士一人で一小隊に値する〟と言われているが、こうした卑怯な不意打ちが足もとで起きるとは夢にも考えたことはないだろう……大公の側も当初の戦力は、もと秘密警察だった部隊だけだったが、そのかわり死に物狂いの勢いがあっただろうな」

それは当然である。この企みに敗れれば、こんどこそ彼らの前には破滅が待っているのだから。騎士道精神の過剰な人々に、運命はこの時、味方しなかったようだ。

巧猿はたくみな話術で、攻防の一進一退を目にみえるように話して聞かせた。涼は騎士団に味方を決めてシャツをふっている。

「君も知っていると思うが、連邦は自治区においてはその自主性をいちばんに重んじる方向で動くだろう？　逆を言えば、自治区同士の争いにはなかなか手が出せない……この時にはそれが裏目にでたよ」

まわりにそうした自治区や、それに内情の近い地域が集まっていたことも不幸だった。そのすべて……ではないが、いくつかの勢力が大公の側についた。

「……でもそれは汚いッ！」

シャツをつかんで思わず涼が叫ぶ。巧猿は冷静に、

「まあそういうものさ。外からは倒せないとわかっているレーテア王家だもの。どんな汚い手とでも、利益のためには組む連中がいるのが、この世界さ」

――それからが、レーテア王家の長い旅のはじまりだったのだ。

それはまず、生死をかけた逃避行であった。

大公はすでに王国をのっとり、もとの公国も制圧して黒の大勢力となりおおせている。水色の旗印のレーテアは、大公とその同盟者たちの追撃に一歩ずつの敗退をつづけた。

大公の側からすれば、ここで王家と……なによりも騎士団を殲滅せねばならないのだ。彼らはあらゆる手段を使い、数倍もの兵力で追討に全力をあげた。

「状況からいけば、王家が弑されずにあの地を脱出できたのは、奇跡だと思うよ」

だが騎士団はとうとう彼らの王家を守りぬいた。

「そして彼らは香港まで逃げのびたんだ。知ってのとおり香港は、どんな特殊な街からの難民でも受けいれる唯一の自治区だからね！」

誇らしげに言う巧猿の目の輝きは、涼には不思議なものに映った。底知れぬ……と自らが言う、香港仔の自信なのだ。

いずれにせよ、香港はこれらの高貴な避難民たちを喜んで歓迎した。

「美しい……けれど、並の世の掟からは、はずれてしまったあの騎士団をね」

……巧猿はふと遠い目をした。

レーテア騎士団が香港への移住を望んだ時、香港は確かにそれを歓迎したが、同時に彼らの本拠を本島に置かせることだけは、厳重に防いだ。

本島であれ、新界であれ、騎士団は香港人と同様、自由に行き来してかまわない。ただし、常に騎士としての定まった装束を身につけ、ひとめでレーテアの騎士とわかるようにして欲しい……騎士団の代表者と協議の末、千人会議はこれらを初めに約束させた。

「なぜです？　なんのために……？」

「そりゃたぶん、フェアにやろうということだろうね」

巧猿は静かにつぶやいた。

「僕は彼らの習わしを、汚れたとも、悪とも思わない……だが、あれが危険な掟であることはまた確かなんだよ」

〝ねえ君、騎士団にむやみに近づいてはいけないよ……〟

巧猿は奇妙なほど優しい声で、一語ずつ言葉を選ぶようにしてそう言った。

たしかに、だんだんこの子が弟みたいな気持ちになってきたようだ。小柄な黒髪の涼は、疑うことを知らないような顔で聞き入ってくる。この子は生まれたばかりのようで、

――好奇心がまたおそろしく強いときているんだ！

この目はすでに騎士団にいたく興味を持ってしまっている。これじゃ、あの騎士たちを見ればいいとも簡単についていってしまうだろう。何ひとつ、知りもせず……それは少々、やばいのだ。

レーテア王家と騎士団には、その能力のために、まだ一つ特殊な問題をのこしているのだ

と、巧猿はおだやかな声音で言った。

「あの騎士団の能力は、そのまま彼らの性質と方向を決定してしまった」

それは見様によっては、悲惨な鎖のようにも思われるものである。騎士団を〝悪魔に呪われた者たち〟と呼ぶのはもちろん彼らの敵からきた言葉だったが、理由のないことではなかった。彼らの喜びや悲しみは、常人とはいささか違うのだから……。

「エリュシオンという言葉を、さっき聞いただろう？」

「ええ、漢航海士が言っていた……」

漢はこの船が救出した少年が、騎士団の人間ではないかと考えたのだ。まだ若く、見たところ涼くらいの年齢で、とても歴戦の傭兵のようではなかったが……。

「それだから、僕らはあれが騎士団の一員じゃないかと思ったのさ。エリュシオンというのは、あの騎士団独自の習わしで、たぶん侍者……というような意味なのだけどね」

――レーテア騎士団の異能は、たしかにその故国……山岳の国で発生したものだ。ある部分はたしかに〝血〟によって伝わるらしい。

「つまり、レーテアの血流の濃い人々……彼らのいわゆる貴種と認められる人々のあいだにはかならず伝わるという」

貴種の血をそなえた騎士から生まれた者は、すべて生まれながらに騎士の能力を持っている。貴種であれば、レーテア騎士は婚姻も許されているらしい……騎士と同族の貴種の娘。

王家によってもっとも祝福される組み合わせだ。

しかし、血によって能力を伝えられるほどの騎士は、いまはもうその数も非常に少ないという。

「そこで、いまひとつ別の方法もあってね。こちらのほうが有名な話なんだ」

巧猿が一種微妙な表情をして言った。

「その場合には、誰でもがあの王家の騎士になりうる。生まれも、年齢も、性別すらもとわないんだ。どのような者でも、騎士団は受け入れる。ただし一度その中に迎え入れられた者は、だれ一人、もう二度と外の世界にはもどらないんだ……」

――それこそが、レーテア騎士団をとりまく妖しい噂の根幹となるものだった。

騎士となった者は生涯にただ一度だけ、侍者――騎士団の内部で言う、エリュシオン――と呼ばれる能力の後継者を選ぶことができるという。

貴種である、ないにかかわらずどの騎士もその力を持つという。その場合、一人の騎士の能力を受け継ぐのは一人きり、だとか……。

「ある人々が、この能力をテレパシーから発達したと考える理由がこれなんだ」

――それは純粋に精神面での選択となるらしい。

身分・人種・年齢ほか、あとはいっさいの条件がない。ただ、その騎士である者が、これこそ誰ともかけがえのない……と感じ、強く求めた相手だけが彼のエリュシオンとなる。

侍者はさっき言った超常の力をすべて受け継ぐ。

「そればかりではないよ、騎士とエリュシオンのあいだには……たしかに一種のシンパシー（親和・共感力）があるらしい。もとになる騎士の持つ武術や奥義といったものは、常人ではありえないような短期間で、その侍者に会得される」

ふつうならば十年、二十年かかって当然な技術や技の習得が、異様な早さで伝えられる。

「……恐ろしい、気味悪いほどだと、見た人誰もが言う。君のようにほっそりした、はかなげな子供が騎士団に迎えられたとたん、またたく間に武芸の達人の動きになるんだから。呪術ではこれは説明できないだろう？」

彼らは感情の曲線がほとんど一体化するのかもしれない。

「たがいに感覚と感情のほぼすべてをわかちあい、つねにその一人だけとみつめあう。騎士にとってはそのエリュシオンが絶対の愛の対象だ……その逆もね。例外はないよ。だから彼らは人に〝誘惑の騎士団〟と呼ばれる……これがその理由なのさ」

〝レーテア騎士団はただ一度、最初にして最後の情人を選ぶ。鬼火のようなその執着からは、いかなる者も逃れることができない……〟

「……情人!?」

「そう、外部から騎士団が受け入れた者というのは、一人の例外もなくみな誰か……騎士が選んで愛人となった者だそうだよ」

「まさか……」

だから、〝騎士団〟には年若い少女たちも大勢まじっているということだった。

「香港にきてから、あの騎士団は超一級の傭兵として各戦地や紛争地域に仕官している」

――国を離れた彼らの要塞やもろもろの維持費用をどう調達するかは、騎士団の持つ無類の戦闘能力をいかすことによってじゅうぶんに解決されていた。

連邦の傘下において、各都市や自治区の持てる軍力は厳しく制限されている（特に大公の事件以来、その法は強化された）。

しかし、もし地域での紛争が予期される時……あるいは個人や一般企業が、自己防衛の必要を感じてガードを求める場合。

予算があれば、この世界の人々は傭兵を雇うことを、まず考える。おまけに香港は、伝統的に傭兵たちが集まる集合地点でもあったのだ。

「レーテアの騎士なら値段もトップクラスだ。また、それは彼らの望むところでもあるんだ。生涯の大半をいずれかの戦場ですごすのが、レーテア騎士団の通常のパターンだというよ。かつても……そして、たぶんこれからもね」

――それはあの異能がある限り、永遠に続くのだという。

香港において、彼らは傭兵として各地に仕官するといったが、その際にもかならず2名が1組として移動するものだと巧猿は言う。雇い主もそれを望むのがふつうだ。それが最強の



組み合わせだからだ。

香港の街のどこかで、定められた青灰色の衣装と青いマントを見れば、それはレーテアの騎士なのだ。

もしも一人で行動していたなら、それはまだエリュシオンのいない騎士だと思ってよいのだろう。おそらく彼はいつも、どこかにいる——そしてまだ見ぬ——〝愛せる者〟彼の侍者を探している……。

何を思い出したか、巧猿がニヤニヤと笑った。

「レーテア騎士団は優秀だし、礼儀にも言うところはない。おまけにやはり美男美女の集団となる傾向があるようでね。たいがいの場合、とびきりの美形であるケースが多いんだ！だが、あの騎士団に要人警護（シークレットサービス）の依頼がくることはめったにない。まずありえないと言ってもいいよ」

〝なぜだと思う？〟急に真顔になって、涼にたずねた。

——かつてある地区の大統領が、暗殺団の予告をうけてしまい、自分と一族の警護を騎士団に依頼したことがあった。

派遣された者たちは立派にその任を果たしたのだが、任務の終わり近くになって一人の騎士が執務室に大統領をおとずれ、娘を彼のエリュシオンとして連れていくと告げたのだ。

妖精のような愛娘はその傍らに立って、見知らぬ人のように父の顔を見ていたという。

――父親は激怒した。

「あたりまえだろうな、騎士団に入った者には永久に戦場をさまよう運命が待つんだ。正気の家族なら、まず許さないとも！」

彼はそくざに彼女をその騎士から引き離し、騎士団との間の契約も即日破りすてた。

そのあと、政敵とむすんでまで一人娘をわたすまいとしたそうなのだが、

「ようするに、ぜんぶ無駄だったんだ」

少女には、すでにその騎士の異能がうつっていたのだ。つけられた護衛官を自分で倒して邸外に駆けだすと、外には騎士団が香港からの応援すら呼んで待っていて、新しい侍者をかっさらって風のごとく消えうせた……。

〝以来、彼らに警護を頼む依頼者は絶えてない〟。巧猿は考え深げにうなずいた。

「ひきかえに子弟をさらわれては、たまらないからね！」

〝レーテア騎士団は、ふだんは礼節を重んじる集団で約定にも信頼がおける〟と、レン・巧猿はさっき断言していた。

「ただある一点……力の伝承者である侍者と騎士のあいだが裂かれようとした時には、騎士団の行動は予測もできなくなる。実際、この件にかんしてはどんな非常識な行動でもとる人々とみていいようだ」

彼の知る限りでは、こうしたケースはこれ一件のみであったが、噂だけは限りなくある。

〝あの騎士団は美しい者とみれば、見境なくかどわかして仲間にひきいれる〟
〝望んだ者を狂わせて虜にする妖しい技を使うのだ〟
「どうかなあ……僕には彼らが〝力〟以外の妖術を心得ているとは思えないけれど」
なんとなく、タメ息をついて巧猿は遠い目をした。
――愛には形がなく、決まりがなく、絶対ということがないのだという。
「だが絶対に近い愛があるとすれば、レーテアの騎士とエリュシオンのあいだにあるのがそれかもしれないよ」
〝愛によって互いに盲目〟どこかの戦場の記録者が残したレーテアの言葉であった。
「僕にはこれが騎士団の本質の、少なくとも一部をあらわすように思える。彼らは愛によって盲目であるがゆえに、戦場の地獄によく耐えるのだ」
つねに死の恐怖にさらされる前線で、精神への過剰な負担が、屈強な部隊を自滅させることはよくある。人は精神に傷一つつけず、戦い続けることはできぬ生き物のはずだ。
「ただ一つの例外は、レーテアの騎士と侍者たちだ。彼らはどれほどの凄惨な戦いのあとでも、平然として次の戦場にむかえる。それは自然の状態ではないかもしれないが、多くの人が魅かれた気持ちは、僕にも少しわかる……」
騎士は生涯に一人のエリュシオンしか愛さない。
そもそも、その生命の時はそれほど長いものではないのだ。

「戦地から戦地へと渡り歩くのだからね。いかに彼らが力を持っていても、いつかはその時がくるというものさ」

だが、それでも彼らは悔やむということがないようだ。

外部から……いずれかの騎士によってエリュシオンに選ばれた者はやがて、その騎士の死とともに、次代の騎士として認められる。

彼らの最大の務めは、次なるエリュシオンを見つけだすことである。

「わからないよ。常識で考えれば、彼らの運命は恐ろしい。しかも彼らは望んでその生を選び、それを継ぐ者をまた探し続けるのだ。ねえ、なぜ求めるのか？　そして選ばれた者がまた、なぜ応えるのか……」

すぐれた美貌と妖しい噂。外界へは沈黙を守り、戦場から戦場へ渡り歩く。

楽園にいるかのように修羅の生をゆく、生命の短い彼ら。

「聞いたところでは、かならずしも侍者は騎士の愛人である必要はないともいう。そういう関係は、力の伝達には直接関係はないらしい……」

だが、彼らは戦場で生きる。

生と死が紙一重のところで交錯するさなかで、すべてをゆだねあえるただ一人の相手として、身近に見つめあいもする。

「十のうち九まではそうなってしまう……人間は弱いものだから」

巧猿がひどく若い表情で、そうつぶやいてタメ息をついた。涼は、そのさまをジッと見つめてから、自信を持って一度うなずいた。〝そうか……レン・巧猿！〟

「わかった！　あなた、また僕をだまそうとしているんでしょう？」

――ね？　大当たりだ！　きっと僕にそうやってウソの物語を教えこんでおいて、あとでおもしろがろうっていうんだ、漢航海士もグルだ！

僕だって、いつもだまされるばかりではないのだ……巧猿は皿のような目でマジマジと、おおいばりの涼をみつめた。

「信じてないというのかい？」

「あったりまえですよ！」

――騎士団の存在は本当にしても、神秘の力だのエリュシオンだのって言うのは……。

よし、わかった……巧猿のその笑顔は、なんとなく涼を不安にさせた。

「それなら涼……もう少ししたらセイラ・テンプルとの連絡もとれるから、そこからきた騎士の案内役は、すべて君にまかせようかな！」

「え……でも……」

「君は、レーテアの力も騎士団の異名も信じていない……だからなんの心配もない！　でも、僕はどちらも本当だと思っている……だから彼らにもしもの無礼をして、負の気をくらったり、魔力で魅入られたりする役回りは、信じない気楽な人間にまかすとしよう！」

――ちょっと待って！

なんだか急に不安になった涼が、確かめるように、

「でも、まさか……ふつうにしていれば怒らせるようなことはないでしょう？　それに、あの……もう一つのほうは、どんなにきれいな女の人がきても、僕自信があります！」

涼には真夜子がいるのだ。だが、巧猿はそこでなぜか最高に意地悪くほほ笑んで見せた。

「どうして、そこで美女がくると思うのかな？」

「だって、巧猿はさっき騎士団には女性も多いって……」

涼が早口で言うとおり、セイラ・テンプルには、たしかに少女もいる。

「だが騎士団はその行動半径からして、戦場をでることがあまりないんだ。したがって僕も、騎士と侍者の組み合わせが、かならずや異性であると言った記憶はないけどなァ」

あまりの複雑さに立ちくらみしている涼の肩に、巧猿は親しげに手をおいた。

「僕はね、涼。騎士団の妖術だの、かどわかしだのの話は、いちおうデマだと思っているんだ。でも、誰にだって間違いはあるからね！　もしも〝誘惑の騎士団〟の噂が、みんな本当だったとしたら……」

ニッコリ笑って、ポンポンと肩をたたいた。

「経験上、言うけど、君ほどさらいたくなるタイプはめったにいないと思っていいよ！」

騎士団からの使者がきたのは、それからすぐのことだった。

霧のでてきた甲板に、レーテアの小ボートが横づけられる。たった一人であらわれた騎士は、約定どおりに青灰色の衣装を着ていた。

涼が一人で出迎えにきたのを知って、とまどうような表情をして見せた。

「（人さらいで・悪党で・ろくでなしの）船長は機関室でお待ちしています」

涼は巧猿をうらんでいる。

あらわれた騎士は、黒い髪で背のとても高い男だった。レン・巧猿も長身だったが、彼はさらに高い。深みのある、きれいな声をしていた。

「私はイグナチウスという者で、この船の送信により参上した。レン船長の丁重なお心遣いを騎士団は感謝している……」

甲板の寒い場所で待っていた小柄な少年にも、軽く礼をしてかたじけないと言った。

「かなり待たせてしまったのかな」

「いえ大丈夫です、僕は涼といいます」

好感の持てる人だと涼は考えていた。ただし、ひどく不思議な気持ちがする。

――どうしてだろう？　僕はこの人をどこかで知っていたような……？

どれほど見覚えのない人なのだが、それでいてどこか馴染み深いような感じが……

こういうのがレーテアの神秘なのだろうか？

「……どうかしたのかな？」

騎士は端麗な笑顔を見せた。こんなにマジマジとみつめられるのは珍しいと思っているようすだ。涼はあわてて彼を機関室に案内するといった。

しかし、まっすぐ巧猿のいる機関室にむかうあいだも、奇妙な既視感はいっこうになくならなかった。涼はまだ知らないが、それはこの騎士の鋭い身のこなしによる部分が大きい。イグナチウスと名乗ったこの騎士は、シナンジュという特殊な武術の使い手で、涼は以前、ある人間の動作の中にその〝型〟を何度も見ていたのだ……。

「待ちなさい、ケガをしている」

「え？」

ふと声をかけられてふりかえると、騎士団の使者は涼の右腕を指さして首をふった。気がつかないうちに、血が手をつたわっていた。

――ああ、夜中……幽霊船と戦う前についた傷だ。

ちなみに、もうずっと前のことみたいな気がする。アルディーンの力を眠らせてあるので、妖魔のけたはずれの治癒力はなく、傷はまだそのままに残っていた。あまり痛みというものを感じないので、忘れていたのだ。

イグナチウスといったその騎士は、ごく自然に手をのばして涼の腕にふれると、無造作に彼らの技をみせたのだ。〝すこし待ちなさい〟

――その言葉とともに腕が淡い色の光につつまれて、涼は思わずアッと言った。淡い、金色の光だ。妖魔の……とは違う、強いエネルギーがその手から流れ込んでくるのを感じる。数秒で、傷は存在しなくなった。

「さあ、これでいい……もうどこも痛まないね？」

傷ついている者を癒やすのは騎士なら日常のことであった。だが涼は心底から驚いていた。

漆黒の目をみはっている少年に、イグナチウスはうなずきかけて、ふたたび案内を頼むと言った。

「は……はい、こっちです」

レン・巧猿はさすがに途中まで迎えにきていた。

「レン・巧猿です、お騒がせしました」

彼らはたがいに名乗りあったあとで、ケガ人のいる6号船室にむかった。船室のドアを開け、例の少年の顔を確認してからイグナチウスは穏やかに首をふった。

「いいえ、この少年は我々騎士団の者ではありませんね」

この嵐の夜、香港にいるすべての騎士とエリュシオンが、さいわいセイラ・テンプルにそろっていた。

「一人、例外は私の侍者だけですが、彼女は大丈夫……行く先もわかっています」

騎士団の用件で本島まで出て、嵐のため今夜はそちらにとどまっているはずだという。
レン・巧猿の通信を聞いて、万が一のためにとイグナチウスがよこされたのだが、おそらくは騎士団とかかわりない者だろうと、彼らも考えていた。
「しかし、アリエナ号は船体が破損しているとも聞いてきました。よろしければ、騎士団の船が貴船を曳航しますが……」
「それはありがたい！　本当に助かります」
巧猿はありがたく申し出をうけた。嵐はおさまってきたが、不気味な襲撃者の件もある。一刻も早く、本島に入港できれば安全というものだ。
――騎士団の船が一緒なら何より心強い。
アリエナ号を曳くには、もう1隻のボートが必要だ。
イグナチウスがセイラ・テンプルへ、曳航に必要なもう1隻の船を呼びよせるあいだ、巧猿は彼に、熱いコーヒーを勧めた。
おかまいなく、と彼は言ったが、そこは物好きの巧猿だ。黒髪の騎士も結局、笑顔を見せてもてなしを受ける気持ちになってくれた。
〝騎士団の人間にしても、落ち着いているな……〟。カップをうけとる騎士を見ながら、巧猿はそう感じていた。動作の端々に気品を失わない。そうとう高位の騎士なのかもしれない。

——もうエリュシオンがいると言った。どんな相手なのだろうな？

悪い好奇心をだした巧猿は、ふと思いついたことがある。あのカードだ。

恋の占いにしか使えないという新界の魔力がこもったカードであるが、騎士と待者のことならば、占えるはずではないだろうか？

いそいそと、巧猿は引き出しからカードをとりだした。

「あなたの侍者について、あてさせていただいてもよろしいかな？」

軽く眉をあげて、イグナチウスが巧猿を見た。おもしろそうに笑ってうなずく。

「新界の魔術ですか！　本当にわかりますか？」

「もちろん！」

巧猿独特の茶目っけのあるキラキラする目つきに、魅せられたようにイグナチウスもカードを見つめる。並べて1枚目があけられると、『戦士』。

「イグナチウス殿のエリュシオンは、とても戦闘能力が高い？」

優しい誇りを見せて、騎士はうなずいた。技も気も、騎士団の中で遜色ない。

「残念、どうやら香港の生まれではないらしい」

「驚いた、あたっています」

イグナチウス自身もかなり興味を持ったらしい。身をのりだして続きを待った。

3枚目のカードは特徴を示すはずだ。巧猿はあけて、ニッコリとした。『海』のカード。

「そして、その方は青い瞳の持ち主だ……」
「違うッ……やめて欲しい!!」
いきなりイグナチウスが立ちあがってカードをはらいのけたので、机が勢いで倒れたほどだった。巧猿は驚いて、何も言えず、相手の顔をただながめていた。
すぐに後悔したらしい、彼はうつむいたままで低く巧猿にわびを言った。
「……失礼をした。しかし騎士団の人間たるもの、こうした呪法に心を動かすべきではなかった」
とり落としたコーヒーが、腕にかかっている。それからはこの騎士は、まったく巧猿にうちとける気がなくなったように、無言で騎士団の船がつくのだけを待っていた。

――ちょうどその同じ時刻、香港本島のべつのポートでは。
たったいま、警察が嵐の港で船を奪おうとしていた数人の男たちを、逮捕・連行しようとしていた。ひと目で傭兵だと知れる鋭い目の男たちで、彼らにはすでに手配書が出ている。前の任地での略奪行為がバレたのだ。
港の公案警察では戦闘ランクが違いすぎた……またたくまに、包囲の一角が血みどろにされ、傭兵たちが笑いながらクルーザーに乗りこもうとした時であった。
背後から、凛とした銀鈴のような声がかかった。

「……傭兵でありながら、略奪に参加した愚か者！　お前たち、セントラル・ボードでの正式な誓約をふみにじって、それですむと思っていたのか？」

――それは、きわめて美しい少女だった。

漆黒の髪を長くたらし、切れ長の目はつややかな濃いまつげに縁どられている。肌はほとんど黄金、砂漠の砂のような褐色で、喉の細い金のリボンだけが、ただ一つの飾りである。

――青灰色の衣装、ひるがえる青色のマント……遠目で十字にも見える背の紋章は、レーテア騎士団の印である〝両刃の剣〟だ。その刃が銀で縁どられているのは、彼女がまだ誰かのエリュシオンであるという証でもある……。

笑っていた男たちの顔が、一瞬で凍りついたように変化した。

なぜなら……セントラル・ボード（傭兵仲介機関）は、その手にあまるほどのクラスの傭兵の捕縛には、最後の手段としてレーテア騎士団の力を借りることがあったのだ。

――ああ、ちくしょう!!　やりすぎた、おしまいだ、レーテアが来てしまった！

その気配にかんづいたからこそ、彼らも、今夜必死で香港を立とうとしていたのだ。

血の気のひいた顔は、レーテアの伝説を思い出していたのだ。〝戦場の悪魔〟〝不死身のレーテア〟。恐怖に追いつめられた一人が、むりやり叫び声をあげた。

「それがどうした!!　たった一人じゃないか……かたずけろ！　殺せ！」

「そうだ、殺せッッ!!」

さすがにAランクである。アッというまに少女をとりかこみ、襲いかかった。

だが、かろやかにひるがえるマント――レーテア騎士団の装束は、美しいと同時にある程度の銃弾や火炎を防ぐ特殊な布だった――銃を捨てて飛びかかる男の、利き手をなんなんとらえ、壁に投げてたたきつけた。

――たとえ少女のなりをしていても、レーテア騎士団である以上、かならずなにか一つの武術に精通している。

この美少女が使うのは、シナンジュという武術の特殊なスタイルだ。利き手か肩の骨をはずしながら投げる、投げられた側のダメージは恐ろしいものがあるのだ。

「さあ、おいで！　犬ッ……誓いをやぶった愚かさの報いを受けるがいいわ！」

――すべて終わるまでに、10分とはかからなかった。

目をむいて見ていた港の警官に、少女は足もとの男たちを引き渡した。

「この者たちは、セントラル・ボード手配の悪党ども。どうぞ収監をお願いします」

……その時、無線機に受信のライトがついた。流れてくる声を聞いて、瞳がおさないほどの喜びをみせて輝いた。

――その声は、アリエナ号へもう1隻のボートを依頼するイグナチウスであった。

彼女の騎士の声であった。少女は今夜、与えられた任務が済んでからも嵐を避け、安全な本島にとどまる指示を受けていた……けれど愛する騎士の声を聞いて、行かずに迷うエリュ

シオンがいるわけないのだ。一度だけくちびるをかむと、瞳をきらめかせてうなずいた。
イグナチウスの声は、曳航に必要なもう1隻の船を要請してた。
係員はとめたが、美しい少女はかろやかにボートに飛びのり、港から出ていった……。
——少女の名はリュー、騎士イグナチウスの侍者である。
瞳の色は、宝玉のような紫であった。

そして……アリアナ号の甲板にもどって、騎士団からくるはずのボートを待っていたイグナチウスは、近づくボードの乗員が誰かを知って、驚いたような若々しい笑顔を見せた。
「ラーラ・イグナチウス！」
少女が涼しい声で呼びかけた。ラーラというのは騎士団内部の呼称であり、侍者がその騎士に呼びかける時にだけ用いる。愛称といってよい。
「リュー、どうしてここに!?　嵐を避けて本島にいるよう命じられたではなかったか」
「この船にいらっしゃると無線で聞いたのです。それで……」
その時である。見上げるリューの目に、アリエナ号の外壁に潜む異様な黒い影がうつった。
そいつはまるで蜘蛛のような姿で、たったいま船縁の下から甲板にはいあがろうとしているのだった。

「ラーラ、気をつけてください」
すばやい警告の叫びをあげると、幽霊船の男が上から彼女を見てニヤリと笑った。
「うわあッッ……残っていやがった！」
〝しまった、幽霊船の残りがいたのか⁉〟、巧猿や船員たちが悲鳴を上げる。
奴らはあきらめてなどいなかった！　おそらく黒い船にすべてはもどらず、ずっといままで物陰に潜んでいたのだろう。夜明け近くなり、巧猿らが完全に油断するまで。
「に……逃げろ、娘さんッ！」
黒い影が続けて数体も、リュー一人の乗るボートめがけて飛びおりてきた。まずこの少女を人質にとるつもりなのだろう。
「さあ巧猿！　我らの獲物を返してもらおう！」
だがリューはむしろ笑って、迎え撃つ見事なかまえをみせた。
〝すげえ、妖精のようなあんな少女が⁉〟、息を飲むアリエナ号の乗員たちが見守るなかで、少女はあざやかな腕前を見せた。
幽霊船の頭は、空に手をさしのべて何者かの名前を叫んだのだ。
「……様、我らに力を！」
――その叫びと同時に、彼らの身体からふたたびあの黒い炎がふきあがった。
いけない！　涼がハッと我に返って叫んだ。

「その男に触っちゃいけない！」

触れた手から黒い火が襲ってくるのだから……少女はうなずいて腰のスタナーに触れたが、こんなものを使うまでもない。ふと手が上がり、空中で青白く光った。

――レーテアのいま一つの技と光を、彼らは見たのだ。

それは強烈な光の尾をひいて、男の胸にぶつかっていく。

「……化け物め、仲間のところへ帰るといい！」

光弾があたったままに苦悶の表情でのけぞると、ロープをこえて暗い海に落ちていった。

「ギャァッツ！」

――〝気〟の攻撃にかけてこの少女は、騎士団でもきわだつ強さを持つ者だった。

「船長殿、おさわがせいたしました」

……すべての敵をなぎ倒すと、息ひとつ乱さぬまま、少女はたおやかに一礼した。

その後、騎士イグナチウスとリューは、2隻の船でアリエナ号を曳航して本島まで送り、明けかけた海を何事もなかったように去っていった……。

本島につくまでの短いあいだ。巧猿は廊下で、ぼんやり窓から海を見ている涼を発見した。

「涼、どうしたんだ？　もうすぐ香港だよ」

ふりむいた少年は、不思議な物思いからさめたような目で、こちらを見た。
「レーテアの話、本当だったのですね」
「そうとも！　なにかね、涼は僕がウソをつく人間だとでも思ったのかい？」
笑いながら困ったように首をかしげて、涼が右腕を見せた。
「さっきあの……騎士の人に治してもらったんですよ！」
思い出してから、またタメ息をついた。
――なぜなら、涼は心底から驚いていたのだった。
「びっくりしたなあ。だって、僕は以前にもあの光を見ていたから……」
驚いた顔の巧猿が、涼を見た。涼は素直にうなずく。
「君はどこでそれを見たというのかい!?」
「ネオ・ナリタにいるときに」
〝そして誰の手から？〟、涼はチラリと魔物じみたほほ笑みを浮かべた。
その人のことは、とても忘れることなどできない。彼は涼の夜の顔の仲間だ。
――彼は僕のことをアルディーンとしか呼ばなかったし、僕もそうだ……彼の仮面の呼び名でしか呼んだことがなかったな。
その時の名は、ナイトハンドといった。妖魔の子にとっては好もしい響き。
――だって、彼はいつでも血の匂いがしていたもの……。

優しい笑みのなかにふいにあらわれた魔性の気配を感じて、巧猿は口もとをゆがめた。
「なんだか気になるね、いい人だったの？」
「友達になってくれる前には、あの人、僕を殺す気持ちだったみたいですね……」
ナイトハンドと呼ばれる――みずから名乗る――仮面のクライム・ハンターは、かつて両親を七賢人に殺され、復讐のため最強の殺戮者としてネオ・ナリタにもどってきた青年だった。
そのために彼はすべての月日と、気の遠くなるような努力をささげている。
痛められ、傷ついた心のすべてを。
――運命によって、彼と涼は同じ時期に、旧市街を支配していた邪教に戦いを挑んだ。
だがアルディーンは暗闇の果ての明日を見つめ、ナイトハンドは過去から来ていた……。
暗い寡黙な、心底をはかりがたい意志を秘めた相手だった。
背が高く、冷たい青い目をした青年だった。暗色の髪、素顔の浅黒い顔だちは秀麗でとのっていたが、青い瞳は魂を凍らせるほどの冷たい光をはなっていたものだ。
――いたわりや愛を軽蔑し、なによりも弱さを憎んでいた。
あまりの冷酷さが許せずに、涼は何度となく彼とぶつかることもあった。だが氷のようなあの心の奥に、何かがあった……。
――あの人の血は、自分の胸からもずっと流れていたんだ……。

苦痛と孤独の気配は、涼の心のどこかに触れて離れなかった。

「あの人は……本当は優しくなれる人かもしれないと思うのだけど……」

戦うためなら、顔色一つ変えずに相手の首をはねた。そんな人がどうしてそう思えるのか……涼はしばしば彼に殺させすぎないように、情けを乞う敵なら生命は許してやるようにと、行く先々で邪魔を続けたこともあったものだ。

「ネオ・ナリタで、僕はずいぶん、あの人の邪魔をしたんですよ……とても怒っていましたっけ」

――あの奇妙な光を見たのは、彼らが初めて会ったころだった。

敵に謀られ、妖魔の力でも死にかけるほどの傷を負ったのだ……気がつくと、目の前に黒衣の仮面の殺戮者がたっていた。

〝助けて欲しければ、命乞いをしてみたらどうだ？〟

血がとまらない深い傷をおさえてうずくまる涼に、あざけるように彼は言ったものだ。

〝これから私の邪魔をしないと……好きなだけ私に悪人どもを殺させると約束するなら、安全な場所までつれていってやってもいいぞ〟

貴様のような子供は、そこからもう一歩もでてこなくていい……涼は突き刺すような痛みも忘れて顔をあげた。

〝約束なんかしないぞ！　あなたはまるで、戦うのではなく殺すことを楽しんでいるみたい

だ！〟

殺して何が悪い？　彼は皮肉な笑みを見せた……。

〝私が殺すのは犯罪者ばかりだ。何が悪い……貴様はもっと正義感の強いものと思っていたが？〟

――殺すことが正義だと彼は言うのだろうか？

わけもなく涼の目から涙があふれそうになった。

〝僕はあなたが傷ついていくのが、たまらない……〟

命乞いをする敵を殺すのは、彼にとっても地獄ではないのか？

〝それなのに、あなたは気づかないようだ……許してやることは弱さじゃないのに！〟

涙が頬をつたっておちるごとに、妖魔の能力が遠のいていく。気が遠くなるほど強くなった痛みのなかで、死ぬのだと思いはじめていた。

〝殺すより……助けてやりたいと思ったことは、一度もないの……か？〟

その瞬間、肩をつかまれたので、もう殺されるものだと思った。だが実際には、彼の手がボウッと淡い光に包まれはじめたのだ。

〝な……何を？〟

無言で彼は光を傷口にかすらせた。見る間に痛みが薄らぐ……消えていく。

〝さすがに妖魔だ。効きめも桁違いだな〟

それっきり、犬を捨てるようにふりむかず、その路地から出ていった。翌日には傷は痕跡もなく消えていた……。

——そう、あの人と僕は、それから何度かの冒険を一緒にしたんだね。

助けられたことも、助けたこともお互いにあったが、涼が彼の手からその光を見たのはただ一度、その時かぎりであった。

「それはしかし……騎士団の行動では絶対にないよ！」

話を聞いていた巧猿が、はっきりと頭をふった。

——一度、騎士となった者が騎士団を離れて勝手に行動することなどまずありえない。

「彼らは騎士団に迎えいれられる際に、故郷をいわば捨ててきてしまうのだ。過去のいっさいを捨てた人間に、復讐という二文字があろうはずがないよ……だろう？」

涼もそう思った。それに、愛という感情をあれほどバカにしていた人物もいない。しかも、騎士団のもう一つの力は〝癒やし〟とは逆の凶器である。

——間違いなく、彼はその力を持ってはいなかったもの！

だが涼はそれから首をかしげて、ややためらった小さな声で、

「でもレーテアの騎士団は、お金でそのどちらかの技をくれることがあるかしら……？」

——彼は昼の名に、ナサニエル・ゴードンという香港の富豪の顔を持っていたのだ。

金で売り買いできる技ではないと、レン・巧猿は断言した。

「まあね、連邦世界は広いのだし、妖しい技も一つきりではない。香港とかかわりもあると言ったね？　たぶんべつの……なにかの呪術かもしれないよ」

「ええ、たぶんそうですね」

涼もうなずいて言った。そしてひさしぶりに思うのは、

――彼はいま、どこにいるのかな？

復讐がおわると、彼はネオ・ナリタを去っていった。いまはどこにいて、何をしているのか涼は知らない。無事でいるかもしれないが、でもまだきっと……。

「香港にいれば、元宵節もあるし……その友達にもまた会えるかもしれないよ！」

どうだろうか？　華やかな祭りが好きな人ではなかったが……。

「どんな感じの人なのかい？　もし、僕に説明するとしたら……」

巧猿もやや興味をいだいたらしい。人相を聞いたが、涼は笑顔で首をふった。

――だって彼はよく名前を変える。目的のためなら、どんな苦しいことも平気でいる。

「顔だって、ふだんは変えているかもしれないから」

自分にはあの血の匂いがあるからすぐにわかる。だが、巧猿には……そこで、ふと思いついたことがあったらしい。一つだけ、わかるかもしれない印があった。

「小さい星形のアザがあるんです。左の耳の下に……うつむいた時にしか見えないから、本人は知らないかも知れません」

——セイラ・テンプルにもどったリューとイグナチウスは、報告を終えてから居室にもどっていた。

香港、セイラ・テンプル。

新界の南西にある、小規模な要塞島だ。外見は瀟洒だが機能は堅固で、独自の小ポート（港）すら備えている。

……居室に入ると、イグナチウスはその侍者の少女を優しく抱きしめてたずねた。

「リュー、どこにもケガはなかったか？」

「ありません、そんなもの」

甘えるような声で、リューが腕の中でささやいた。それならいいが……イグナチウスはまず、本島の任務を一人で果たしたことをほめてから、たしなめるために少し怖い声をだした。

「だが、リューはもっと臆病にならなければいけない！　強さなど限界があるのだから、妖しい技を使う者が相手の時には、逃げて私にまかすくらいでなければ駄目だぞ……」

リューはクスクス笑ってイグナチウスに言いかえした。その目は星のように輝いている。誰よりも強い優しい、自分だけのラーラなのだ。

「ラーラのリューにはあの程度の輩、一人でも充分です！」

「こらッ！　お前は、ラーラの言葉を少しも聞かないのだな？」
わざと乱暴にゆさぶって叱った。
イグナチウスにとってこの少女は、腕の中に星を抱くような最愛のエリュシオンである。
――能力も人並み優れ、通常の任務なら一人きりでだしても不安はない。
だが、嵐を避けて本島で待つようにと言われていたのに、イグナチウスの無線をきくとどうしても言うことがきけず、たった一人でアリエナ号まできてしまった。
「困った、悪いリューだ！　罰則が欲しいということなのか⁉」
「ラーラがくださるのなら、なんでも」
本当は、一晩でも離れているのは嫌だったのだ。誇らかに胸をはる少女の表情に、つい見惚れてしまった騎士が、あたりに漂う菫のような香りにふと気づいた。
「リュー……いい香りがするね。どうした？」
少女はふいに頬をそめて、彼女のラーラを見た。
「あの……香水です、ラーラ。華星街のアーケードで見たのです。どうしても欲しくなって、でも……」
あまりあいませんか……はにかむような笑みをつくり、それからすぐひるがえって逃げだそうとしたリューの手を、しっかりつかんでふたたび腕の中に引きもどした。
「とても気に入った」

「ラーラ……」

「とてもいいよ、リュー。いい子だ、よく似合う……」

さあもっと近くにおいで、かすむような目を閉じたリューの上に、イグナチウスの低いささやきが聞こえる。

「愛しいリュー……本当は私も離れる夜がつらかったぞ」

――それからの時間は彼ら二人だけのものだ。誰にも邪魔はさせない……。

やがて……イグナチウスの腕の中でリューが半身を起こした。

この地で、騎士団は戦いを終わらせて久しい。

――〝大公〟との決着は数年前に、すでにすんでいた。

レーテア王家が香港に着いてからの年月も、大公側は王家と騎士団を放ってはおけなかった。ただし、ゆえもなくほかの地域に兵をだせば、こんどこそ連邦による制裁が恐ろしい……しかも香港は、それ自体力のある自治区だったので、大公の動きは闇からに限られていた。

レーテア王家も、香港で態勢をたてなおした。香港のこの孤島に拠を構え、大公からの追っ手にそなえたのだ。

――すでに敵とみなした相手に対する騎士団は強い。

次々に送られる刺客もことごとく屠った。

そして時がきて、さしもの大公も自分の寿命が尽きる日が近いことに気がついた時。彼はついに刺客ではなく、彼の精鋭隊……軍隊と呼べるだけの人数を投入して、セイラ・テンプルに攻撃をかけさせた。

〝ほとんど狂っていたのかもしれない〟というのが、のちの人々の意見である。

先にもいったとおり、そのような部隊を動かせば連邦がそくざに彼を処断するだろう。悪魔のように賢かった大公が、なぜそうした自殺的行為にでたのか……手にとどく限りを食いつくして支配し、誰からも愛されなかった彼にとって、死のまぎわまで残ったものは流浪の王家と騎士団の強い絆への憎悪だったのだろうか？

最後の攻撃は夜襲。セイラ・テンプルで死闘がくりひろげられ、騎士団は勝った……大公はその知らせを待たずに死んだらしい——あるいは、知らせを受けて連邦の強制官がくる前に毒を飲んだとも。

以来、騎士団にとって香港は穏やかな安らぎの場所だ……この香港にもどった時だけは騎士たちも戦場を忘れ、つかのまの聖域を楽しむのだ。

——そして現在、レーテア騎士団のつきせぬ望みはかつての故郷レーテアへ帰ることだ。

レーテアの故地への帰還は、彼らの共通の悲願といっていいだろう。

ただし、まだレーテアには大公の同盟陣が残っている……かつて大公と結び、王家を追いだした同盟者たちの地域がある。彼らは大公の死後、すばやくレーテアの地を分割し、いま

のところ連邦の介入も防いでいる。
——流浪の騎士団がもう一度、彼らの王国にもどれる日がくるのだろうか？
多くの人がきわめて困難だと思っていたが……。
「ラーラ、こんどはどこにいきますか？」
リューの問いに、イグナチウスはしかし、首をふった。
「とうぶん、我々は香港に居続けることになった」
「どうして……？」
「長老たちは、我々だけでなくすべての騎士に香港へもどるよう指示をだしている……」
戦う技だけでなく、知力にも優れていたイグナチウスは、うすうす察してはいたことなのだが、やはり身内がふるえるような気がする。
まだ多くのことは言えない。だが、
「近いうちに王家より、私たちに話されることがあるようだよ」
そう言うと彼は少女の肩を、強く抱きしめた。
「いずれにせよ、これでお前にしばらく香港のあちこちを見せてやれる！　美しい自治区だよ、ここは……人々が楽しみを得る場所も驚くほどあるのだよ」
——若さの盛りを戦場で過ごさせてしまうことを、心のどこかで不憫に思っている。
どの騎士もだ。みずからは砲火の最中で生きるのが自然な彼らが、エリュシオンに対して

は時に眉を曇らせるほどの憂いをみせる。

リューはその意味がわからぬという顔で、窓の外……海のむこうにひろがる夜景を指さしていた。

「なんてきれい……ラーラ、ほら見てください！」

この街は美しいが、リューには一時の場所としか思えなかった。

ほんのしばらくのあいだ、必要な休息をとり……そのあとはまたラーラと二人だけになって旅だつ場所。騎士の生命が戦場で輝くことをエリュシオンたちは知っている。それならば、傍らでただ一人の愛される者であることだけが彼らの望みだ。

それでも、この美しい街には目をみはらせる繁栄と豊かさがあった。

この夜景、華星街や皇麟街のにぎわい。あふれるばかりの華やかな細工や、無造作にそれを扱う人々。砂漠に生まれたリューには、まだ見たこともない光景ばかりだった。

「……この街はまるで旧世界のようですね」

かすかな、タメ息に似た声で、リューがささやいた。

多くの人と物資が通過する交易点。思わぬ人々がめぐりあい、運命の糸が引きあう街なのだ。甘いリューの声が、いつしか遠くを見るようにかわっていった。

「ラーラがアーサーと出会ったのも、この香港だったのですね……」

返事のかわりに強く抱きしめた。

――あれは……もう7年も前のことになるのだ……。

7年前。その年、呪うべき大公はまだレーテアの地に生きていた。

騎士団は香港で、油断なく守りをかためてはいたが、来るべき最後の大襲撃を予想していたほどではなかった。

セイラ・テンプルでの役目にあたる者をのぞいて、多くの騎士が傭兵の任務について香港島を離れ、あるいはもどってきて新しい任務を探すためにセントラル・ボード（傭兵の仲介機関）を訪れていた。

――イグナチウスもその一人であった。

イグナチウスはその時、二十歳を過ぎたばかり……侍者はまだ決まっていなかった。

……彼の父はレーテアから王家につき従ってきた貴族の一員だったが、香港の街でごくあたりまえの娘と愛しあい、妻に望んだのだ。

レーテア王家の法は厳しいが、このような選択にはいっさい干渉をしない。

もちろん、これによってまた一人、貴種の純血が薄まってしまうのは事実であり、長老たちにとって、できるならば避けたい事態だったのだろうが、愛を重んじるレーテアの気風があった。イグナチウスはその父から、能力を伝えられたのだ。

――騎士イグナチウスはレーテアの純血の末として生まれ、彼自身の能力は生来とても強

いものであったが、貴種としての力は父の代で失われている。
したがって、彼は力を伝えるべき侍者を求めていた。
なぜか……それは若いイグナチウスにとって必要もない問いだった。ただ、心から求めていてやまなかった。
レーテア騎士団の者の心が、ほかの世界の者と違うなどという言葉はみな間違っている……騎士にも感情は自然にある。よろこびも悲しみも変わりなくある。
侍者たる者を求めるのも、誰にでもわかる理由からにすぎない。生命は……それのみでは完璧とはいえない、輝きがなければならないのだ。輝きを知らぬ生命は弱く不完全で、風にきえる火のようにはかない。あきれるほど。
――騎士の生命をつなぎ、輝かせてくれるのはエリュシオンのみであろう。
〝我が傍らに立ちて、ともにあり、ともに戦う最愛の者が欲しい！〟
それはどこにいて、どうしてそれとわかるのだろう？　すでに相手を得た騎士らが一様に答える言葉は、〝その者に会えば世界がそれを知らせる〟と。
――エリュシオンを得た騎士は、わずかながら性格が変化することがある。
その最良の部分がひきだされるのだ……リューを得て、現在は思慮深いイグナチウスであるが、以前にはもっとむこうみずな、必要以上の冒険を好むくらいの騎士であった。
セントラル・ボードでその依頼を受けてしまったのも、そうした部分が働いたせいだろ

う。

――奇妙な依頼だったのだ。

〝名はあかせないが、ある大富豪の一人息子が、護身のためにシナンジュを習いたがっている〟場所は香港島のとある別荘、報酬はけたはずれだった。

――シナンジュを、護身のために？

それはどう考えても妙な話だった。シナンジュは非常に古くからある武道の原型ともいうべき技で、いまでは伝えられる者も少ない……レーテアのような集団の中に、かろうじて数人の使い手がいるくらいだった。

イグナチウスはその一人で、みずから会得していたのでよく知っている。シナンジュの特徴は、なによりも必殺、そして暗闇での攻撃を可能とするところだったのだ。

――どう考えても暗殺か夜襲むけの武術ではないのか？

仲介者もその真意はわかりかねると言った。依頼の真の狙いがわからないということだ。

「おもしろい！　ひきうけた」

それが運命の分かれる道であったのだ。

……指定された屋敷にでむくと、たしかに見事な邸宅だった。

謎の依頼主が姿を見せるまで、彼としてはいくつか罠の可能性すら考えていたのだが、あらわれたのはたしかに大家の執事らしい白髪の老人で、イグナチウスが騎士団の者であるこ

とを知ると、かすかに眉をよせ、くちびるを噛んだ。
「レーテアのかたがお一人でいらしたということは……」
老人は顔をあげ、鋭い……非常に鋭い視線でイグナチウスの目をみつめた。
「わかっておいでと思うが、この屋敷のご主人様はまだ若いおかたで、あなたにシナンジュの手ほどきをお願いしたいと思っておられる。だがそれ以外のことについては、当方はそちらの騎士団にはまったくかかわりたくないと申し上げておく」
――なるほどな、〝誘惑の騎士団〟か！
またしてもあの噂！　騎士団の習わしについて巷でささやかれている流言は、どれもデタラメもいいところだ……イグナチウスが心で冷笑した。
だが執事の老人は真剣だった。不似合いな刃のような視線で、相手の目を捕らえたまま、
「レーテアのかたと知った以上は、お引きとりいただくのが望ましいのだが、あいにくほかの師範がみつからない以上しかたがない。しかし万が一にも、ご主人様に不都合があった場合には、こちらも騎士団を訴えるだけではすまされない」
あらゆる手段を尽くして、セイラ・テンプルの既得権を奪ってみせるとさえ明言した。
一瞬、拳を握りかけたイグナチウスだが、次の瞬間には軽くうなずいていた。
――まあよい、言わせておけ。何ひとつ知りもせぬ愚か者とは、かかわりを持つのも無駄なことだ……。

「いかがですか、騎士団のかた。はっきりとこの場で誓っていただけますか？」
「誓いましょう」
――頼まれたって、ごめんだとな！
執事はようやく彼を屋敷の奥に案内した……すると本当にこの屋敷の主の望みは、シナンジュを教えさせることだけなのだろうか？
表には一分の隙も見せず、心でだけイグナチウスはいぶかしんだ。
それはかえって奇妙な話だ。ふつうに生活している者が、シナンジュを学びたがるものだろうか？　この執事はたしかに主人とやらに忠義なようだった……さきほどの会話自体は不愉快だが、主人を案じる心には好感がもてた。
〝頼みの後継者〟か？　何かの理由で暗殺者に狙われる一族の最後の男子か……？
――執事の口ぶりから、生徒になるのはまだ若い者のようだが……。
奥の一室の前で執事が恭しいノックをした。重厚な樫の扉のむこうから声がかかる。
「入るな、ウォルフ、僕だけで会う！」
執事はハッとして命令に従うしかないようすだった。
〝たしかに若い声だった〟。イグナチウスが代わって部屋に入る……扉のむこうは真っ暗で、闇の中からいきなり1本の短剣が飛んできたのだ。
「……！」

イグナチウスには空気を裂く音でわかった。とっさにマントでふりかわすと、シャンデリアがついた。

厚いカーテンも開けられて、黒い上着の少年が一人、その側に立ってこちらを見ていた。

「なるほど、シナンジュは本当に闇夜でも通用できるのだな……」

――まさか、それだけのために、この挨拶を!?

白髪の執事があわてて室内に駆け込んできて、イグナチウスと少年のあいだに盾のようにして入った。

若いというより、まだ幼いほどの少年だった。

13か……多くても14歳。不意をつかれたイグナチウスの目には、もっと下の年齢にも見える。シャツは白く、黒の細いタイをしめている。浅黒い、美しいといえる面だちの子供だったが、深い青い瞳は突き刺すような光を放っていた。

執事がイグナチウスを指し示すと、ただ黙ってうなずく……。

――こんな子供に!?

さすがに彼が執事をふりかえると、老人は肯定した。少年は……まるで吟味するようにイグナチウスの前に立って、敵意のある薄い笑みをうかべている。

短剣をひろって投げかけると、苦もなく側の本でうけた。

「それがオモチャじゃないことは知っているらしいな、暗闇で受けきれなかった時は生命に

かかわるのだぞ！」

〝死ぬ者は死ねばいい。能なしに用はないのだ〟というのが、少年の答えだった。

「……名は何というのか？」

その問いに彼は、あざ笑うようにこう言ってかえした。

「僕の名は〝アーサー〟だ、騎士団の人……それでお前のことはなんと呼ぶ？」

〝それでお前のことはなんと呼ぶ？〟

それはあきらかに偽名で、しかも隠す気すらないと言っても同然だった。

〝どうせ一時傭兵を買い取ったにすぎない。名前など、どうでもよいし、お前に教えてやる必要もあるものか！　こちらもお前の名など知りたくもない、シナンジュの技術だけあればよい。だからお前だって、てきとうに名乗っているがいいさ！〟

敵意に輝く瞳に、瞬間すべてを忘れるくらいカッとなった。

ふりあげた手をとめる間もなく、少年の頬をとらえてしたたかに床に打ちすえていた。

「このッ……うつけめ！　アーサーとやら言ったな、まず教えてやるのは目上に対する礼儀だ！　かほどの侮辱に生かしてやるのは、貴様がものも知らぬ愚かな子供だからだ……忘れるなッ、あなどられてすむ者など騎士団にはいないのだぞ！」

――うつむいた時に、左耳の下に薄青い星形のアザがあるのが印象にのこった。

渾身の力でなぐったので、頬にはっきりとした跡までが浮かぶ……恐ろしいほどの目に

なった執事の老人が口を開こうとしたのより早く、少年が先にノーと叫んだ。

「いや……ウォルフ、何も言わないでいい、僕のほうが悪かった。このかたを部屋に案内して」

支えようとする執事の手をはらい、自分で立ちあがると、少年はイグナチウスに礼をして、明日から習練をはじめて欲しいと言って部屋を去っていった。

執事について部屋へ行く間中、手はまるでしびれたような感じが残っていて、とても奇妙だった。執事が丁重に少年の非礼をわびて部屋をさがってからも、なかなかその感覚はなおらなかった。

なぜ気づかなかったのだろう⁉　その時、すでにあの少年の怒りが自分のなかで増幅されたのだということを！

少年の感情につられて、イグナチウスの心が同じ波長を描いてみせたのだ。その夜、寝苦しく海の音を聞きながら、彼はまだ残っている怒りに自分でとまどっていた。

――まあいい、どうせすぐに音をあげるさ。

シナンジュを本気でやればどれほど苦しいものかを思い出して、ようやく薄笑いをうかべた。あんな子供には、3日で耐えられなくなる。そうしたら思うさまあざ笑って、次の戦場へでていこう……。

けれども彼はその夜、青い瞳の夢を何度も見ていた。



……翌日から始められたシナンジュの習練は、しかし何週間も続くこととなった。

――アーサーは驚くほど優秀な生徒だった。

アーサーと名乗るこの少年は、すでにそうとうの鍛練で身につけた武術の基礎を持ち、イグナチウスをひそかに驚嘆させた。

この年齢で、この戦闘能力はあまりにも異常であった。

しかもアーサーはそのうえまだシナンジュをと熱望するのだ。これほど苦しく、残酷な訓練を……始めからある奇妙な謎は、深まるばかりだった。

屋敷についても、奇妙な点は多かった。

高い塀、厳重な警備システムは資産家なら当然のことだろうが、それにしても不思議な気配がある。わけてもおかしなのは、あのウォルフという執事だった。

――イグナチウスが指示した必要な設備は、文句のつけられないかたちで短期間に邸内のフロアに用意された。

目をみはるほどに手際がよい。なまじな者をしのぐ知識もあるらしい。だんだんこの執事は見せかけどおりの人間でないように思えてならなかった。鋭すぎるし、行動も時に奇妙だった。

彼は時おり、苦労して執事に見せかけているようすですらある。とりわけアーサーに対し

て……。

――この二人は、主人と執事という〝役割〟を自分たちのあいだに作りあげようとしている最中なのではないか？

イグナチウスはそう感じて疑っていた。老人はアーサーの前で常に執事としてふるまう。彼に服従され、かしずかれることに、少年をはやく慣れさせようとする姿にも思われた。

逆だったのは一度きり……イグナチウスがアーサーに、狭い吊り台の上で目隠しをして反転させようとした時だけだ。

訓練の段階が進み、もはや型ではない。補助具はなし。落下はもちろんありうるし、そうなれば無傷ではいられないだろう。万が一の時にはイグナチウスが助けてやれるつもりだったが、最後の保証はできないのだ。

――イグナチウスとしては、ここで教練を終わらせてもよいと思っていた。

すでに相当の技術を教え終わったのだし、ここから先はさらに苛酷な方法でなければ教えられない。それははたして、彼に必要なものなのだろうか？

吊り台の高さを見て顔色を変えた執事が、イグナチウスに高度をおとすことはできないかとたずねた。おとせばこの先の習練に必要なカンは身につかなくなるだろう。

「ここまで……ということになるが、よろしいのなら」

「それは、しかし……」

蒼白な顔で主人をチラリとうかがいながらためらう彼を、アーサーが強引におしのけた。
「どいてくれ、ウォルフ。僕はやる」
「いえ、いけません、これは危険すぎるッ」
「黙れッ！　やらなければならない！」
……ウォルフが少年に逆らったのは、この時かぎりだった。
青い瞳のアーサーは、シナンジュの習得のためならば、どんな危険も苦痛も拒まなかった。熱意になかば引きずられるような形で、イグナチウスは彼に教え続けた。なんのためかは依然わからぬが、凄まじいまでの集中力と熱意。
――彼はそのためなら悪魔に魂を売ることも厭うまい。
無口で、誰にもなごまぬ少年だった。
毎日、16時間ほども一緒にいて、うちとける一瞬すらないのは驚きというよりほかない。アーサーの側によると、いつもヒヤリとする冷気を感じた。戦場では殺意にも殺気にも慣れているイグナチウスだが、この青い目の少年が漂わせているような冷気ははじめてだ。
――あの子の笑顔を、まだ一度も見たことがないな……。
自分を捕らえたのは好奇心の罠だと、イグナチウスはまだそう考えていた。
〝騎士たる者のあるべき姿じゃないが……〟、いくども彼はこのアーサーの真の目的をさぐろうと接したが、堅い鎧にはわずかなチャンスさえなかった。

アーサーはどこかほかの街からきた者のように思われた……香港仔の享楽的な感性などは彼はまるで持ちあわせていない。青い瞳の光は、すべてを憎んでいるようでもあった。

一日の終わり近く、彼はフロアの端の窓辺に行き、眼下の海を見ていることがよくあった……そんな時、彼はその海を越えたどこかを見すえているように感じられた。

——だが、すべての謎がとける日はきたのだ。

その日、アーサーは体調がひどく悪く、何度か大きなミスを繰り返した。これ以上続けさせないほうがよい……イグナチウスは判断した。

「続ければできるようになるから！」

「いや、今日はここまでだ。これ以上は意味がない」

思えば、男が気を失うような訓練を続けて何週間にもなるのだ。鍛えてあるのだとはいえ、幼いアーサーの身体にはそうとう無理が溜まっているはずだろう。

——数日、いやもっと休息をとらせたほうがいいか……。

ここまで培った暗闇のカンを鈍らせるのは惜しかったが、執事にそう伝えると、明らかにホッとした顔色になって承知した。

その夜中にイグナチウスの扉を激しいノックでたたき、呼ぶ声がした。

「フロアにおいでくださいッ、アーサー様が!!」

幽霊じみたウォルフがイグナチウスの手をつかんだ。なにか恐ろしい事態が起きたのだ。

駆けつけてみると、少年が重傷を負ってフロアの壁ぎわに倒れていた。
ひと目みてわかった……補助なしで、吊り台から落ちたのだ。
〝言うとおりに休まなかったのか！〟
それどころか、深夜ひそかに暗闇で無茶を試みたのだろう。土気色の顔で、手足の角度が奇妙にねじれた状態に見えた。
執事の老人が駆け寄って抱き起こすと、右肩がダラリとさがっている。その時、イグナチウスにははっきりとわかった。
――ああ……この子はハンターになるつもりなのだ!!
これほどの傷を負いながら、声だけはなお殺し続けていた。傷ついた時には歯をくいしばってでも悲鳴をこらえる。敵に居場所をさとらせたら最後と知っているからだ。
間近で傷を見た老人がうめき声をあげた。少年は肩がくだけている。
「……ちくしょうッ！　ああ、なんということだ、大切なお前をこんなことで失ってたまるものか！　この肩ッ……どうすればかわってやれるんだ!?」
〝この肩はもう使いものにならないだろう〟、初めて少年が恐怖の悲鳴をあげた。
「駄目だ!!　いやだ、ウォルフ、それだけは！　そうなるなら死んだほうがましだッ！」
その目にいっぱいに満ちていた恐怖を、イグナチウスはまだ忘れられない。
たとえ犬ころと言えども、あのような目をさせて捨てておくことができようか？

近くにより、くだけた肩に手をかけると、思いきり強く〝力〟を送りこんだ。自分でもかつてないほどの光があふれて、アーサーの傷を癒やしていく……。

数分で、額から苦痛の汗がひいていった。

「……動かしてごらん」

魅せられたようにイグナチウスの光をみつめていたアーサーが、ようやく我に返ると、肩にそっと自分の手をふれた。

――くだけた骨があとかたもない。指先までちゃんと動く。

「まやかしじゃなかった……のか……」

息をのんでつぶやく少年の傷を、もう一度たしかめてからイグナチウスは手をはなした。

「そうとも、これがレーテアの騎士の技だ」

レーテアの騎士だけが持つという異能の噂。光は時に敵をなぎ倒し、強い者はそれで生命を奪うこともできるという……。

翌日、イグナチウスの部屋にウォルフがきて、ある提案をした。礼儀にはずれぬよう、言葉を選んではいたが、

「……つまりは〝その技をいくらで売るか〟と？」

「さよう、いくらでもお払いする」

無表情をたもったままで彼らはむかいあっている。イグナチウスはやがて、穏やかに首を

ふった。

「執事殿は我ら騎士団の定めについても、よくご存じのはずだ。あの力は、金額で売り買いできる性質のものではない。私があれをほかに伝える方法はたった一つ……だが、それはあなたのお望みではありますまい？」

「たしかにそのとおりです。私の生きている限り、アーサーにはそのようなことは決して」

不思議に侮蔑された思いにはならなかった。だが、どうしても訊ねてみずにはいられなかった。

「……あなたは、彼のなんなのですか？」

「私はあれの父母から、あの子を託されたのです」

「彼は、なんのためにシナンジュを覚えたがっていたのですか？」

「それは……申し上げるわけにはいきません」

老人は目を閉じて、何かを思い出しているようだった。

「私は……愚かな人生を送ってきた男で、この年になるまで他人を愛することなど、一度もなかったのです。気がつけば手につかんでいるのは汚らしい金ばかりで、生きていてよかったと思えるようなものは、何一つまわりに見当たりませんでした」

だがアーサーの両親にめぐりあって、初めて目をひらかされた。

「気高い、優しい人たちだった……医師だったのです。彼らが……死ぬ間際に、私にアー

サーを託されたのです。私の生命はその時からあれのためにあります」
「だが、なぜそれならあなたは、アーサーにあんなことをさせておくのですか⁉」
常識ではありえない殺しの特訓を続けるアーサー。少しでも愛情があるなら、やめさせるべきだ……ウォルフはかたく目を閉じた。
「わかっていても……あれの両親は私のために生命を落としたのです。ろくな価値もないこの私のために！　私にはもう……仕えることしかできないのだ」
イグナチウスは痛ましくその老いた顔を見守っていた。
自分はもうこの屋敷をでるほうがよいでしょうな、と言うと、ウォルフはただ一度うなずいて同意した。
それから、昨夕の事件について深く、その頭をさげた。どれほどありがたかったかは口では言いつくせない……そう言うと、1個のアタッシュケースを前に置いた。
「少ないが契約とはべつの謝礼金と思っていただきたい。助けてくださったお礼です」
これならば受けとれる。イグナチウスは短く感謝をのべ、おたがいに別れを告げた。
……執事が去ってから荷物をまとめたが、時刻はすでに昼すぎだった。すべてがまとまったころには夕暮れがしのびよっていた。
あかりもつけないまま支度を続け、机の上にとりのこされたアタッシュケースを最後にふりかえった。

――これを持って出て行くのだ。

そう思い手をかけた時に、扉の前に誰かが立つ気配がした。駆け寄って開けると、そこに彼がいた。

「アーサー！」

そのときはじめて、イグナチウスは自分がどんなにこの子を待っていたかを、その胸で知った。

白のシャツに黒の細いタイを結び、自暴自棄な目をして立っていた。

……敵意のあふれる青い目を見た瞬間、言葉がもう口をついていた。

「よくきたね……入りなさい」

冷気の塊が彼の横をすりぬけて部屋に入ってきた。ツカツカと部屋の奥まで進むと、窓を背にして腕をくみ、刃のような目でイグナチウスを見すえている。

〝ウォルフから話を聞いたのか？〟と訊ねると、そうだと答えうなずいた。

「ウォルフは……しかし、このことをなぜ……」

「彼は急用ができて街にいる」

――それでこの子は、ここへきたのか……。

とりあえず座るようにと言うと、おとなしく言うとおりにした。ヒザの上に手をおいてきつく握り、イグナチウスのほうには目もむけない。

つづけて隣に座ると、憎悪と反感がビシバシ突きささるほど感じられる。

――全身刺だらけ……まるで山アラシだ。

ふと笑うかすかな声を聞いて、爆発したようにふりかえった。

「何がおかしいッ!?」

「なにも……」

そう言いながらも、イグナチウスは事態に呆然としていた……騎士団の人間にこんな行いが許されていいはずはない。〝誘惑の騎士団〟〝魔性の騎士団〟。汚らわしいその名があればこそ、騎士団は潔癖であらねばならないのだ。

――アーサーは誤解している……騎士団の能力は金で買えないのと同様、そういう方法でも手に入らないのだぞ。

青ざめて歯をくいしばっているようすを見れば、この少年の考えはすぐによめる。

どうしたら、わからせることができるだろう!?　取引はできない。自分は決して、Gの代わりにこの子を求めたわけではない！

〝それならば、なぜ数分前この部屋に入れた？〟なかば夢を見ているような気持ちで、イグナチウスが扉をふりかえる。

騎士ならば、冷静に話して部屋にかえすだろう。それからすぐに立って、ここを出ていくのだ……だが自分は、待っていたようにアーサーを入れてしまった。

——待ちこがれていたように！

思わず目を閉じて、祈りかけた……気がつくと、アーサーの瞳がジッとこちらのほうをうかがっている。

「……なにをグスグズしている？　やりたいことがあるなら、さっさとやればいいだろう」

青白い顔に冷ややかな笑みをうかべて、くちびるをゆがめるようにしてそう言った。どんな苦痛も屈辱もこらえて耐えてみせる……新しく強力な武器のためなら！

イグナチウスの頬に、痛むようなほほ笑みがうかんだ。

——この私が、本当にそんなことを望むと思うのか、アーサー？

無意識に手をのばして、あの肩にさわっていた。

レーテアの人間はみずからを厳しく律する。それは真実だ。いついかなる時でも。

——だが、ただ一度だけの例外がある……その者が自分の侍者たる場合だけには！

それが彼のエリュシオンであれば、すべての戒律は破られるためにあるのだから……。

「やめろ。何をするッ」

ふたたびイグナチウスの手が光って、傷のある肩をなお癒やそうとしているのを感じて、アーサーが思わずふりはらっていた。

「したいことがあれば、と言ったはずじゃないか？　これがいま、私のやりたいことだ」

イグナチウスの言葉にくちびるを噛んでアーサーが横をむく。かたくなな青い瞳、これを

いったいどうすればいい？

――秘密を知れ。

とつぜんイグナチウスの本能がそれを告げた。この少年の本当の望みはなんなのだろう？苦痛と歳月と執念をかけて、欲しがっているものは何か？

答えのカケラはもう持っている。アーサーはいつも海を見ていた……ウォルフといったあの老人は、夕方、アーサーの親たちは、彼のために生命をおとしたと言った。

無理に顔をあげさせると、視線をそらさせぬようにしてたずねた。

「アーサー、あの海のむこうに……何が見えている？」

反応は激しく、驚くべきものだった。言葉ではない……拒絶の動作でもない。少年は目を見開いたまま、手の中で石のように硬直した。

イグナチウスは前にもそれを見たことがあった。

それはどこだったか、内陸の紛争地帯で……戦場のまきぞえになった人々の中にいた幼い少年の記憶だ。その子は家族のなかでただ一人の生き残りで、とりわけ可愛がっていた妹を目の前で殺されたのだという話だった。

愛らしい子供で、なぐさめてやる大人には涙をうかべて返事もした。けれども彼らが殺された妹のことについて話させようとすると、その子はふいに手足をこわばらせ、ひとことも話せなくなってしまうのだ。

そっくりだった。イグナチウスは低い声でささやいた。
「そうだな、家族が死んだのだ……お前の両親たちか？」
ものも言えぬ青い瞳に、これ以上はない苦痛の色がうかぶ。
「……目の前で殺されたのだな？」
苦しげに悲鳴をあげて暴れるのを、必死でおさえつけねばならなかった。謎は解けたと思った。海を見ていたアーサー。笑わなかったアーサー。
「殺してやる、殺してやる、殺してやるッ！」
軽く気をかけて意識をきってやらねばならなかった。
――そうか、アーサー、やっとわかった。
なだれこんでくるような痛みの記憶に、イグナチウス自身気が遠くなるほどだ。
誰よりも愛していた両親は、目の前で惨殺されたのだ……信じていたものすべてが死んだその時、アーサーも一度死んだのだろう。
ふたたび立つ時にはべつの人間になるしかなかった。愛することも、笑うこともないべつの少年。日々をすごすのは復讐のためだ。殺すための悪魔になって、もう一度海のむこうのどこかに帰るのだ……その時は！
――シナンジュをおぼえるのは、再生の儀式でもあるのだろう。
だがそれは魂のない生命への道だ。

――駄目だ、アーサー、そんなことはいけない。

〝私が許さないぞ〟、暗色の髪に初めて手をふれる。青い瞳がやっとひらいた。

「アーサー……殺しても、失ったものはかえってこないよ」

瞳からみるみる生気がぬけていくのがわかる。言葉は真実だろう。だが、それではもう生き続けることができない。

「……苦しいんだ」

とても低い声で少年が言った。一瞬、手をさしのべるような動作をしたが、その手をとる前にやめてしまった。

「レーテア騎士団の人。もしあの力をくれると約束すれば、どんなものでも僕から取っていけ。でも本当にみんなムダなんだって、はじめからわかっているなら……もう何もいらないから、眠らせて。苦しいんだよ」

……うつろなしぐさをする。

死者を追って逝くことは騎士団ではけっして許されない罪だと、イグナチウスは言った。

「だからお前に手を貸すことはできない。でもアーサー、わかっているよ……愛する者を失う悲しみなら、騎士は皆よく知っている」

〝愛する者を失った時、残された者の悲しみは海のように広がり、その果てすら見えなくなる〟と騎士団では言う。レーテア騎士団、第二の言葉だった。

生と死の別れはレーテアには多い。だからこそ強く信じる言葉がある。

「死にゆく騎士なら最後に思うことだ……声にだして伝える力があれば、かならず愛する者に言う言葉だ」

もし侍者が信じたと心から誓うならば、その騎士は安らかに死ねるだろう。

「そうだ、アーサー。いまお前の目の前にも、悲しみが海のように広がって、どこにも行き場所がないと思うのだろう？」

〝だがこの海の果てには、かならずあらたな地平線がある〟

「残された者の苦痛は、騎士ならば誰もが知っている。だが、アーサー……去りゆく者の願いもまたつねに一つと知っているか？」

〝どの海の果てにも、あらたな地平があるように。悲しみの海の果てには、かならず新しい何かがお前を待っているだろう。その地はある。愛しい者よ、お前は生きて……それを見るのだ！〟

「アーサー、愛していたことは忘れてはならない！」

必死の動作で顔をそむける少年の手を、イグナチウスが強くつかんだ。

「お前の父と母が最後に望んだことはなんだ？　復讐か？　そう望むと約束させたのか⁉」

疑うことは許さない。悲しみの海の果てにはかならずやあらたな地平がある。

「彼らがお前を愛していたなら、願ったのはたった一つだ。この海の果てには、新しく輝く

場所がきっとある！　お前は生きて……それを見とどけるのだ、どんなに辛くとも！」

「……僕にはできないッ」

その頬に涙がながれているのを見た。手をあげてぬぐってやるあいだも、少年は動かなかった。その手はとてもあたたかかったのだ。

「できるとも、アーサー。お前はもう一度愛されなければならない……」

なにげなくふれている手から、淡い光が広がるのを見てイグナチウスが息をのんだ。

……輝きは、いまでは少年の内部からはじまっていたのだ。

あかりひとつない部屋の薄闇のなかで、それだけが刻々と光をましていく。生気の光が指さきまで伝わり、闇に流れだすのを声もたてずにアーサーが見ていた。

恐れにも似た表情でこきざみに身体が震えている……イグナチウスはもう迷わなかった。

アーサー、とうとうめぐりあえたな。

「やはりお前だったのか、私のエリュシオン……」

きつく抱きしめて、くちづけするつもりだった。

その時、あの目に浮かんでいたのは憎しみではなく、ただためらいと、未知に対する恐れだけだったとイグナチウスはたしかに思う。

そっと頬をささえて、くちびるがあおうとしていた。

「愛しいアーサー……本当はなんという名前だ？」

ああ、どうしても取りもどせない一瞬というものがあるのだ！　二つの青の泉が、まじろぎもせずにこちらを見ていた。自分はその肩に手をかけ……。

――けれども、そうはならなかった。

影が一つになろうとしたその時に。

いきなり耳を聾する爆音とともに、突風が窓のガラスをめちゃめちゃに壊していった。

何があった!?　ふりむいたイグナチウスの目に、新界の南西の海上で巨大な火柱があがるさまが焼き付けられた。

「……セイラ・テンプルが!?」

まさしくそれは騎士団の本拠だった。かつて見たこともない攻撃にあっているのだ。身体中の血がいっきに凍る思いで、やみくもに立ちあがった。

王家と唯一の聖域が大公からの攻撃にあっているというのに、何も知らず、武器すら手から放していた。なんという油断！

――まだ間に合うだろうか!?　間に合ってくれ!!

「い……行かなければ！」

あの時、なぜ自分は一言の約束すら交わさず、アーサーの手を放してしまったのだろうか？　なぜ、そんなことができたのか!?

悔やんでも、悔やみきれない。

イグナチウスは遅れながらも激戦に駆けつけ、抜群の戦功をたててみせた。ろくに居場所も知らせず、騎士団への連絡を怠っていたことすら不問となった。

騎士団の勝利が決まるやいなや、まっさきにあの屋敷にもどり、アーサーの名を呼びながら邸内に入っていった。

……だが、そこには誰もいなかった。

アーサーも、執事のウォルフもすでにおらず、わずかばかりの使用人の姿さえない、完全な空き屋敷だった。

ガランとした邸内のあの部屋に、イグナチウスの持ち物だけが手つかずで残っていた。

――それ以来、アーサーは私の前から消えてしまった……。

イグナチウスは憑かれた者のようになり、何か月も消えたアーサーの行方だけを追い続けたのだが、まったくの無駄であった。

騎士団の長老会は、この探索でイグナチウスが自分を使い尽くしてしまうのを恐れて彼をつれもどし、厳命で香港から遠く離れた戦域にかぎった任務を与えた。

それでもなお何年ものあいだ、イグナチウスは笑顔をもたない騎士であったが、やがて砂漠の戦線でリューと出会えた……。

「ラーラ……どこにいますか？」

優しい声がイグナチウスを夢想から引きもどした。

――ここにいるよ、リュー。お前の側だ。

心の中だけで答えて、あたたかい指先を握った。金色の少女はしっかりと指をからめたまま、甘い眠りの中へおちていく。

見守るイグナチウスの目には、愛しさがあふれていた。

リューによって彼ははじめて侍者を得て、セイラ・テンプルへもどってきた。心からこの少女を愛している。彼を〝ラーラ〟と呼べるのは、世界にリューただ一人だった。

――しかし、どれほど試みても、リューには〝癒やす〟力を与えることができなかった。リューのせいではない。この少女はまたとないほどの資質の持ち主で、現にもう片方の技ならば、騎士団でもリューにまさる侍者はいないのだから。

それでも癒やす技は……安らかに眠っているリューの側で、イグナチウスの表情にかげりがうまれる。

イグナチウスにはわかるのだ。その技はアーサーとともにある。

青い瞳のアーサーは、あの夜、イグナチウスの手をすりぬけて消え、二度と姿をあらわさなかった。すでにあれから7年にもなる……いまはどこにいるのだろう。

――もしあの時に、私が愚かにもあの手を放さないでいれば……。

いま、この横で眠るのは、リューではなくてアーサーだったはずなのだ。凍るような青い目をしたアーサー。愚かさから、私はお前を見失ってしまった。

〝どこにいるのだろう？〟

――私にとっての侍者は、あくまでもリューただ一人だ。

その心もいちずさも、かけがえのない私のリュー。侍者として片翼しか持てないリューが不憫だった。

リューはアーサーのすべてを知っている。だが愛によって盲目であるために、ラーラとすごす現在の幸福にだけまよいもなく酔っていられる。

だが時に……愛に輝く紫の瞳を見ると、とどかぬ過去からイグナチウスは青い目の記憶がくるのをとめることができなかった。

今宵、巧猿と名乗るあの香港人のカードに青い瞳があらわれたのを思い出して、イグナチウスはそっと身震いした。あの時一瞬、彼を殺してやりたいとまで思ったのはなぜだ？

幻はいつも驚くほどあざやかだった。

――アーサー、どこへ行った？　凍てついた心のままで、どこをさまよっている？

第三章　幽霊船の噂——従兄妹アリエナと巧猿

——夜明け近くにアリエナ号は、香港本島のポートに入港した。

一晩中、休む間もなかった涼がついウトウトしてしまっていたころのことである。寝ているうちに船からおろされて運ばれてしまった。

目が覚めたのは正午近く、巧猿の邸宅のなかである。

明るい、天窓のある部屋で、レースのカーテンごしに日差しがいっぱいに入ってくる。

「……いけない、眠っちゃったんだ」

目をひらいた涼は、起き上がってあたりを見回した。白い清潔なシーツとベッドカバー。美しい孔雀石の彫像が、四方にたっている。

温室咲きの蘭があふれるようにいけてある。巧猿らしい華美な好みだ。

すぐ隣のベッドで、あの幽霊船から救いあげた少年がまだ昏々と眠り続けていた。

——僕みたいに香港の外からさらわれてきたのかしら？

歳のころは涼と同じで、顔だちは整っている。いまはまだ青ざめているが、なかなかきか

ん気らしい上向きの顎をしている……涼は小さくうなずいた。昨夜は奇怪な追っ手に囲まれても、最後まで抵抗することをあきらめなかった。

いよいよ逃げ場がないという時になっても、守っていた品を渡すよりは、いっきに海に飛びこんでしまったのだから……。

――いったい、何をそんなに大切にしていたのだろうな？

それは黒い布につつまれて、少年の枕もとに置かれてあった。なるべく触らないようにして、ソッと包みをひらいてみると。

――それは1個のクリスタルだった。

「おはよう、涼！　ご気分はいかがかな？」

その時、ドアが開くとともにレン・巧猿が入ってきた。

「あ……巧猿、おはようございます」

「朝食の用意ができているよ」

うしろからは漢航海士が、両手にトレイを持って入ってきた……がむしゃらにつめこむ涼を、おもしろそうに見て、首をふりながら去っていった。

食べ終わるとすぐ、涼は巧猿にたずねていた。

「この……彼の身元はまだわからないのですか？」

すぐには答えずに、巧猿は視線をクリスタルにうつした。

「そうだね、医者はそろそろ意識がもどるはずだと言ったけれど……」
そのまま、クリスタルを枕もとからとりあげて光にかざす。昨夜から、何度も考えていたことであるが、これが本物だったらこの少年の身元を巧猿はたぶん知っている。
――ただし、まず本物であるのかどうか？
「もしかして、これが……クリスタルですか？　きれいな石だけど……」
香港の呪術士なら、かならず1個はそれを持つという独特の術具。
「そうだよ。それにこれはたぶん……」
手のひらより、少し大きいくらいの透きとおったクリスタルの結晶だ。特に細工がしてあるわけでもない、そのままの形だ。
無色透明だが、とても美しい。
レン・巧猿の手の中で、光線を吸って火花が深奥できらめくようにも見える。なにげなくのぞきこんだ涼の脳裏に戦慄が走った。
これは何かただならぬ品なのだと、瞬間的に理解していた。
――きれいなだけじゃないぞ！　この光、胸がドキドキするッ……。
「どうやら本物らしいな……」
巧猿は気をつけて布をもとにもどし、手を遠くに離した。
――これは五星家のクリスタルの一つだった。

香港屈指の名家、五星家に伝わる五つのクリスタル。
「僕自身の家にも、同様のクリスタルが伝えられているよ。ウン、とてもよく似ている……昨夜、見た時からそうじゃないかと思っていたんだ！」
ただし、魔力を秘めた本物のクリスタルであるかどうかは、確認できなかったのだ。
「五星家のクリスタルは門外不出だから、僕も他家が持つクリスタルがいつもどこにあって、誰の手で守られているかは、まったく知らないのさ。当主は、譲られたその日から自分だけが知る場所で管理して、絶対になくしてはならない」
——4年に1度の元宵節も、これなしではなりたたない……。
「クリスタルは五星家の相続の証でもあるからね」
「そんな大切なもの……どうして持ちだして逃げなければならなかったのでしょうね？」
「まだわからないが、いずれにせよこの子は五星家ゆかりの者だってこと……クリスタルに触れる程度の血筋でね」
巧猿は、みずから記憶をたどって五星家のなかで該当する年ごろの少年をさがそうとしていた。それがわかれば、このクリスタルがどの家のものかも、おのずとわかるはずだ。
涼はあらためて少年の寝顔を見て、力づけるように一度手を握った。何者か、まだわからないが貴重なクリスタルを抱いた少年……真夜子とおなじような赤みの濃い髪が、涼にはひどく気に入った。

昨夜の嵐の中、たった一人で勇敢だったことを考えると、悪い子だとは思えないのだ。

――はやく目が覚めるといい……そうしたら話が聞けるのにな。がんばれ！

わけもなく仲間になってあげたい気持ちになった時。

「レン……レン！　どこにいるのよ、出ていらっしゃい！　卑怯者のろくでなし！」

……若い女性の声が、大声で巧猿の名を呼びながらやってくるのが聞こえた。巧猿がそれを聞いて、異様なくらいギクリとした。

――まずい！　あ……あの声はッ……。

きれいな声は、あまり優しくない言葉で巧猿を探しながら、どんどんこちらに近づいてくる気配である。

美人のメイドが――あとでわかるが、巧猿の屋敷のメイド嬢はみなメチャメチャ愛らしいのだ――とめるのをふりきって、部屋のドアがバンと開いた。

とび色の髪と瞳の娘が、息をきらせて入ってきた。

「いたのね、レン……巧猿ッ！」

年ごろは17か18歳。黒のシンプルなヒールと、何かの制服にも見える濃紺のつめ襟のスーツを着ていた。とても美人だったのだが、涼の目にはそれよりもまず、この娘はすごく怒っているな……というのがいちばんの印象だった。

――怒りのあまり、とっさに涼の姿も目に入らなかったようすだ。

巧猿がロケットのように飛びだして、娘の腕をとっていったん部屋からだそうとした。この二人は2年ぶりの再会なのだが、懐かしい・うれしいというムードはかけらもない。

隣からでも、怒った声が聞こえてくる……。

「レン・巧猿、この悪党！　汚い手で触らないでちょうだいッ……知らないとでも思っているの!?　ナリタ署からとっくに連絡がきてるんですからね！　こともあろうに誘拐の……巧猿、あなたむこうでさらってきたんですって？　16歳の……男の子をッ!?」

――この少女の名前は、アリエナ・ライル。

レン・巧猿とはいとこ同士にあたる。

五星家（ファイブ・スターズ）の一家の当主で、香港警察および香港海上警察の署長だった。

自治区・香港の奇妙な慣習によれば、千人会議や重要な役職はしばしば世襲制によることが多い……アリエナ・ライルの家も代々続いた警察署長の家柄で、2年前、父親が死んだ時点で彼女がライル署長を継いでいた。美人だが男まさりという評判で、面汚しのいとこに怒り心頭といった風情だ。

「恥知らずのケダモノ！　よくも私の顔にまで泥をぬって……一度でもまともなことができないの？」

――ここで仰天したのは、レン・巧猿の異常な反応である。

なにしろ彼はアリエナの顔を見るなり、狂ったように笑いだしたのだ。どうなるのかハラ

ハラしていた涼が、思わずベッドで飛びあがったほどだった。
「アーッハッハ、これはこれはいとこ殿、あいかわらずお美しい!!」
「黙りなさい、この悪党ッ!」
アリエナは体当たりで、巧猿が邪魔する隣の部屋にもう一度行こうとしていた。
「……2年のうちに、またいっそう女っぽくなったよ!!」
「うるさい! そこをおどきなさいッ……」
巧猿はとりあえず彼女をその部屋に入れたくない。少女は是が非でも入ろうとする。本来なら男である巧猿の力にかなうわけがないのだが、少女は必死であり、巧猿はずっとゲラゲラ笑い続けている。
ついにアリエナは巧猿をつきとばして、ドアをこじあけた。一歩、入るなり信じられない思いで目が点になる……明るい部屋には、ベッドが2台あるのだ。
漆黒の目を皿のようにしている涼と、傷のためにまだ眠っている幽霊船の少年。
「あ……悪魔! あと一人はどこからさらってきたのよ!?」
長いまつげをとじて、そのまま床にくずれ落ちた……涼と巧猿があわてて駆け寄る。

涼のベッドにアリエナを寝かせると、レン・巧猿は駆け出してグラスに水をくんできた。
「大丈夫みたいですよ、すぐ気がつきますよ」



拍動も規則正しいし、身体も温かい。巧猿はそれを聞いて大きく息をついた。

「よかった、アリエナ」

……その声を聞いて、比較的鈍感な涼もオヤと首をひねった。さっきからの巧猿の異常な振る舞いは、もしかしたら……。

——ひょっとして巧猿……この女性を愛しているのだろうか⁉

巧猿は、彼らしくなく肩を落とした。

「うん、そのとおりなんだ」

鑑賞用としてなら、男女・年齢みさかいなしのレン・巧猿であるが、愛の対象となりうるのは——どうしたわけか——あとにも先にも二つ年下の、このいとこだけだった。

アリエナの前にでると、思わず異様な振る舞いしかできなくなるのは彼の昔からのクセである。いつもアリエナを脳天まで怒らせて帰す。

「2年も離れていたから、絶対おさまったと賭けていたんだが……」

——情けない……我ながら情けない気持ちだ！

そもそも2年前、彼が香港をでたのもアリエナがきっかけである。2年前……香港警察の署長だったアリエナの父が死んだ時、

「穏やかないい死にかただったけど、跡継ぎのアリエナは女で、おまけにまだ16歳だった」

世襲とはいえ、警察をたばねていく力があるのかと危ぶむ声も高かった。

もしも、この時にアリエナを署長から外すとしたら……。いちばん近い相続の適任はといえば、いとこのレン・巧猿以外になかった。

「僕もまだ18歳で、万が一後見人がついてしまえば相続争いをやらされたかもしれなかった」

勝ち気なアリエナが、幼いころから父の跡継ぎになりたがっていたことを知っていた巧猿は、そくざにクルーザーに乗り、香港を離れたのである。

型どおりにアリエナが署長に就任したと聞くと、寄港先から葉書をだしたのだが、アリエナからは『外道！』の電文が返ってきたのみだった。

「いったい、なんて書いたんですか？」

「ドラセナ諸島は〝天国の島〟と呼ばれていて、渚も海もじつにきれいなんだ……そこの風景と、この島で君に会いたいって書いてね」

「……どこが外道なんだろう？」

付け加えておけば、ドラセナの美しい娘たちは渚ではまったく服を着ない。アリエナは葉書をズタズタに切って、燃やしてしまった。

涼は深いタメ息をついた。

――それじゃ、あたりまえだよね……。

巧猿も冷静になると、そう思うのだが……とにかく、いま考えなければならないことは、

それではない。

「巧猿、どうするつもりですか？　僕のことを彼女になんと説明しましょう？」

ネオ・ナリタから手配書がすでにまわっていたとは知らなかった。〝旧市街より16歳の少年を誘拐〟

間違いではないが、涼としては巧猿がこれ以上アリエナに嫌われるのも、いまでは可哀相に思う。巧猿も空中に目をすえて考えぬいているようすだ。

――そうなんだよ、いとこ殿は絶対怒るとなぜ先に気づかなかったのだろう？

いつもいつも、なぜかこうなる……背中にカエルを入れればアリエナは喜ぶだろうと考えた（なぜだ！）遠い昔が思い出された。

……結局、涼は香港で生き別れの兄さんをさがしていることになった。

「風の便りに香港にいるとのウワサを聞いて、巧猿氏の船に思わず乗ってきてしまったんです。ネオ・ナリタの友達はそれを知らなかったので、誤解してしまいました……」

――おお僕、よくこんなウソをつくよね？

我ながら感心するくらいに、本当らしい口ぶりで言えた。巧猿はうしろでおがんでいる。天使のように澄んだ目の威力で、いったんは納得する気になってくれた。

「そう……では、これは不起訴でいいのね？　でも、こっちの子は⁉」

眠っているほうの少年を指さして、きつい目をする。

レン・巧猿がはじめてまともな口調にもどれた。
「そのことは……まず、いとこ殿、彼の顔をよく見てくれないかな？」
あらためてみつめるアリエナの表情が変わった。
「まあ、彼は……新界総督の息子だわ!?」
「やはりそうだったのか！」
――すると彼の名は、ミハイル・几城だ。
香港では名家の子供は誘拐をおそれて、14歳くらいまであまり外には出さない……本島と新界は多少離れているせいもあって、レン・巧猿も大きな行事のときに数回、遠くから見かけただけだったので、あやふやだった。
――新界総督は、香港の二つに分かれた片方。すなわち新界の海域に全権を持つ重要な役目である。やはり世襲によって継がれていた。
巧猿は、枕もとの包みをほどいてクリスタルの光を見せた。
「そうすると、これは新界のクリスタルということになるんだな？」
昨夜、これだけを抱いて海に飛びこむところを、かろうじてアリエナ号が受けとめたのだ。聞かされたアリエナのまなざしがみるみる曇っていった。
巧猿はそちらを見ないようにしながら、
「……いとこ殿、新界ではいま何が起きているのかな？　〝幽霊船〟について、警察はどの

くらいわかっているのか？」

「〝幽霊船〟がでていることは知っているわ」

低い声で言って、くちびるをかんだ。

去年から今年にかけて香港近海に出没し、黒い船で次々と香港の船を襲った。

かならず嵐の夜にだけあらわれる恐ろしいその船を、誰ともなく〝幽霊船〟と呼ぶようになったのだ。

「ぜんぶ話してくれないか」

「はじめからふつうの海賊とは思えない奇妙な船だったわ。商船を襲撃して貨物を奪い……襲われた船の乗員は、いつも皆殺しで発見されたの」

けれども、高価な積み荷が手付かずで残されている場合もしばしばあった。警察はそれでかなり混乱した。

香港・暗黒街には〝ギルド〟と呼ばれる組織もないではないのだが、海賊ギルドは始めから幽霊船とは無関係だと明言していた。

「生存者がほとんどいないから、警察も手口がなかなかつかめなかった」

ギルドに対する恨み……復讐という考えかたも始めはあった。通常の海賊行為にしては、あまりにも残虐すぎたのだ。

——海賊か？　報復行為か？

香港警察は決して無能ではない。ただ幽霊船にかかわる捜査は、あやしいほどに邪魔が入った。

「新界にいるこちらの情報屋が、次々に一人残らず殺されたり……」

巧猿は眉をつりあげた。古参の情報屋というものは、カメレオンの顔とハイエナの耳をしているもので、正体を知られることは滅多にない……しかも次々になど！

非常に有能な警部の一人が、たしかに何か情報をつかんで生還してきて……署にたどりついたとたんに、発狂して話をすることもできなくなった。

——時には襲撃現場から数人ほどつれさられた形跡がみつかることもあった。それは例外なく若い乗員で、何日かあとにちぎれた遺体となって本島の波打ち際にうちよせられる……。

海賊にかこつけて大量の犠牲を集めていたのだとわかった時には、もう遅かった。

「それがわかった時には、術は完成してしまっていたわ！」

「だってそんなバカなことが⁉」

——香港において、呪術は現実のものである。

恋する娘たちは占い師の助言を聞きにいく。新界の男たちは、航海の安全を護る呪符をかならず身につけて海に出る。本島の商人ならば一度や二度は、家運繁栄の祈禱師の扉をくぐったこともあるはずだった。

呪術士になる者――魔力の素質ある者――は、常に新界から生まれたものだが、新界の魔術にはほかにも独自の法則があった。

――占いにせよ、まじないにせよ、基本的に術は白い性質のものにかぎられていたのだ。香港の地は昔から――何か大きな力の域にあって――並の術士でも、かなり大きな技が使える場所だった。

ただし、人を害する黒い術にはその力が妨げになるらしい。

呪殺、魔物寄せ、死人返しなどは……たとえば黒に属するのだ。

よほどの能力のある術士が、生命とひきかえでもなければ、新界で黒い術は不可能と言われていたはずだったが……。

「それでも幽霊船には、誰か途方もなく強い術士がついていたらしいのよ……」

青ざめたくちびるを噛んでアリエナがつぶやいた。

「それは幽霊船を手足にして生け贄を集めると、我々がまだ知らなかった呪術を完成させたわ。あの黒い炎……警察の精鋭でも歯がたたないわッ！」

巧猿と涼は顔を見合わせた。

黒い炎。それは昨夜、嵐のなかを襲ってきた船が使っていた技だ。

あの嵐のなかでも消えず、幽霊船の化け物じみた乗組員たちをつつみ……まともな人間は、その火が触れるだけで耐えられぬほどの激痛にみまわれた。

「黒い炎……僕の船は昨夜、その船に遭っている」
「……本当に!?」
巧猿がうなずいた。
彼らは笑いながら亡者のような手で、からみついてきた……それだけでアリエナ号の手だれたちが全滅させられるところだった。
呪術になれた香港の警察でさえ、ここまで恐ろしい技の存在は予想したことさえもない。
――このような呪われた術を支えうるのは、信じられないほど強い術士で、すべてが黒に染まっている者だという話だった。
「それでもまだたいへんな人数の血を、生け贄に捧げる必要があったはずだと言っているわ」
――それがつまり、幽霊船の役目だったわけか……。
「アリエナ……だが、そんなに強い術士が、新界のどこにいたのだろうか?」
わからない……アリエナはくやしそうに首をふった。新界において、呪術というのは日常のことだったが、
「でも新界全体にも百人とはいないのよ……しかもほとんどが無害な占い師だわ!」
レン・巧猿も、それをよく知っていたからこそ不思議に思っている。
――幽霊船のように強い力を使える者が、どこに隠れていられるのだろう!?

巧猿は、かすかに眉をよせて古い記憶をたぐっている様子だった。
「幽霊船……は、かなり前の記録にも一度載っていたんじゃなかったか？」
子供時代にアリエナの父の書斎で、勝手に過去の書類を散らかしていた時に、そんな記載を見たように思う。彼女もうなずいた。
「ええ、32年前よ。ちょうど元宵節の年……やはり香港近海にあらわれて、通過する船を襲い続けているわ」
だが、その時の船は本当に海賊行為だけが目当てだった。しかも事件簿はとっくに終着済みとなっていたはずだ。
「首謀者は新界の術者で、女……だったわ。一味も捕まって、生き残りはないはずよ」
たとえ残党がわずかに残っていたとしても、魔力をふるう術士がいないかぎり、幽霊船が蘇ることはできない。記録によれば、イリヤという名のその魔女は死罪になり、血族もいないのは確かだった。
「そう……間違いないな」
アリエナ・ライルの父の記録を、巧猿は信用していた。あの記録が〝ない〟といったら、血縁は本当にないのだ。
――それでも、再びあらわれた幽霊船は、どこか過去の黒い船に似ているように思えた。
香港警察は全力をあげて、幽霊船と術者の正体をつきとめようとしていたが、いまだ手掛

かりさえもつかめていない。くやしい。だが、アリエナは何度となく、自分にも部下たちにも言いきかせたものだ。

「幽霊船といえども、あれだけの被害をだして、いつまでも正体を隠しおおせるものじゃないはずよ。船は一人では動かせないし……いつかきっと何かの足跡が残るはず。ええ、たとえ悪魔が味方している船でも、香港警察は捕らえてみせるわ！」

だが、事態は思いもよらない動きを呼びはじめていた。

香港では魔女狩りの動きがおこりつつある……証拠のある、なしにかかわらず、呪術士は全員狩りあつめて厳しく追及せよと。

新界の魔術士は、身体にあるパターンがでるので、逃れようはないのだ。

「ひどいな、いったい誰がそんな……いや、言わなくてもいい。首謀者はたぶん韻長官だね？」

アリエナは、ただ一度うなずいた。

――問題は本島の韻長官である。

香港で名家の頂点にたつのは、五星家といわれる五つの家柄である。世襲の役がある家とない家とがあるが、いずれも同じ時期にはじまる古い家柄で、各家に一つずつのクリスタルを伝えている。すなわち、

レン・巧猿の家。

アリエナの継いだライル家。
新界総督を務める几城の姓。
最大の富豪、ハイシャ・B。
現在、本島の長官である韻大人。
——韻大人は、その若いころからどういうわけか香港・新界を……特にその呪術の気風を病的なくらい憎んでいた。
「次の千人会議では、まちがいなくその話がされるわ……」
低い声音で言って、アリエナが顔をそむけた。
「韻大人なら千人会議でもかなりの支持を持っているな」
「ええ、そうなの。そしてこんどの会議の日までに幽霊船が捕らえられなければ、彼はその席で、新界全体の強制捜査を持ち出すつもりだと言ってるわ」
自治区・香港の最高決定権は、つねに有力市民会が持っている（通称・千人会議）。年に一度、開かれる大会議では、香港の重要な問題が決められるしくみだった。
今年は、もうすぐ……元宵節の直前に行われる予定である。
——韻大人は、その席で新界の強制捜査を言いだすはずである。
それはすでに、香港警察の手によるものではない。
韻長官はすでにアリエナに何度も、もっと苛酷な手段を使って捜査しろと要求し続けてい

た。アリエナが法を破らず、韻長官の圧力にも屈しないとわかると、彼は自分自身の手による私設部隊を集めはじめた。それはセントラル・ボード（傭兵仲介所）のもっともタチの悪い傭兵たちが過半数を占めていて、

――雇い主の注文ならば、どんな卑劣な作戦でもするという奴らなのだ。

彼らなら、罪のない術士を拷問で責め殺すことも平気でするだろう。

「ほとんどの議員は、長官が実際に何を望んでいるのかを知らないのよ！」

韻大人の私設部隊の筆頭リストを入手して、アリエナもはじめてゾッとしたのだ。傭兵とは名ばかりの略奪、殺人の常習者がならんでいた。

しかし、千人会議の市民たちに疑惑を伝えるのはきわめて困難だった。なぞの幽霊船はあざけるように、海上を行く船を襲う……。

――新界総督ウィリアム・几城も、本島の横暴に強く抗議していた。

長官の〝私設部隊〟はすでに新界を〝パトロール〟してまわっている。それはかなりの部分、威嚇、恐喝をふくんでいた。

韻長官はそれを知っていて野放しにしているふしがある。見かねた有力市民からの抗議があっても、彼には切り札があるのだ。

「いま香港は元宵節をひかえているでしょう？　韻長官は、幽霊船がその海を襲ってくるかも知れないと言うのよ」

巧猿がやや表情を変え……うなずいた。元宵節は海上の夜の祭りだ。豊かに飾った船があふれるように海にでていく。〝そうだ。もしも、その海が魔船の襲撃にあったら……！〟

その一言がすばらしい説得力を持つことは、容易に想像がついた。

「千人会議も、このままでは長官の思いどおりになるかも知れない……」

警察署長としてのアリエナが恐れるのは、新界一般にたぎりつつある危険な怒りである。

〝いわれもない暴力が近づいてくるのに、誰もおれたちを助けてはくれないのか⁉〟

「こんなことが続けば、暴動も起こりかねないというのに、韻大人にはわからないなんて！」

レン・巧猿には、その先まで見えていた。

――それでは韻長官の望みは、新界の術士ばかりでないということだ……暴動が起きたらその事件を踏み台にして、さらに強い弾圧にもつなげられるとわかっているんだな。

〝新界そのものを焼き尽くすのが、彼の望みなのだろうか⁉〟

新界総督にとって、長官の手をひかせる方法はただ一つ。

千人会議の日までに、幽霊船を退治することである。

「2日前に几城氏から連絡があって、情報を入手したから自分自身で部下をつれて、幽霊船の寄港地に乗り込むつもりだと言ってきたわ」

「彼は、それをどこだと言った⁉」

「言わなかったわ、なにも……」

本島には知らせず、警察署長のアリエナにも実際の場所までは伝えなかった……すでに事態は、そこまで悪化しているのだ。

そして昨夜。総督のただ一人の相続人が、嵐の中を幽霊船に追われて殺されかけていた。

――すると総督自身もたぶん……。

巧猿の目にもようやく、香港全体をおおう黒い翼の影が見えはじめていた。

「元宵節のくる年に……こんなことがあっていいのだろうか」

巧猿の言葉を聞いて、アリエナがかすかにうなずく。彼女も同じ香港の娘だったからだ。

――元宵節の海に血を流すのは、香港人には身を切られるように思えるはずだ。

だが千人会議の席で長官の要求が通れば、新界は容赦なく荒らされ、本島からも大きな犠牲をはらうことになる。なぜなら一度、タガが外れたら最後、これまで本島と新界を支えてきた微妙なバランスなど消し飛んでしまうはずだからだった。

そして……顔をそむけたままのアリエナの声が、ふるえていた。

「警察も、長いあいだ韻長官から魔女狩りに協力するよう要請をうけてきたの。断りつづけてきたけれど、もし次の千人会議で決定されれば、もう従わないことはできないわ……」

――香港警察に勝っていた新界総督の兵力がやられた以上、千人会議の日までに幽霊船を捕らえることは、もう絶望的になってきた。

「幽霊船……幽霊船さえ捕まえられたらッ……」

青ざめてくちびるをかむ横顔のむこうに、子供のころの泣き顔が透けてみえた。

――アリエナは、その若さでありながら2年のあいだ、じゅうぶんに大任を果たしてきたのだ。

だが、この強敵と韻長官の同時の試練はきつすぎる……レン・巧猿はこぶしを握った。新界と本島の治安のあいだで、板挟みになって動けないのだ……巧猿はその時、生涯でいちばん強い誓いを心にたてていた。どんなことをしても、この事態を無傷で導かなければならない。

――つらかっただろう、アリエナ。でも、もう心配などさせないからね！

……言いたい言葉が山のようにあって喉につかえていた。

〝アリエナ、もう大丈夫だよ。僕がきたから！〟

〝僕にまかせてくれ！　君の力になりたいんだ！〟

その時、美しいいとこがうるんだ瞳をあげ、ためらいがちな声音でたずねてきた。

幼なじみに。

「レン、どうすればいいのかしら……？」

「その脚……、もっと大胆に見せたらどう？」

〝下品なケダモノ!!〟と叫んでアリエナは巧猿の顔を平手ではりとばした。

顔面がゆがむほどのパンチをうけて、ふたたび巧猿がバカ笑いをはじめてしまう……とめようとして涼が口を開いた時に、新界の少年がはじめて目を開けて起きあがった。

――新界総督の一子、ミハイル・几城。

彼は16歳で、総督リチャード・几城の唯一の息子である。香港相続の形式上、新界副総督の地位にあった。

ずっと閉じられていた目が開くと、瞳は猫のような緑色をしていた。

つやのある赤毛が、なかなかよく似合う少年だ……巧猿が素早く評価している。

意識がもどると同時に、彼は起きあがって周囲を見回した。クリスタルをすばやく引き寄せ、かたく抱きしめて守る。

「……ここはどこだ？」

アリエナがまず自分の名を名乗った。

「ここは本島で、私は香港警察署長のアリエナ・ライルです」

「……あなたは新界総督のご子息、ミハイル・几城ですね？」

「僕は……僕はわからない……」

一瞬、彼の翡翠色の瞳が焦点を失ったように揺れるのがわかった。まわりの三人は顔を見合わせた。アリエナが困惑した手を口もとにあて、

「ミハイル。昨夜、あなたは新界の海域で幽霊船から救助されて……」

そこまで言いかけてアリエナは、ハッと息をのんだ。〝幽霊船〟という単語を聞いた瞬間、少年は蘇った恐怖感にガタガタとふるえだしていた。

「父上……父上、逃げてッ……逃げてッッ！」

うつろな瞳は正面の幻を見ている。まっさきに巧猿がアリエナに叫んだ。

「アリエナ、漢航海士を呼ぶんだ！　漢には救急医療の心得があるからッ……」

何かと格闘するように暴れる少年に、涼が飛びついて落ち着かせようとした。殴られても、殴られても、この子にケガをさせないことしか考えない。

ミハイル・几城が殴ろうとしている相手は、本当は涼ではないようだった。

「この裏切り者！　悪魔の犬だったんだな⁉」

巧猿の顔色が変わった。すばやく声をおさえて、少年の耳もとで、

「……誰が裏切り者だった？」

「高チュアン……よくも部隊を……父上をッ！」

新界総督はニセの情報をあたえられて、魔船の罠に落ちたはずなのだ。

この状況で……アリエナの助力さえも信じきれなかった新界の部隊を落とすならば、よほど内部にイヌがいなければならないのだ。

「高チュアン！　高チュアン、殺してやる‼」

――新界を裏切ったのは、高チュアンという総督直下の将校だった。
昨夜、新界総督の手勢の中にミハイルの名前は本当はなかった。半人前扱いされた少年が腹だちをおさえかねて、勝手に武器庫に潜んで同行したのだ。
ある意味でそれが幸運だった。
「罠だったんだ、誰も気づかなかった……最後に父が武器庫で僕を発見して、その場でクリスタルを渡して、どんなことをしても逃げろと言った……」
そこに高チュアンがきて、笑いながら几城氏をライフルで撃ったのだ。
信頼されていた若い部下で、わずかの間にめざましい昇進をしていたものを……。
「……父上、逃げてください!!」
新界の船は零時すぎには波間に沈んでいってしまった。
巧猿らの船がキャッチしたのは、沈みつつある総督の船のものだったらしい……。
ミハイルは幽霊船に移される際に逃げだし、甲板まで脱出した。
――あとは、巧猿たちの見たとおりである。
アリエナとともに駆けつけてきた漢航海士が、すばやくミハイルを診て顔色を変えた。
「やばい……レン船長、すぐに本職の医者がいります。ほら、ひどい熱ですぜ!」
本当に、悪寒でふるえ続けるミハイルは、額が燃えるように熱かった。
傷からの熱ではないかもしれない。漢は以前にこういう熱を見たことがあった。

「船長、ひょっとすると魔にあたったのかもしれません。恐ろしく強い邪気に間近でさらされると、こんなぐあいにあとで苦しみだすことが……」

……巧猿が医師を呼ぶあいだ、漢航海士は彼に鎮静剤を与えた。

そのあいだも少年はクリスタルを一瞬も胸から放さなかった。苦痛と熱であえぎながら、血がにじむほど強く抱きしめている。

放させましょうか、と訊く漢航海士に、巧猿は首をふった。五星家のクリスタルは、力では決して壊れない。

目をつむったミハイルはうわごとを言い続けている。

「はい父上、渡しません……絶対に放しません！　だからどうかどうかご無事で……」

「……彼はしばらくこの屋敷でかくまったほうがいいかな」

「そうね、レン。お願いするわ」

――幽霊船は新界の兵力とともに、几城氏のクリスタルも狙っていたらしい。

熱がひくまでは、絶対に安静でいなければと医者も断言した。

「新界にはそれから連絡したほうがいいだろうよ」

アリエナはもうオフィスにもどらなくてはならない時だった。

去り際に、彼女はとても長くためらってから、口をひらいた。

「レン……あなた、帰ってきてこれからどうするの？　幽霊船やなにか……考えていることがあるの？」

二つ年上のいとこの性格は、なんとなくわかる時もあった。巧猿はこんな時、屋敷に閉じこもっている青年ではない。〝レン、返事をして〟

巧猿がアリエナになんと返事をしたか……見てはいなかったが、涼はまたしても痛烈な平手打ちの音を聞いた。

巧猿の臨時代理で、涼がアリエナを表玄関まで送っていく……といって、アリエナのあとをついていくだけしかできないのだが、レディへの礼儀であるらしい。

別れる時に、アリエナは巧猿への伝言をたのんでいった。

「レンに伝えてね。あの……気をつけてって」

それからすぐに巧猿は涼をつれて外出した。行く先は、本島のポート（港）だ。

昨夜の嵐がウソのような晴れた空だ……鏡のような海から、潮風が吹いてくる。

「ここでおりるんだよ」

言われたとおりに車からでると、巨大な船が次々に発着しているメイン・ポートだ。

涼はクルリとふりかえって巧猿の顔をまっすぐにみつめた。

「僕をネオ・ナリタに帰してくれるのですか？」

巧猿は左胸のポケットから、薄い金色のカードをとりだした。
「ネオ・ナリタまでの1等船客のパスだよ」
同時に、巧猿自身のサインが済んだ高額小切手も用意していた。せめてもの気持ちだ、と彼は言った。
「……僕を帰しちゃっていいのですか？」
巧猿は軽く肩をすくめた。アリエナは帰る前に〝気をつけて〟と言った。
これから巧猿は幽霊船を追うつもりだ。
正体の知れない黒い船を捜し、韻長官よりもはやく妖術士を暗闇から引きずりだすのだ。まともなら手をだすはずのない魔界行だ。
――幽霊船はあきらかに妖魔を使う！　あの黒い炎は僕がいなければ、どうにもならないのじゃないのか？
巧猿は何も言わずに涼に切符をわたし、ネオ・ナリタに向かう白い船を指さした。涼がその手で金のカードを破り捨てると、抑えかねるような笑顔になった。
「僕らは友達じゃなかったんですか？」
「涼、最高だ！　元宵節までに二人で幽霊船をかたづけて、君にこの4倍のボーナスを支払うと約束するよッ！」
「よければ6倍にして」

するとも！　巧猿は即座に確約して、涼をかかえて踊りまくった。そしてシミジミと思うのは……この子は相場を知らない。

――この彼ほどの妖力に値段をつけるとしたら、相場で100倍……いや、せりなら、いまは200は軽くいくぞ！

香港仔なので、教えるつもりはない。巧猿はすぐさまべつの船に乗る切符を買って――力いっぱい2枚買って――陽気に笑いながら、涼に手渡した。

「そうと決まれば行く先は新界だ！」

新界は香港の三日月形の島の下半分で、ボートで15分くらいのところにある。面積は本島の3分の2ほどの島だが、本島にまけない華やいだ街ができていた。

――表通りはさすがにまだ変わりなくにぎわっている。

金細工など高価な品々を扱う店は極彩色の店構えで、かならず街路から少し上に入り口があり、磨きこんだ階段をのぼって初めて店に入れるしくみだ。

華やかな飾りが、行き交う人々の少し上から、上手に羨望をかきたてている。

路上には、少し手軽な店や屋台がズラリと並んでいて、蝶々のようにきれいな香港仔たちがにぎやかに取引をしている。涼はウサギに賭けをするゲームがしてみたかった。

皇麟街と呼ばれる、メインストリートの一角に巧猿は尋ねる人がいると言った。

『骨董・道具屋』の看板のかかった半地下の汚い店だ。奇妙な灯明の光が、奥のほうでチラチラしている。

……ここの主は新界でも有名な占い師で、街の生き字引でもあった。

「彼に会って、前回の幽霊船の事件について訊ねてみたいんだ。同じものでないのは確かだが、手口がとても似ているから、かかわりがあるかもしれないだろう？」

巧猿とは昔からの知り合いで、香港を発つ時に恋占いのカードをくれたのも彼だったのだ。

「長いつきあいで、名前はキュロスというのさ。さもしい根性曲がりで、意地悪くて、盗癖があるんだけど、かろうじて悪人ではないからね！」

涼が思わず眉をしかめた。

「キュロス（＝犬）？」

「そう、会えばわかるよ」

——なんだか嫌だなあ……。

いやな予感は的中した。薄暗い入り口に一歩、足をふみいれたとたん！　蜘蛛の糸のような無数の銀糸が、涼の全身にからみついてきたのだ。

ふれると電気にあったような不快なショックがある。

「なに、これ!?　巧猿!!」

言葉にならない気味の悪い感触に、思わず夢中になってもがいた。何かわからないが厭で厭でしようがない。

懸命にふりはらうと、ようやく腕や足から腐ったように変色して落ちてくれた。

灯明の奥からあらわれた老人が、それを見て顔色を変える。

「誰じゃ!?　わしの縛妖陣を破りおったのは……わしを殺しに来たのかッ!?」

目をあげた瞬間、涼の首筋の毛が恐怖でさかだった。

こんな奇怪な顔は夢にだって見たことがない……しわだらけの顔に一面に黒の斑点が浮かんでいる。落ち窪んだ目、針金のような髪。

目を爛々と光らせて、大声で怒鳴りまくりながらせまってくるのだ。死に物狂いであとずさる涼は、あとからきた巧猿とぶつかった。

「どうした、涼?」

「お……お化けッ」

老人はその姿を見て、ふりあげた腕をハタととめた。

「レン・巧猿……かえってきたのか!」

——この老人が店の主キュロスであった。

「2年ぶりだね、ご老体……なかなか元気そうじゃないか!」

老人はこんどは巧猿にむかって、怒鳴りつけた。

「わしを〝お化け〟なぞという、この化け物はなんだ!?　戸口の縛妖陣は妖魔しか、かからんものじゃ……おまけにそれをいとも簡単に引きちぎるとは!?」

威嚇されて巧猿にしがみついている小柄な少年を、老人はジロジロみつめた。

どうみてもおとなしそうなふつうの子供で、外見に魔物らしさはまったくない……それなのに、妖気だけは老人がこれまでにあったこともないほど強烈に感じられるのだ。

老人はひそかに胸の中でうめいた。

――妖魔じゃな……なりたてのホヤホヤじゃ。これほどの力を持ちながら、結界の張りかた一つろくに知らんとは……。

驚きが静まると、老人は数回うなずいた。巧猿が口をひらくより早く、手をあげて言った。

「あいもかわらず火遊びが好きな奴だな、巧猿、お前自分のつれてきたのが何かわかっているのか!?　こいつはどうやら、ネオ・ナリタのアルディーンじゃないかッ！」

上着にしがみついていた少年が、漆黒の瞳をあげてキュロスを見た。

……風もない店のなかで、すべての灯明が突然またたいてユラリと揺れる。

――アルディーンという妖力の名が、キュロスにはなぜわかったのだろうか？

巧猿の問いに、老人はフフンと笑った。

「わしとて、術士のはしくれよ。目をふさがれてもこの妖気はわかる。ネオ・ナリタの妖力



が誰かに支配されたと、ウワサに聞いたばかりだったしな」

それがまだ年若い少年であったという噂も。

――だが、このような澄んだまなざしをもつ者だとは予想外だった！

街一つ、簡単に破滅させられるほどの力を持ちながら、生まれたばかりのような瞳をしていて、何も知らない子供のようだ。

「そう……本当にまだ何も知らんのだろうが？」

涼はためらわずにうなずいた。闇の皇子と呼ばれはしても、自分に憑いた力が何か……知っていることは、ごくわずかだった。

キュロスが話してくれた。

「呪術師はみな術を使うために、パワーを求めなければならない……それは人間には、もともとはないものなのだ」

力を持っているのは、常に名もなき地霊であり水霊であり、術士はその本性を解いて時には名前を与え、儀式や鍵によってその力を引きだし……あやつる。

「多くの場合、それは邪悪なもので生け贄を欲しがる。ネオ・ナリタの妖力も、かつてはそうだった」

邪教の七賢人は、地霊とのあいだに血の契約を結んだ。すなわち〝我ラハ、オ前ニアフレルホドノ血ノ犠牲ヲヤロウ……オ前ハ、我ラノ術ニ力ヲ与エロ！〟

力はアルディーンと名付けられ、邪悪な技を次々と現世のものとした。
「時には……呪術士が滅びたあとでも妖力だけが残ることがある。いちばん、やっかいなものさ！　ネオ・ナリタの力とても、教えられた犠牲の味を忘れるわけがない。何度も復活しては若者に憑き、生け贄を自分で求めたのじゃ」
　ネオ・ナリタの人々にとっては悪夢だが、それは元来その地で妖霊とかわされた契約でもあったのだ。
「アルディーンほどの妖力となると、封じてしまうことはチト難しい。いまの連邦世界にそれほどの術者はおらんじゃろう。できるのはただ、蘇ってくる年ごとに妖魔に犠牲をやり続けることのはずじゃったが……」
　そこで老人は、一心に聞く少年を盗み見た。
　――血の犠牲といっても、人ならどんな者でもいいというわけではない。
「はやい話、わしのような年寄りは妖魔のほうとて好まん。若く美しい者、清らかな者、強い者。エナジーがそのまま満ち溢れている者がよいのさ」
　ニヤニヤ笑いながら、かたわらの巧猿を指さした。
「この巧猿は若いし、生気にも溢れているが、おせじにも清らかとは言えない」
「ほっとけ！」
「美しく清らかな者は、たいていまだ強くはない……」

――しかし、もしもすべての条件を望むかぎりに身につけた者がいたとしたら？

キュロスも考えたことはなかったが、その時、妖力は性質を変えるかもしれない。

ネオ・ナリタの妖魔は、もとから宿主に憑く性質を持っていた。

とり憑かれた者は第一の犠牲者といえる。妖気に内側から引き裂かれ、生きながら妖魔とかさなり、殺戮を続けるのだ。けれども、

――この坊やは、とり憑いた時に妖力が認めるほどの宿主だったに違いない！

若く、澄みきって強い生気。魔物さえ、身体を出たくないと感じるほどの……。

妖力が宿主との共存を望んだのだ。みずから変化し、意識下で徐々に融合を続けた。死なさず、狂わせず、妖力の支配すら許す。

涼は首をふって信じなかった。

――僕より強い人はたくさんいる。美しい人ももちろん、能力を上回る相手もいくらだっているじゃないか？

なるほど、なにもかも、お前さんがいちばんとは言わないさ……キュロスがうなずいて肩をすくめた。

だが、闇の皇子の力はこの子を迷わずに選んでいる。妖力が求めるのは力や生気だけとは限らない、時には魔は純真さで飢えを満たすこともある。

――魔界の力にふれても、こんなに感じやすい澄んだ目をしている子よ。

血の匂いはしていても、きれいなものだ。
「妖魔に愛されているのだよ……お前さんは」
そう言ってから、彼にはめずらしく優しい手で涼の黒髪をなでてくれた。それから、とんでもないことをつぶやいたのだ。
「この妖気を吸えば、わしも若返るじゃろうなァ……」

……目の前にだされた怪しげなグラスの中身を、涼は断固として飲まなかった。
キュロスは飲め飲めとしきりに勧めるが、巧猿のグラスと中身が違うし、見るからに毒々しい紫なのだ。口をギュッと結んで、涼は首をふりつづける。
——気をつけよう！　ここでだされる飲み物には、何ひとつ僕は口をつけまい。ひとくち飲んだら、ハイそれまでよ……ってことに、なりかねないもの！
どうしても涼が飲まないとわかると、キュロスは下をむいて〝チェッ！〟と言った。
——巧猿が幽霊船について訊ねると、老人は急に不安げに、あたりを見回した。
「聞いてどうするね、巧猿？」
「アリエナが苦しんでいる」
それだけでもキュロスにはわかったようだ。巧猿のアリエナへの想いは、はるか昔からのものであった。

「わしがやった、カードはどうした？」
恋を占うならきっとあらわすという秘蔵のカードだ。巧猿が港を発つ日に餞別でやった。
「素人でも使えるはずじゃろう……あれで占って、どんな結果とでた？」
巧猿はいらいらと首をふった。自分とアリエナとのあいだを占えなどと、
「そんなことが怖くてできるか！」
いくじなしめが……キュロスは軽蔑を全開に見せて言った。
「頼むよ、キュロス。1度でもいいから、幽霊船の正体を占ってくれないか？　礼はする！　いくらでも望みどおりに払うからッ」
しかしながらキュロスは、首をふった。
「駄目だね……いや、そうではなくて誰にもできんのじゃよ」
「どうしてだ!?」
「お前さんのことだから、幽霊船の話はだいたい聞いているんじゃろう？」
実際に遭い、黒い炎のことまで知っていると聞いて、キュロスは少しうなった。
「それならわかるだろうが、あの船には誰か信じられんほど強い術士がついておる。邪悪な黒い呪術士……しかも、恐ろしい力だ」
幽霊船の正体を暴こうとした占い師は、すでに新界に何人もいたのだ。
「だが、どうやらあの船には強力な結界がはられているらしい……誰にも何も見えなかっ

た。逆に、手出しをした術士のほうが所在をつきとめられて殺されてしまったよ」
　韻長官が手をくだすまでもなく、新界の占い師はいずれ幽霊船にみな殺しにされるかもしれんと、老人はやけのように笑った。
「あれほどの力を持つ者がまだいたとはなァ……」
「キュロス、誰なんだろう？」
　キュロスは目を閉じて、首をかしげた。
「……わからない。32年前になら、一人だけ似た技を使う娘がいたが……」
　前の幽霊船事件か？　と聞くと、キュロスはうなずいた。
「たしかイリヤといったなあ、とても強い術者じゃった。さまざまな意味で特別なところがあった」
「特別、というと？」
　キュロスは巧猿のほうをむいたまま、チラリと横目で涼の姿を見た。一人は知っているが、一人はまだ知らないでいる。
　彼はひとくち茶を飲んでから、話しはじめた。
「香港で生まれた者なら、たいがい知っていることじゃが、呪術士になるためには失わなければならないものがある。つまり、外見じゃよ」
　巧猿はちいさくうなずいた。

「わしの顔をごらん、坊や……さっきずいぶんと驚いてくれたな？」

キュロスは言うと、意外な穏やかさで笑った。

「わしはもう若いころに、自分に呪術の素質があることを知った。しかし術士になるためには、絶えず魔の力にふれていなければならない。そうすると人というものは、姿がゆがんでくるものなのじゃよ」

――香港に呪術士が多いのは、ここがどこよりも力を使いやすい土地だからだという。もともと強いパワーの場にあって、弱い術士でも力を得やすいのだ。

それは新界で最強となる。

――香港呪術の大きな特徴は、クリスタルを媒体にすることである。

「ただの水晶ではなく、旧世界から伝えられたわずかな数だけが本物だ」

それは魔力を固定し、増幅する。

強力で邪悪な術でもないかぎり、血の犠牲をはらう必要もない。

香港の術士にとって、強い魔力をひきだせる貴重な宝なのだが、

「一つだけ、覚悟しておかねばならぬことがある。一度、クリスタルを使った者は身体に魔の斑がでる」

強烈なパワーを動かすことを、熱湯をあびるのにたとえる者もあった。

魔術士が百人いれば、九十九人までが奇怪な姿をしている。

「わしは悩んだが、結局まじない師の道を選んだ。若さと美しさを……巧猿、疑うんじゃないわい！　犠牲にしたんじゃ」

キュロス――犬の顔――という彼の通称は、ブチ犬のような魔斑からきたものである。

「だが、ほんのときたま……生まれついて強力な魔術士の素質を持つ者がいて、姿も美しいままでいられることがある」

イリヤという娘がそうだった。

「長い髪が白髪だっただけで、あとは新界のどの娘にもひけをとらなかった。力も図抜けていた……そして黒い術に手をだした」

もしも、今回の幽霊船に術者がいるとすれば、

――それはイリヤのように美しい者なのではなかろうか？

理由はなく、キュロスはそんなふうに思うことがあった。

涼がひどく恥ずかしくなったようすで、目に涙をためてキュロスをみつめている。キュロスはけっこういい気持ちだ。

「可愛い妖魔の坊や、なにも気にせんでもよいのさ。わしが……この年になって思うのは、強すぎる力はやはり危険だと言うことじゃよ」

人でありながら、魔に通じる力を身につけ……しかも何も失わないというのは、あるいは恐ろしいことなのかもしれない。

イリヤを見るがいい。あの魔女は美しかった。魔斑も二の腕に、薄いわずかな鱗のような形だけしかなかったという。

――イリヤのまわりには熱狂する者が絶えなかった。おぞましいほど忠実で、イリヤがそれを……と言えば、どんなむごい殺しでもやったそうではないか？

同じ呪術にたずさわる身であっても、人として身震いがでる。

クリスタルが代償を求めるのは、正しいことなのだろう。

「わしは、これでいいのじゃ。気楽なキュロスさまよ！」

ブチだらけの顔をほころばせて、老人はカラカラと笑った。巧猿が聞く。

「イリヤには子供か何か、いなかったのか？」

キュロスは首をふった。非常に高慢な娘で、並の者には目もくれなかった。

「幽霊船の残党は？」

「一人や二人はいたかもしれんが、それ以上ではないな。術士もおらんよ」

フム……巧猿がうなった。キュロスは言葉を続ける。

「イリヤの話が聞きたければ、まだ一つ残りがある。あの娘は五星家のクリスタルに興味を持っていた」

「クリスタルに？」

……クリスタルが旧世界より伝わる強い術具であるとは、周知の事実である。キュロスは

涼に彼自身の秘蔵のクリスタルを見せてくれた。
胡桃ほどの大きさで、やはり深奥に光がある。ただし輝きも、感じられる奇妙な生命感も巧猿の屋敷で見たのよりもずっと弱いような気がした。
「それはそうじゃ、五星家のクリスタルは最大で最高さ」
キュロスはまたカラカラと笑った。
「五星家はもともと呪術士の家柄じゃったからな。それも、とても強い……」
その子孫に、貴重なクリスタルが伝えられていたとしても不思議はない。
「ただふつうでないのは、五星家のクリスタルはどんな術にも使えないというところさ」
ただ、元宵節の海上で幻を見せるのみだ。
ただ、5個が一度に集まったその時だけ。
「過去に何度も術者が試したらしいが、それ以外にはまるで力を持たないらしい。あれほど大きな石で傷一つないのに、ありふれた目眩ましだけとは妙なことよ……」
どういうわけなのだろう？　キュロスは首をふった。
一つ考えられるのは、五星家のクリスタルは初めは強い術士の持ち物だった。
「なにか特別な封印がかかっているのかもしれん。我々などの知らぬ、旧世界の強い技でな」
「封印が解ければ？」

「知らん！　イリヤは探りだしたのかもわからないが……」

「さて巧猿……これからどうするつもりじゃね？」

新界にはもはや兵力など残っていないことを、巧猿はキュロスよりも早く知っていた。昨夜、零時。新界総督の精鋭部隊は、幽霊船の罠におちて、ことごとく全滅してしまっていた。もはや韻長官の手をふせぐすべも、幽霊船を捕らえるすべも新界には残っていない。巧猿にその話を聞かされたキュロスが、わずかに顔色を動かしたのは、ミハイル・几城のことだけだった。

「では几城総督は、もう望みなしかの……」

「わからない。ミハイル殿の熱はまだ数日さがらないらしいんだ。はっきりとくわしい話が聞けるのは、それからだよ……」

だが、ミハイルのうわごとからでも、巧猿は几城総督はすでにこの世にないと感じていた。キュロスはすこしだけ肩をおとし、静かにつぶやくように悼んだ。

「あれは立派な人物じゃったよ。勇敢で、公正な総督だった……あの人物が死んだ以上、新界の運命も8割がた〝凶〟ときまったかな」

「いいや、まだまだ、あきらめるわけにいくもんか！」

レン・巧猿は一つ、二つしたいことがある。

「韻長官のほうを封じるのさ……僕のやりかたでね」
どうせまともな手段ではあるまい。だがレンは香港の申し子のような男だ。
――香港仔を動かすなら、案外こ奴のやりたいようにやらせるのがよいわ。
ただ幽霊船のほうは、あまり手立てがない。
イリヤの話はどことなく気にかかるが、たったいま新界にあらわれている幽霊船の手掛かりにはならなかった。
「理由はわからないんだが、幽霊船の呪術士も五星家・凡城氏のクリスタルを追いかけていた」
動機がわからないから、新界総督のクリスタルだけを狙ったのかどうかは、はっきりしなかったが、
〝いずれにせよ、迎え撃つほうにはまだ確実な武器がない〟
――韻長官の傭兵どもにしたって、幽霊船相手には結局同じことではなかろうか？
「妖魔の坊やがついてくれる、こちらのほうがまだ有利なんだ」
涼が照れくさそうにニッコリしたが、キュロスは怖い顔で指をはじいた。
「いかん！　あの船の術士を甘くみるんじゃないぞ！」
そして厳しい表情で巧猿に念をおした。
「この……ぼうずは（と、涼を指さして）妖力だけは間違いなく強いが、一人では結界の

張りかた一つ知らない未熟者だ！　だがあの船の術士はあらゆる術にも長けている……正面から当たればひとたまりもない！　よい餌食にされるのがオチじゃ！」

〝昨夜、戦った相手にしても、術士自身ではなかったはずだろう？〟

涼は巧猿と顔を見合わせて、しかたなくうなずいた。〝……様、我々に力を！〟、あの男たちはそう叫んで黒い炎を身にまとっていたのだから……。

そらみろ！　とキュロスは口から茶をとばした。

「そいつらは術士の配下、使い魔にすぎん！　おそらく先頭に立っていたのが通じた奴だ。人の姿をして話したと言ったな？　それなら〝人鬼〟という使い魔……えらい代物だな」

そう言ってから、自分ですこし身震いをした。

キュロスの話によれば、人鬼というのは最凶の使い魔で、最悪の魔獣の一種だ。並大抵の呪力では、生みだせない魔物だそうだった。

「もとは人だったものだが、憎悪に魂まで売ると誓ってみずから術士にかかる時に、人鬼になりうる」

その魔力は魔術士に依存しているが、幻惑・魔物寄せなど多くの術を、それ自身使いこなすはずだ。キュロスはしみじみとタメ息をついて、

「使い魔だけでも、それほどの奴を従えているのだ。たとえ妖魔の子でも、術を知らず、素手であたればかなうものか……おう、そうじゃな。せめて仇魔刀があればなあ」

――仇魔刀？

「愚か者の巧猿め！　五星家の家宝の名まで忘れたのか!?」

クリスタルとは違って、それは五星家全体にかつて遺されていた、もう一つの術具だった。名のとおり、ひとふりの刀の姿をしていた……。

「伝説の降魔の剣よ。五星家の術士が使っていたとか……」

――巧猿がその名を知らなかったのにはわけがある。

クリスタルと違って仇魔刀は、五星家の全体の名前で管理していた。正確に言えば、それは香港当局にあずけられていたのだ。だが32年前に、何者かの手によって行方不明となっていた。

偶然にしてはあまりにも都合がよすぎる。

「ちょうど32年前じゃものな……おそらくイリヤの手の者のしわざだろうと思う。あのイリヤでさえ、仇魔刀は恐れたもの……自分の手で、どこかに処分してしまったのだろうよ」

高度に強力な術具――五星家のクリスタルのような――は、破壊することがきわめて難しい。術士自身の力が、術具をよほど上回っていない限りは無理なのだ。

「イリヤといえども、仇魔刀を壊してしまうことはできなかったに違いない。追っ手の手にないように、盗み出して隠すのがせいいっぱいだったはずだ」

しかしながら、その場所は32年たったいまでもわからないままだ。イリヤはよほど厳重

に隠したのだろう……なにしろ頭のよい娘だったのだ。

「もちろん幽霊船のおかげで、わしの占いもこの探索にはまるで役たたずなわけじゃよ！」

「やれやれ、キュロス。すっごく参考になった情報だよ！」

——こんど、そういった情報を思い出したら、紙に書いてゴミ箱に捨ててくれたまえ。

アリエナのひきいる香港警察は、魔船の末端の乗組員からおさえようと必死でいるらしいが、キュロスはそれも望みが薄いのではないかと言った。

「乗員はおそらく、ほとんどが死人返しで動かされている亡者じゃよ。先に襲われた船のなかから、つれさられた船員がいるというではないか？　可哀想じゃが、殺されてからも術士に操られているのだろう……」

しかしながらキュロスは、いま一つ……あることを思いついていた。

「巧猿、お前はバカ者だが教えておいてやろう。香港では黒い術を使うのは、本来生命と引きかえのことなのだ」

比較的才能のある呪術士が、血を流し、生命をひきかえにしてはじめてかなうか、かなわないか？

——それだけを考えても、幽霊船の術士の力は凄まじい。

「だが、その奴ですら黒は黒なのだ。黒の技を極めれば極めるほど、香港では存在しているだけで、たいへんな負荷がかかる定めになっておる」

〝苦痛をやわらげてくれるのは、生け贄の血だけなのじゃ……〟

そして、黒になりはじめたころから犠牲は必要なのだ。

「イリヤは……はじめのころ、取り巻きに殺させていたらしい。だがいまいる謎の術士は正体を隠しているだろう？　だから〝幽霊船〟が暴れはじめたあとはともかく、その前には奴はどうやって犠牲を調達していたのか……」

犬や鳥では追いつかない。それほどの悪を支えるためには。

「奴にはかなり前から生け贄が必要だったはずだ。それもたくさんな。どこで探す？　巧猿、おぬしならどうやって闇から闇へ隠す？」

巧猿は必死で答えをさがしている。キュロスは気味悪く笑った。

「さっきもわしが言ったであろうが？　生け贄はどちらかといえば数よりも質なのさ。上等で貴重な血をよりすぐってそそぐ、若さや生気にあふれた生き物からのう」

……涼はなんだかジリジリとあとずさりたくなる嫌な感じがする。

「生気や能力には個人差があって、見かけだけでは、なかなかわからぬものよ。したが美しさと若さなら、見ればすぐにもわかる。そして香港には、そういう素材を楽にさがせる市場もあろうが、なァ……巧猿？」

不気味なウインクで、巧猿がポンと手をたたいた。

「〝黄金の針〟！」

二人が手をとって踊り回るのを、涼が不安そうに見ている。

〝黄金の針〟は皇麟街のはずれにある高い建物だ。

尖端の鋭い形から、いつともなくそういうふうに呼ばれている。内部は迷宮のようにゴチャゴチャしたつくりで、大小さまざまなフロアにわかれていた。

――香港随一の歓楽街だ。

歌姫の美声を聞かせるだけの小屋から、もっとアブナイ好みの場所までそろっている。なかでも……数か所の秘密の劇場では、舞台に立つ者に値段がついている。

「いろいろとランクがある……らしいが（オホン！）、基本的に若くて美しくなければ話にならない」

しかも、買い手は身元をかくしているのが〝ふつう〟だ。巧猿が考えながらうなずく。

「2年・3年単位の契約を結ぶところもあるが、これはちょっと違う。ねらい目はやっぱり身体ごと売られていく場合だな！」

家族とも、親しい者とも音信不通になるのが当然のことだ。もしも……その夜のうちに幽霊船に乗せられたとしても、

「……誰にもわからないな」

巧猿はたくらみのある笑顔を見せた。

――幽霊船は襲った船から、いまでもときどき若い乗組員をつれ去っていくという。だ

がその数はそう多くないはずだ。
若くて、美しい生け贄がいまも欲しいとなれば、奴らは定期的に〝黄金の針〟にあらわれるのではあるまいか？　呪術師自身ではなくても、その使いが……。
「キュロス、いいことを聞かせてもらった！　幽霊船に爆弾を売りつけてやろう！」
キュロスが醜い歯を見せて、陽気にVサインをだす。
その時になって涼の背にようやく激しい悪寒が走った。
「巧猿ッ……まさか僕を売る気じゃあ!?」

・妖しい買い手がいない場合は、かならず巧猿が競りおとしてくれること。
・間違っても、悪ふざけはしないこと。
・涼の名誉のために、これをあとあとまで〝潜入捜査〟と呼ぶこと。
――これだけを確約させて、ようやく涼も役割を納得した。
「かならず……かならずですよ、巧猿！」
「シッ……もう黙って、僕にまかせたまえ」
二人はスッポリ頭からおおう灰色のマントをかぶり、とある扉の前に立っている。
――どうして巧猿はこの場所を知っているのかな？
巧猿はこれから涼を売り飛ばすという設定である。彼なりに少し緊張している。

——考えてみると、そう悪い方法でもない。

長い、暗い廊下をうつむいて歩きながら、涼は胸の中でうなずいていた。幽霊船が生きた若者を必要とするなら、こうした場所にも手掛かりはあるのかもしれない。

もし、うまく生け贄を探す目にとまれば、

——その時はね……。

まず幽霊船の寄港地をつきとめるのだ。あるいは初めて配下を捕らえて、邪悪な主人の正体を吐かせることになるか……誰にも見られないフードの陰で、少年がチラリと笑った。

やがて彼らは人買いのオフィスに入った。

あらわれたのは太った欲深そうな男で、涼を見るとうなずいてあとは部下に——仲介人と名乗った——まかせて行ってしまった。

「年はいくつ？」

「16歳。黒髪で雪の肌ですよ……ほら、このとおり女の子といってもとおる器量！」

〝巧猿、嫌なこと言わないでくれよ！〟、強く肘でついてもますます盛んにしゃべりまくる。どうやら、売人の才能にめざめたらしい。

「おとなしいし気立てもいいし、物覚えもよくて、言うことをよく聞きますぜ。掘り出し物でしょう、ねえ旦那？」

——アリエナに言ってやる!!

どの舞台でいくらで売りたいのか？　という問いに、高ければ高いほどと答えた。その時仲介人の眉にチラッと走った陰が、彼らをひそかに満足させた。

「この子なら、この金額だね」

「けっこう。ところで競りの舞台はどこで？」

「……C－72フロア」

巧猿はあさましくモミ手をして紙幣をうけとった……。

そして一人残された涼は、しばらく気配をうかがいながらおとなしく座っていた。

――ここに妖気はないな……この人もふつうみたいだ。

実際にその男はかなりふつうの人間だった。声もたてずにうつむいている涼を、少し可哀相だと思ったらしい。

「坊や、どうしてここにくることにしたのかい？」

「あ……あの、父さんが病気でお金がなくて……」

とっさに口からでたウソに、心臓が猛スピードでうちはじめた。

――巧猿といると、どうして僕は凄まじいウソをつくハメになるの!?

ネオ・ナリタが心底恋しくなった……仲介人は眉をよせて、

「さっきの若造は坊やの何にあたる人？」

「あ、兄じゃないでしょうか？」

「でしょうか？」

気まずさでみるみる顔が赤くなる。恨みを涼は巧猿にぶつけた。

「あ……あの兄は血も涙もない鬼のような性格で、とても僕、血がつながっているとは信じられません！　でも母さんを殴るし、近所の子供を勝手に売りとばすし、僕が可愛がっていた子犬だって昨日煮て食べちゃいました。家にはもう売るものが何もないので、僕を売りにきたんです」

「悪い奴だな！」

仲介人はグイッと涙をぬぐった。〝こんな可哀相な子を、妙なところには売れるかい！〟

――最近、気味の悪い客がきてボスと妙な取引をしていることが不安でならない。

本当なら、この少年も怪しい客の見る舞台にあげられるはずで、なんとなく……その客はこの子を選ぶような気がする。

〝あの客に選ばれた者たちは、どうしてそのあと、消えたように二度と噂もなくなってしまうのだろう？〟

「よしッ、坊や安心しな！　今夜はほかにもべつのフロアで、特別な上客ばかりの競りもあるのさ……どの客も古馴染みばかりだから大丈夫だ！」

――えっ!?　ちょっと、待って!!

叫ぶひまもなく、ちょうど入ってきた用心棒が数人の少年少女をつれていくと言った。

「この子も一緒に、C－90フロアへ」

――やめてくれッッ……！

ふたたび廊下にでたところで、強そうな用心棒が涼たちをふりかえって脅した。

「よし、みんなここにいるのは承知で売られてきた者ばかりだ。何も心配はいらない、これからはきれいな服をきて、遊んでいるのが仕事になるんだ。だがいいか……一人でも逃げたら全員が暗いところ行きだと思っておけよ！」

たちまちおたがいが警戒するような表情になって、手などをつなぎあう。

悲壮な顔をした可愛い少女が、涼の袖に手をかけてしっかりと握りしめた。

その同じ日の夕方、香港本島のビジネス街で。

高層ビルの最上階に、新興財閥のなかでもトップと噂される財団の本拠があった。正体はあきらかでないが、莫大な資産を持つ謎の青年富豪がその主だといわれている。人嫌いで、めったに人前にも姿をあらわさないとか……人気のないこのオフィスからは、34の会社に指令がくだされていた。

――広く優雅なオフィスは薄暗く、あかりもついていない。

一人の青年が窓ぎわに立って、新界へつながる海をみおろしていた。

背が高く、暗い……人をよせつけない表情をしている。瞳の色は青い。

「旦那様、あかりをおつけになりませんと……」

老いた白髪のウォルフという執事が入ってきて、物静かにたずねた。

返事を待つことはない。彼は手際よく部屋のあかりをつけてまわり、すぐにその部屋は明るく……オフィスの設計者が意図したとおりの快適な空間となった。

しかし、海を見ていた青年はふりむいて、窓から離れてしまった。

執事の老人はひそかに思っている。

――この子は海を嫌っているのに、なぜいつも海を見るのだろうか？

この執事の老人の名はウォルフ……生涯の60年を富豪として暮らし、あとの10年を執事として生きようとしている者だ。

彼にとっては、それは贖罪の年月だ。

彼が主人と呼び、心の中では我が子と呼ぶ、この青年の両親を無残に死なせてしまった。

――7年前だ。この子は13歳になったばかりだった。

強欲で、非道な富豪だった彼を、若い医師の夫婦がかばって殺された。忘れ形見の少年が、以来彼の何よりも大切なものだ。

父と母が惨殺されるさまを、少年はその目で見ていた。

優しい感受性の強い子供だった彼は、数か月ものあいだ生死をさまよい続けた……ウォルフは焦り、死にかかっている子の耳もとで昼も夜も復讐をささやいて呼んだ。

長い昏睡から目覚めたその瞳を見て、はじめて老人は自分の犯した過ちに気づいたものだ。

氷のような瞳はまたたきもせず、冷酷な光に満ちていた。

刷りこまれたように彼が自分を殺人機械に変えていくのを、やめさせることができなかった。両親の復讐を終えたいまでさえ、彼はみずから敵を求め……夜の中に出て行ってしまう。

――たった7年だ！　まだこの子の傷は癒えていない……。

私がつけた傷だ……老人はいつも胸の中でそう思う。ありあまるほどの金にまかせて、あの手この手でこの子の気をそらそうと試みたが、一つも効果はなかった。

この会社も、露骨になるまで目にいれた、様々な華麗な誘惑も。

あたたかさや快適さは、彼にはなんの意味も持たないのだ。いつかこの子が心をとりもどし、誰かを愛して幸せを望む日がくるのだろうか？

――どんなことをしても、私はその日まで死ねない！

物思いにふける老人から、暗い顔の青年は目をそむけて、つぶやいた。

「……ウォルフ、やはり出かけてくることにする」

それは身分をかえ、名を隠して闇の世界をさまよい歩くことだ。

亡き父母がこの青年に与えた名は、ナサニエル・ゴードンというのだが、闇の中で彼が手

にした名はナイトハンドという。

老人はただ低い声で言う。

「お早いお帰りを」

やがて、背の高い黒衣の男が街にでる。

黒い服、黒い手袋。人相を完全に隠す、傭兵型の黒のサングラスをかけて、寒気がする冷酷な気配が感じられる。しなやかな黒豹のような動作は、いつでも殺戮に移れる優美さを漂わせている。

〝賞金稼ぎのナイトハンド〟

香港の闇の底で、この名は広く恐れられてもいる。

奴は悪魔のように強く、情けを知らない。

――あいつは金でなく、殺すのが楽しいのさ！

憎悪とともに語られる言葉は、嘘ではないのかもしれない。ともかくナイトハンドは絶対に金では買えないのだ。札束で命乞いを試みた悪党は一人のこらず射殺された。

とにかく強い。暗闇でも、空気の波動を感じて先に敵の前に立つとか。一度、彼に狙われたら逃げられる悪党はいないという噂だ。

この夜は、もう決まった獲物がいる……黒いコートをひるがえして、彼は新界の通りを歩

きだした。

――皇麟街・〝黄金の針〟。

甘い歌声と、誘うようなささめきがそこここから聞こえてくるが、耳をかすことはない。

――ウォルフが望んでいることは知っているのだった……。

この殺人鬼の顔を捨てること、光にむけて歩きだすこと。自分を護ってくれ、返せないほどを与えてくれたウォルフに感謝はしていた。彼の望みをかなえられたら、と思う。

――だが、できないのだ。

たとえば夕暮れがきて、薄暗闇のなかに一人いると、ふいに恐ろしいばかりの痛みに自分が裂かれるような気がする。

痛みはすぐに終わる……だが、立ちあがって戦いはじめないかぎり、何度でもそれは襲ってくる。

苦痛を消せるのは憎悪だけだ。心を凍らせ、憎悪の火で全身をつつんでいて、はじめて彼は生きていける。愛することはおぞましかった。

なぜならば、愛を口にする者はたいていが弱い者ばかりだったからだ。愛にまつわる記憶は、どれもろくなものではない。

むしろ力ある者が、愛などに目を眩ませられて破滅する姿を何度も見た……そいつは愚かだったから、報いを受けたのだと思った。

愛が貴ばれていることは知っていたが、信じたことはない。
闇の中で彼が出会い……興味をもった相手とは、すなわち憎める敵しかいないのだ。
——いや……一人いた。妙な奴だった……。
ネオ・ナリタで会った不思議な少年だ。殺しの邪魔ばかりするくせに、味方のような顔をする奇妙な奴だった。
愛という感情をばかばかしく大切にしていたが、かなり——認めざるを得ないほど——あれは強かった。
めずらしい微笑がくちびるに浮かんで、すぐに消えた。
——あれは特別だ。アルディーンと言ったっけ……。
少年の姿をしているが、計り知れない妖魔の力を秘めていた。ナイトハンドの自分さえ、助けられたことが何度もあったはずだ。
あの力は素晴らしかった！　少年もまた勇敢で、恐れをしらぬ戦士だった。頭も怜悧だった……大人もおよばぬ冷静さと胆力があった。
離れているあいだに、思い出はやや美化されている。
新界で、ナイトハンドもまた幽霊船の噂を追っていた。
彼はまだ、それを海賊のような集団から探せるかもしれないと考えていた。手掛かりにな

りそうな男が一人いて、数日、ずっとあとをつけていた。
——今夜はいよいよ動きだすようすだ。
非情な笑みをもらして、影のようにつけていく。暗闇でも自在に動ける技を持つ彼は、こんな時にとても有利だった。
〝黄金の針〟に入って、〝C—90〟というドアを入った。ひそやかにうしろから入ると、どうやら人買いの舞台のようだ。
——フン、くだらない。
尾行の相手のすぐうしろの席にいって、ひそかな話し合いを聞く。
「そうだ……20キロ、精製済みの薬だ」
「値段がおりあわない……」
耳に入る会話は、がっかりするようなものだった。
——ただの麻薬の取引だと？
腹だたしさに目の前のグラスをとりあげて、ついあおってしまった。その時、ちょうど舞台が明るくなって……。
思わぬ手違いで〝C—90フロア〟につれてこられた涼は、目の前が真っ暗になっている。用心棒らしき男は、涼とほか数人の売り物たちをそこまでつれていくと、一人ずつ髪をと

かさせたり、服装をととのえたりする人間が待っていた。
髪に花をつけられそうになって、あわてて飛びのいた。
——冗談じゃない！　嫌だッ……。
「なに、嫌だ？」
さっきの用心棒が、目配せされてこっちにくる。
「めんどうをかけさせちゃいけないなァ」
狭い場所だけに緊張は全体にひろがった。男は涼の隣の少女に花輪を渡すと、〝髪にのせてやれ〟と指示した。
——もう、どうすればいいか、わ・か・ら・な・い。
順番がきて舞台に押しだされると、とにかく必死で巧猿の姿を探すが、
——やっぱりいない！　どうしよう!?
ショックで目に涙があふれてきた……こうなったら爪と牙をだして逃げてやろうか、とも思うのだが、妖魔に涙は禁物だ。
泣きやもうとしても、情けなくて泣かずにはおられない……。
ナイトハンドが見たのは、よろめきながら出てきた小柄な少年だ。
恥さらしにも髪に花をつけ、中央で視線をあびたとたん、こらえ切れぬように泣きはじめた。

思わずグラスの中身をふきそうになってむせかえった。周囲にすっかり注目されてしまったが、そんなことはもはやどうでもいい！

――あ……あいつはこんなところで何をしているんだ!?

どう見ても、売り飛ばされているとしか思えない！　泣きじゃくっていると、なぜか、競り値がどんどん跳ね上がっている。

――あの恥さらし！　ばかものめが！

怒りとともに手をふりあげた。

「５５００Ｇ！」

「よし、５５５０！」

結局、２０７００Ｇでナイトハンドが競り落とした。記録破りの高値である。

「よろしい……ではそこの若いお方へ！」

つけていたはずの男に〝おとなしい、よい買い物でしたな〟とささやかれた時が、最悪の瞬間といえようか……。

「ナイトハンド!!　よかった、助けてもらった」

「助けてもらったじゃないッ！」

建物の外に出たとたん、涼は思い切り乱暴に宙づりにされた。

首を持って、目の高さまであげるとジタバタしている。
——そうだ……こいつはそういう奴だったんだ!!
忘れていた部分の記憶が、嫌になるほど蘇ってきた。こいつがじつによく泣いたこと。お人よしで見苦しかったこと。
——敵味方の区別もなしになつきにいく、本当に節操のない奴だった!
「どうして貴様、香港にいる!?」
「うーん、話せば長くなるよ」
——これ以上殴られてはたまらないから、適当にはしょって話そう。
そうとうごまかして話したつもりなのに、最後には結局怒鳴られて終わった。
「……そんなわけでね。幽霊船の手掛かりを探すつもりだったんだけど、計画とズレてしまったんだ。ありがとうナイトハンド、本当に助かった。20700Gはきっと巧猿が払ってくれると思うよ!」
「巧猿だと?」
「だから、最初に僕をさらった人だよ……いまはね、もう友達だから協力している」
ニコニコとうれしそうに言うのだ。どんな人間にも我慢の限度というものがある。
「お前はなんて間抜けの、お人よしなんだ!!」
頭が割れるように痛くなってきた。いいからこいッ……と言って、すごい力で涼を人買い



のオフィスまでつれていった。

ドアをひと蹴りで破ると、太ったボスを引きずり出して続けざまに殴っていく。怒号と悲鳴がおさまるまで、涼は外に出て待つことにした。

……数分後には、誰もかれもすべて口をわった。

「ようし、話せ。知っていることを全部だ！」

「し……しばらく前からきていた怪しい客だ。いつも若い者だけをつれていって……一人も帰ってこない」

香港の外につれて行かれたのか、とも思っていたが、

「見覚えのある娘が本島の海岸に流れ着いたんだ……例の幽霊船と同じ手口で……」

「お前はそれでどうしたのだ？」

次にその客がきた時に、値段をあげたのだと白状した。ナイトハンドが正確な蹴りを腹にいれる……。

その客は、理由をきこうとはせずに黙って金を払っていったと言う。

「どんな奴？」

「背がかなり高くて、いつも顔を隠している。新界の生まれには間違いないと思うが、いつも本島へむけて帰るのが変だった……」

——幽霊船は本島へむけて帰っていく？

二人は、しばらく顔を見合わせていた……。

第四章　千人会議の賭け――五星家の麗王

……香港・五星家の現在の当主と役職は次のとおりである。

すなわち、
新界総督、ウィリアム・几城。
本島長官、韻大人。
レン・巧猿。
香港警察および香港海上警察署長、アリエナ・ライル。
そして最大の富豪であるハイシャ・B。
――千人会議を数日後にひかえたその日、巧猿はこのハイシャに会うために本島の会議場をたずねていた。

本島・会議場は独特な円形の美しい建物である。
新界や海上からでもよく目立つエメラルド・グリーンの尖塔をそなえ、塔は夜間をいく船

をみちびく灯台となっている。

自治区・香港の最高会議といえる有力市民会議――いわゆる千人会議――の議場であるだけでなく、ふだんから本島の富裕な人々の社交場ともなっていた。

――ここへ行けばハイシャに会えるぞ。

数日後にせまった千人会議の前に、どうしても彼に会っておかなければならない。

韻長官の提案に対抗するなら、彼のうしろ盾が必要である。ハイシャは五星家の最長老格で、世襲の役職とはかかわりなく財力・勢力ともにトップに立っている。

彼の言葉があれば千人会議は実質動かせるのだ。

……この前、アリエナから韻長官の暴挙を聞いた時、巧猿は彼女に訊ねている。

〝ハイシャはこれについて、どうでているんだ？〟

〝いまのところ長官の側に立っているわ。元宵節の前に幽霊船の被害を終わらせなければならないと言って〟

――ハイシャは香港のしきたりを重んじる男だ。

レン・巧猿はうなずいて、勝算を考えた。彼も巧猿と同じ、生粋の香港仔の気質をそなえている……韻大人にくらべてはるかにわかりやすい相手だった。巧猿にとって。

目上と会うのにふさわしい服装を選んで、その朝、巧猿は会議場にむかった。

深紅の絨毯を敷いた大階段のところで、会いたくない人物とすれ違った。

——本島長官、韻大人だ。

彼は五十代の酷薄な顔だちの男で、背は巧猿と同じほどに高い。

妻はすでに亡く、息子が一人だけいる。

人に厳しく、恩情のない決定をすることで知られていた。ことに新界に対しては、昔から巧猿が不思議がるくらい苛烈な処置を言いたてた。

——幽霊船は彼にとって、いい機会なのかもしれない……。

勢力を広げ、権力を増す絶好のチャンスだろうか？　すくなくとも新界には望みどおりの厳しい一撃があたえられる。

すれ違う瞬間、相手から声をかけてきた。

「レン・巧猿、ひさしぶりだな」

巧猿は低く頭をさげた。

「韻長官にはおかわりなくてなによりです」

韻大人は口の隅で笑って、意外な強い力で巧猿の腕に手をかけた。

「五星一家の愚か者が、いまさら帰ってきてどんなバカなまねをする気だ？　何をたくらんでも無駄だぞ……言っておくが、邪魔などすればきっとあとで後悔することになる」

見下した口調に思うことはあったが、巧猿は穏やかにかわした。

「お言葉、肝に銘じておきましょう。突然のお叱りにはいささかとまどいましたが……でも

懐かしいお顔にあえて光栄でした」

けわしい眉の下から、眼光が巧猿を射るように見た。

足どりも尊大なうしろ姿を見送り、階上へあがると廊下のむこうから、また一人見覚えのある姿が近づいてきた。

韻長官の一子、麗王である。

――香港でたぶんいちばん美しいと言われる少年だ。

流れるような黒髪に、銀青色とでもいうべき瞳の色。緞子の袍が絵のように似合う。香港仔のいちばん貴ぶ繊細さと優美さが、理想のかたちでそなわる美貌だ。

年は16歳になるが、やや病弱であまり人なかにはでてこない。

巧猿の姿をみとめると、笑顔を見せた。

「巧猿殿、おかえりなさい。ご無事で何よりでした」

声もまた涼しい。巧猿も笑顔で挨拶をかえした。

おたがいにすれ違おうとした瞬間、少年はふと思いなおしたように巧猿にむかい、かたい表情で訊ねた。

「巧猿殿は、もどられてから幽霊船の話をご存じですか？」

「……ええ、噂をききました」

麗王の表情が不安に曇った。

「父はいま、毎晩のようにセントラル・ボード（傭兵仲介所）の人間を集めて話をしています。いえ、そのことも心配ですが、新界総督とミハイルが行方不明のままなのが……」

ミハイル？　巧猿が彼ならば自分が無事にかくまっている、と言いかけた時に、

「麗王！」

ふりむくと韻大人が厳しい顔でこちらにもどってきていた。麗王はサッと顔色を変えて、父親のもとに走っていく。

さっきは見なかった人影が、一人、長官のかたわらに立っていた。病弱だといわれる麗王の昔からの付き人で、たしか……。

――たしか、夏虎という名前だったか……？

うしろ姿に、どこか見覚えがあるような気がした。背はかなり高い。

ハイシャ・Bの前にでると、わけもなくホッとした。

香港最大の富豪で、千人会議にかくれもない勢力をにぎっているハイシャは、恰幅のよい鋭い目をした老人で、巧猿の顔を見ると満面の笑顔を見せた。

今年で喜寿にはなるはずだが、衰えを知らない気力に満ちている。

「たったいま、そこで麗王殿に会いました」

「おう、それは得をしたな！」

こういうところがわかりやすい。
「病弱だという噂ですが、今日は障りもなくお元気そうでした」
ハイシャはうなずいた。
「ウム、あの若さで病気がちなのは気の毒なことよ。丈夫でさえあれば、それこそ本島の華なのだが……」
レン・巧猿がたずねてきた理由に気がついていても、自分から匂わせるようなことはしない。手の内は、まず相手から見せるものだ。
巧猿はすぐに自分からきりだすしかないと腹をくくった。
「じつは、本日はおりいってうかがいたい議があって、まいりました」
――次回の千人会議において、韻長官の側に立たれるというのは本当ですか？
「このままでいけば、そうなるだろうな」
ついさっき韻長官もまた彼に会いにきていたのだ。最後の念押しと、確認のために。
巧猿は一瞬あせった。
「待ってください、あなたまで！　それはいけないッ……」
ハイシャは青年を手で制した。そして、うちあけた話をしようじゃないか、と言った。
「公に言うのはいけないが、私とて今回の韻大人のやりように、すべて賛成しているわけではない」

新界と本島は一つのものだ。どちらかを痛めつけて、香港の繁栄に傷がつかないわけがないのだ。

「だが〝幽霊船〟のことがある。本島の立場として見過ごすことは不可能だ」

「幽霊船の陰には本島の人間が、からんでもいるようすです！」

巧猿は〝黄金の針〟で調べたことを話した。ハイシャはやや黙って考えていたが、

「それでも元宵節が近づいているのだ……」

目を閉じて、ちょっとためらってから話しはじめた。

「正直なところ、私がいまいちばん気にかけているのは元宵節だ……年よりのカンだが妙に胸騒ぎがしてならない。五星家のあの祭りは4年ごとのしきたりなのだ。破れば恐ろしいことが起きるような気がする……迷信といってもよい恐怖を感じるのだよ」

――なんとしても今年、決めたとおりに行わなければ駄目なのだ！

内心、あきれながらも、せきたてられるように韻長官と手を組むことにした。

「レン・巧猿、君も私の年齢になればわかるかな？　元宵節を司るのは五星家の重い義務なのだと、私の身のどこかから叫ぶ声がきこえる。我らの先祖は、呪術士であったとか……その血が何か教えてくれようとしている」

元宵節は香港の海上の祭りで、しかも夜に行われるのだ。

「韻長官の言葉を待つまでもなく、海上でしかも夜なのだ……常識で考えてもわかるはず

だ。祭りの船は絶好の獲物になってしまうかもしれん！」

――幽霊船がさまよう海を、そのままにしておくことなど断じてできない。

「だから巧猿、もしも君が私を説得にきたのならば、金でもなく力でもなく、元宵節当夜を無事にすませるという保証を見せるがいい。なによりも欲しいのはそれだ」

「しかし韻長官のやりかたで、その夜の安全が保証されるとはかぎりますまい？」

「そうかもしれん。だが何もしないよりはいいはずだ。新界総督が消えたいまとなっては、やむを得ない……ほかに手段はない」

ハイシャは低いタメ息をついた。

巧猿はグッと息をのんで、こぶしを握った。頭の中だけで考えていることはある……だが、その綱渡りはハイシャの協力があってこそなのだ。

――レン・巧猿、時間がないな？

ハイシャはややおもしろそうな視線で、若造のでかたを待っていた。彼は巧猿には好意を持っていた。五星家の若い世代からは、この男がいずれ頭角をあらわしてくれればよいと思うのだ。

まだまだ若いが奇想天外な手をうつことがある。なにより韻のような陰湿なところがない、祭りと人々を愛する生粋の香港仔だ。

「もっと前に帰っていればよかったな、巧猿」

なかば真剣な口調でそう言った。千人会議は数日後にせまっている。レン・巧猿にとって、もどって出直してくる時間はもうなかった。

「私を信じてくださるわけにいきませんか！」

「……君をか、巧猿！」

ハイシャは大きな声で笑った。

「我々は香港仔だ！　そうだろう？　取引は、約束の手形なしでは行わないよ！」

――手形がなければ、見返りはどうだ!?

レン・巧猿は必死に提案を続けた。だが財力・勢力にまさる相手に、たとえ五星家の巧猿といえども飛びつかせるような品は持ち合わせていない。

――いや、じつは一つだけある。

沈黙がしばらく続いたあとで、ハイシャは奇妙なことを言いはじめた。

「ずっと前から気になっていたことがあるのだがね……」

のんびり、世間話をする口調で彼は巧猿のうしろをながめた。

「……2年前のことだよ。君が突然香港を飛びだした理由についてだ。やけに急なことで、あの当時は私もまあ、気まぐれか……あるいは怪しげな失敗でもして、行方をくらませたのかと考えていたんだが、いま思うとあれはアリエナのためだったのかな？」

目の前の巧猿の顔が、みるみるうちに赤くなっていった。

「アリエナ・ライルと君はいとこ同士で、そういえばいちばん近い相続人になるのだった」
当時、彼女は父の死とともに香港警察署長を継ごうとしていた。
世襲の役職ではあったが、女で16歳だったアリエナに務まるのかどうか、危ぶむ声も多かった気がする。
もしも、あの時巧猿が香港を離れず、誰かが彼の存在に目をつけていたら……。
「アリエナには、つらいことになっていたかもしれないな」
――アリエナは気丈でかしこい娘だ。
「しかもなかなか美人だな……巧猿、いったい彼女と結婚する意志はあるのか？」
――あります！
巧猿ははじかれたように立ち上がっていた。ハイシャがニヤリとした。
「それならば話は簡単だ。君はこの事件を乗りきれたら、アリエナにプロポーズするつもりだったんじゃないかね？」
「それは……できれば、そうしたいと考えたことはありますが……」
ハイシャは巧猿の肩を軽くたたいた。
韻長官に対して一歩もゆずらず、幽霊船を無事捕らえたら……巧猿は香港仔の英雄になるだろう。すくなくともアリエナの英雄にはなれる。
「彼女だって結婚を承知するさ！　そこで問題になるのは……彼女の後見人だ」

アリエナは18歳で香港の法によれば、重要な場合には後見人がついてもおかしくはない。レン・巧猿とアリエナ・ライルの結婚は、大きな力をもつ名家の結びつきだ。五星家のうちの二つがあわさるとしたら、本島の勢力図はずいぶん塗り替えられるだろう。

「うしろ盾という意味からも、力のある後見人を選ぶほうがいいと思うが……？」

巧猿は素早く一礼した。

「私たちは、ぜひあなたにお願いしたい！」

「子供ができた場合の名付け親は？」

「それも、もちろんあなたに」

〝それで決まった！〟、ハイシャは手をたたいて茶を持ってこさせた。古風な彼にとっては約定の決まったしるしだ。

銀の碗からゆっくりとすすりながら、横目で巧猿の姿を見た。

――ひょっとすると、生涯最高のよい取引になるかもしれない……。

韻大人がこのまま陰湿な勢力をのばしてくることには、かねて不安を持っていた。だがアリエナの力と巧猿の財力……巨大な新興勢力があらわれそうだ。自分は今日ここで、その長老格を手に入れた。やがては二人の子供が五星家を一つずつ継ぐだろう。まだすべてが見込みにすぎないが……。

――しかしよい見込みだ！　誰にとっても。

巧猿はよい夫になるだろうしな……懐がポカポカしてくるようなこの感じはよい予兆だ。

彼らはおたがいに顔を見合わせた。

「私は香港仔なので、運というものを信じている。だから今回、君に懸けてみよう」

巧猿が約束しなければならないことは二つだ。

「君は千人会議の席上で、元宵節の実行を可能にする案をだすのだ。それが価値のある案ならば、私は全面的に指示する。韻長官の提案はしりぞけよう」

レン・巧猿はうなずいた。

「元宵節が無事にすみしだい……アリエナ・ライルに結婚を申し込む」

巧猿はややあいまいにうなずいた。

別れるとき、巧猿はハイシャに声をかけられて立ち止まった。

ふりむいて答えようとすると、

「そのままでいいから、聞いてくれるか？」

奇妙ではあったが言われたとおりに待つと、

「幽霊船に本島の人間がかかわっているというのは本当か？」

「……その可能性があります」

ハイシャはやがて長いタメ息をついた。

「そうか……32年前と同じか……」

——なんですって!?

巧猿が思わずふりむくと、ハイシャは別人のように暗い表情でうなずいた。

「ここだけの話だ」

前回の幽霊船の騒ぎがおさまって、しばらくしてからハイシャはそれに気づいた。

理由はいろいろとあった。

「まず……幽霊船と呼ばれていた黒い船の形式が、よく見ると新界より本島の形に近かった。それから奪われた品々の中から貴重なものがいくつか、どうしても出てこなかった」

真に貴重で、重要な品物だけ。多くは宝石か美術品だった。

「本島の誰かが黒幕だったのではあるまいかと感じたのだが、わからなかった」

イリヤという新界の女が、死んでいたのも不幸だった。

「……死んでいた？　彼女は死罪になったのでは」

アリエナの父の書類では、たしかそうなっていたような記憶があるが……。ハイシャは違うと言った。

「君が見たのはおそらく判決書類だろう。実際には女はもう死んでいた」

元宵節の夜に、香港警察が根城に踏み込んだ時には、白い髪の魔女は骸になっていた。

「毒……じゃなかったかな？」

ハイシャはそう言って口を閉ざした。
「まだ何か……ご存じのようですね。何ひとつ残さずに教えてください」
ハイシャは巧猿に背をむけた。黒い影になった背中が語る……。
「仇魔刀という名前について聞いたことはあるか？」
巧猿はうなずいた。
「クリスタルと同じころから五星家に伝わる術具だった。あらゆる邪気の封印を切るとか……クリスタルとは違い、定められた祭りに使うというものでもなかったから、香港当局の管理にまかせていた」
32年前に必要となるかもしれない事件が起きた時、ひとあし早く、それは保管されていた場所から消え失せてしまっていた。
「たしかに……仇魔力の保管は当局にまかせっぱなしにしていたが、それでも1級の保安態勢だったはずだ。思えばあの当時、術具に本来近づき得たのは、誰だっただろう？　専任の係員か、または五星家の者ではなかったのか……と？」
異様な言葉に巧猿は、まじまじとハイシャをみつめた。
「恐ろしいことだが、長いあいだ私は疑ってきたのだ」
「誰をです!?」
わからない……確信は何もなかったのだ。ただ漠然とした予感が、この人物の中にきわ

だって強いらしい五星家の六感が、いまになって何かを告げはじめていた。

「ここだけの話にしてほしい……私は、その人物は韻大人だったのではないかと……」

韻大人の屋敷は本島の建門地区にある。

重々しい、暗い邸宅で、黒檀の龍の彫刻が柱にほどこされている。

夜もふけた……韻大人はただ一人で書斎に残り、古風な暖炉の前にいた。

けわしい鷹のような横顔が、燃える火をジッと見下ろしている。

——彼の心には、ぬぐいきれない恐怖が隠されていた。

香港人のもつ美に対する執着を、韻大人もまたそなえていた。ただしそれは生ける者の美貌ではなくて、光る石……宝石に対する病だ。

まだ若かったころに、彼は新界の女をあやつって、闇を行く幽霊船をつくりあげた。女はイリヤといって白い髪をしていて、彼と五星家のクリスタルに興味を持っていた。

妻にすると偽って女の力を借り、これぞという船を襲って望みの品を奪わせた。

もはや見いだせない旧世界の貴重な細工を数多く手に入れた……いまはこの暖炉の奥ふかくに塗りこめてしまったが。

美しい娘だったがしだいに恐ろしくなったのだ。幽霊船も徐々にだが、追いつめられてきていた。

――元宵節の夜に、なにゆえだかイリヤの力が弱くなることを知っていた……。

理由は知らなかった。だがイリヤは用心深くその日を恐れ、祭りの夜には幽霊船を出さず、新界で隠れすごすと、前々から話していたのだ。

その夜、用意した毒を飲ませたのだ。

――あの女はすぐには死ななかった……。

強い毒が体内に入っても、長い時間息があって彼を呪った……。

『韻……韻、おぼえておけ！　私は蘇るわ！　その時はいまより強くなっている……幽霊船がお前も五星家もきっと根絶やしにする！』

恐ろしさに夢中で喉をしめると、動かなくなった。

あの夜をさかいに彼の心に恐怖が巣くっている。いつか新界からイリヤが蘇って、呪いをはたしにくるに違いない。妖術士のうごめくあの街！

――新界に火をかけ、何もかも消してしまいたい!!

今年もまた元宵節がくる。

その矢先に〝幽霊船〟の噂が街を流れていると知った時、韻大人の心はすでに一歩狂ってきていた。

――きたか!?　あの魔女が帰ってきた！

耳の奥のあの声をふりはらうように、彼は身体を支えている杖を握りしめた。

『おぼえておいで……幽霊船はきっと蘇る！』

「……まだお休みにならないのですか？」

――誰だ!?

怒りもあらわにふりかえると、息子の麗王がいた。

「父上、まだお休みにならないのですか？」

うつむいて息をはくと、父親はうるさそうに手をふった。

「私にかまうな。お前こそまた熱などださないように寝ていろ」

――これを生んですぐに母親は死んだ。それもあの女の呪いだろうか？

だがあきらめていたころに生まれた麗王は、誰もが目をみはるほど美しい子供になっていった。父親は彼を文字どおり溺愛していた。

彼は知らない。

イリヤの呪いは新界から襲いくるようなたやすいものではない。

韻大人はまだ自分の息子、麗王の二の腕をしかと見たことがないのだ。

――そこには鱗の魔斑がある。

麗王の誕生こそじつはイリヤの呪いである……同じ残忍さと魔力が、生まれながらに備わっていた。〝私は蘇る！〟と、魔女は誓った……背をむけている父親には、少年の妖しい笑いが見えてはいない。

「では父上……おはやくお休みくださいませ」
軽い足音が出ていこうとするのを聞くと、韻大人は心を変えて呼びとめた。
「待ってくれ、麗王」
足音は予期していたかのようにとまった。
「麗王……これ、そこにいるのか？」
「はい、父上」
「どうにも眠れないのだ。何かすこし聴かせてくれないか……いつものように」
五星家の麗王は六絃琴の名手として知られている。過去の悪夢に悩まされるその父は、麗王の琴を聴かされると不思議に気持ちが落ち着いて楽になった。
——麗王の琴を聞けばすこしは眠れよう……。
すぐに少年は楽器を持ってかえってきた。白い指さきから、静かな旋律がながれだす……。
「このところ、父上はお忙しすぎてお身体が心配です……」
韻大人は、うなるような声をあげて額をおさえた。頭が痛む。
「黒い……幽霊船のせいで」
韻大人は一瞬、まがまがしさにもがくような動きを見せたが、ながれる琴の音色がそれを押さえつけてしまった。麻薬のような六絃琴の音が響く。

「幽霊船はいよいよ近づいてくるのでしょうね。毎夜、きっと少しずつでもこの本島をめざして……」

「麗王、よせ……その話は」

もうろうとする韻大人の耳に、琴とささやくような言葉が忍び寄る。

「はやく、武器をとらねば取りかえしのつかぬことになります。新界を殺し、災いの根を断ってやりなさい。さもないと五星家は滅亡するでしょう。あなたも……まず最初の獲物だ」

瞬間、本能で韻大人の目がカッと開いたようだったが、ひときわ鋭く響いた絃の音とともに、彼はガックリと目を閉じて椅子に頭をもたせかけた。

……暗い廊下から、音もなくきた夏虎の声がかけられた。

「麗王様、そこにおいでですか？」

お入り、と銀鈴のように澄んだ声がまねいた。

滑るように付き人は麗王のかたわらに並んだ……この夏虎という男は、麗王が生まれた時からの付き人で、16年間手足のように仕えてきた。

彼が麗王のそばにいる者だと、いつ、誰が決めたのかは、この屋敷の誰にも言えないことであった。いつのまにか屋敷に入り込み、誰一人疑いをもたないでいる。

——実際にはこの男は、32年も前に死んでいるのだが……。

「〝船〟のほうが呼んでおりますが、お支度はよろしいですかな？」
麗王がほほ笑みながらうなずく。昏睡している韻長官を見下ろす二つの視線は、妖しく氷のように冷たかった。
「ごらん、父上がお休みだよ……さぞよい夢を見ておられるのだろうね」
――五星家の麗王がそう言った。

韻長官の屋敷の裏手から、細い水路にぬけられる。
水路は本島の海岸を見え隠れしながら進み、やがては海に出る。どの海岸からも見えない洞窟の入り江、幽霊船の寄港地へ。
暗い洞窟の内部に降りたった瞬間、麗王の髪の色が変化した。
――韻家の嫡男、麗王の美貌を褒めたたえる人々の、誰一人として、じつはその本当の素顔を見たことはないのだった。
美しい容貌は魔力による装いがなされている……韻麗王の髪の色は、本当はずっと白であった。
「……日に日にイリヤ様に似てこられる」
夏虎がうれしげにつぶやくのが聞こえた。
彼は本来は新界の生まれであり、32年前には魔女イリヤに仕えていた一の部下だったの

だ。イリヤの死後は、呪いによって生まれた麗王を護るのが彼の務めである。

おかげんはいかがですか、と夏虎が少年にきく。

「よくはない」

麗王はやや不機嫌に答えた。呪いによって生をうけた麗王は、はじめから黒に染まった者だった。夏虎は麗王が生まれた日からそばについて、犠牲の血を与えた。

麗王が1歳の時には1歳の子供を、5歳になったら5歳の者を。闇にまぎれ、ゆりかごからさらってきては、同じようなゆりかごに眠る麗王の欲しがる生き血を捧げた。

成長した麗王が黒い術をおぼえはじめると、さらに必要となる生け贄は〝黄金の針〟などから入手した。夏虎は麗王の隠された乳母であり、その手なくして麗王は育たなかった。

……無表情なまま、麗王が言う。

「元宵節が近づいているのだ……苦しいのがあたりまえだろう」

香港の神秘の祭り、元宵節。

――その秘密を彼らだけは、もうつきとめていた。

「はじまりはいまいましい五星家の術士どもだ……奴らは香港の地霊が持つ力のうち、黒に属するものをことごとく一か所に封じ込めてしまった」

〝元宵神殿〟と呼ばれる小島がその場所だ。

それゆえに魔力盛んな香港という街で、人を害する黒の技だけは、効きめが異様なほど弱

かったのだ。偉大な魔力の〝場〟にあって、呪われた技を人が使えぬようにする。

「旧世界の魔術……だが、さすがの奴らも永久に続く封印をつくるほどの力はなかった。4年に1度の更新が必要だった」

それが元宵節の本体だ。

五つのクリスタルが呼ぶ海上の光は、封印が新しく力を得るしるしであった。

死に際には黒に属していたイリヤの力が、元宵節の夜に弱められてしまうのも理である……呪詛・邪悪な幻惑・使い魔のたぐい、香港では黒い呪術のすべてが元宵節の夜には力をなくしてしまう。

――そのなかで麗王は、ただ一人生命そのものがはじめから黒に属しているのだ。

元宵節の光は、当然ながら彼には死の脅威だった。

「あの光をあびるたびに、この身体がすこしずつ壊されていくのがわかるよ、夏虎」

すでに3度……そのたびごとに麗王の〝身体〟は弱っていった。韻家の麗王は病弱な少年だとかなり前から巷では言われている。

幽霊船が甲板をあふれるほどの血で満たしても、まだ旧世界の術士が築いた封印の掟のほうが強い。

「今年4度めを過ごせば、もう耐えられるとは思えない」

少年が考え深げにつぶやく……夏虎がうしろで、異様なねじれた影をつくった。前回も

……その前の祭りの年にも、彼はひそかに夜祭りをさまたげようとしていた。

「しかし力がとても及びませんでした……」

麗王に必要な犠牲を狩り集めるだけで、せいいっぱいというところだ。だが、今年は違うのだ！　夏虎の目が青黒く輝いた。

「あなたさまはもはや、黒い術をある限りに極められました！　幽霊船も奈落の底から蘇ってございます！」

イリヤの遺した邪法はすべて身につけ、そのうえに黒い炎を呼ぶ術も復活させた。

「元宵節は、今年はございませんぞ……」

麗王が冷たく、ほほ笑んだ。

「そのつもりだ。だが、そのためにはまだまだ欲しいものが多いのさ」

あの嵐の夜に、ミハイル・几城を追っていたのも、クリスタルが奪いたかったからだ。あれは几城総督の家につたわるクリスタルだった……手に入れば、五つのうちの一つが欠けることになったはずだ。

「だが……まあ、あれはいい。手に入ってもむしろやっかいだったかもしれないよ」

――五星家のクリスタルほど強い術具は、麗王の力でも割ってしまうことができなかった。

手に入れても、傷一つ、つけることはできないならば無駄だ。

「隠しても、あれは仇魔刀とは違う……残った四つのクリスタルが呼ぶから、たちどころに場所は知れてしまうだろう」

最悪の時には、幽霊船の寄港地があばかれてしまうことにもなりかねない。もっとたやすく手がだせる韻家のクリスタルに触れないのも、いまのところその理由からだった。

……とりあえず、いいのは韻長官の計画どおりに事態が進んで、新界に暴動が起こることだろう、と夏虎が言う。麗王もうなずいた。

「元宵節の契約のカギを握るのは、結局五つのクリスタルと、光を見たいと願う香港の心だ」

五星家の儀式はさほど重要ではない。クリスタルが存在し、願う心が一つである場合、いにしえの封印は更新される。

だが、韻長官の手の傭兵が新界ですべての命令を実行すれば……もちろん香港の半分の心は、憎しみで満たされるばかりになるだろう。

「暴動となれば、本島が思ってもみなかった規模になるでしょうな……新界の人間は、もともと血が熱いのです。引き金がひかれれば、二つの街を焼きつくすまでとまりますまい」

元宵節のころには、ひょっとして血の海で人々が殺しあってるかもしれない。

「父上は狂っておられるよ……ハハ、ありがたいことだ」

韻大人の残忍な計画は、彼本人の心から生まれたものだ。

麗王はただ夜ごとにそれを勇気づけ、新たな恐怖を誼えばいいだけのことだった。

――もはや新界が怖いか、幽霊船が怖いか、区別がつかなくさえなっている。

「残念だが、私自身の力はこれから元宵節まで日に日に弱くなっていく……」

いまでさえ、人目のないところでは目眩ましの術――イリヤと同じ白髪を黒に――を、かけ続けているのがつらい。

息をひそめて夏虎がうなずく。

「新界総督の部隊を、あの夜罠に落とせたのは、まったくギリギリのところだった。あれ以上時がうつると、こちらの力がもたなかったかもしれない」

ちょうど通りすぎる足もとの岩場には、死体が累々と転がっている。殺された船の乗組員だ。麗王に死人返しを使う力があるあいだは、これが幽霊船の配下だった。

――これからしばらくは黒い幽霊船もだせなくなる。

短いあいだだが、当分は目眩ましや、弱い眩惑程度の技しか、かけられなくなってしまうことだろう。

――術士ともいえない程度の技だ！

不満げに眉をよせる麗王に、夏虎がなだめるような気味悪い声音で、

「ですから新界の船を沈めたのは本当にようございました。総督の手だれは鮫のエサになって、新界はもう盾になる兵力を実質持たなくなりました。新界総督も、いまはあなたの手の

なかにあります」

新界総督、その名を聞いて麗王がやっと笑みを見せた。彼にはクリスタルよりもずっとそのほうが貴重だった。

「ククク……ウィリアム・几城殿はどうしておられる？」

「地下に閉じ込めてあります。見張りは高チュアンにさせております……あれを殺させないのはなぜです？」

麗王は高らかに笑った。

「だってただ殺すのは惜しいだろう、夏虎？　あれほど強い、高潔な人間を……ただ死なせてやるなどするものか！　地獄に落としてやるよ！」

いこう、夏虎！　足どりも軽く、麗王は歩きだした。

「……新界総督几城殿」

岩牢の小窓からのぞくと、憔悴した男の顔がこちらをみつめた。

いくつかの深手を負い、地下牢に数夜も閉じ込められていたというのに、まだしっかりしたまなざしをなくさない。

〝お前は誰だ？〟、その声に答えずに小窓をおろした。

「……正気だねえ、夏虎」

麗王がクスクス笑う。そして高チュアンを呼んでこさせるように言った。

……呼ばれてきた高チュアンは、まだ若い男だった。

新界総督の直下で、ただ一人裏切りそうな者だと、前に夏虎が見つけだしてきたのだ。

新界の生まれで、総督自身の手で一人前の将校になる援助を受けた。

同じように育てられた部下の中でも、ひときわ多くの手柄を貪欲にたててのしあがっていた者だ。

――数々の恩義を受け、信頼の目をかけられていながら、まだ裏切る犬の目をしていた……金で。

高チュアンの目はいまでは、そわそわとたえず落ち着かない恐怖に満ちていた。自分では認めぬつもりでいても、金に目が眩んで仲間を売ったその相手はまともではなかった。

夏虎から……麗王から……信じがたい邪気が吹きつけてくるのだ。

〝ひょっとすると裏切った仲間たちよりもむごい死に様が待っているぞ〟、本能のささやく声が聞こえている。

「高チュアン、どうしたのだ。ぼんやりして」

夏虎のとがめる声に、ハッと我に返った。

「な……なんでもない！　それより俺はいつまで総督の見張りをしなくちゃならないんだ!?　始めの約束では仕事は終わっているはずじゃないか!?」

「なにが不満か？　金はもう渡してあるだろうが」
たしかにそうだった。莫大な金額が、すでにその夜に手渡されていた。
だが本当ならばその夜にも香港を逃げだす計画だったのに、しばらく残って総督の見張りをと言われた時に、なぜか恐ろしくて断れなかったのだ。
「お、お前たちは、いつまであいつを生かしておくつもりなんだ!?」
顔を隠した麗王が——彼は高チュアンの前ではいつも布で顔を隠していた——鈴のような声で笑って、新界の裏切り者に言った。
「安心するといい、今夜で終わりだ。君も自由になる」
チュアンは一瞬ホッとしたような顔を見せた。
「……殺すんだな!?」
麗王がうなずいた。だから最後に総督を牢から出して、階上の部屋につれてこいと命じた。
「それからまだある、あの下の部屋にいって……」
15分後に、ウィリアム・几城は手錠をかけられ、洞窟の上にある1室につれてこられた。
高チュアンが目隠しをといて出ていくと、部屋のあかりがつく。
光線になれた几城氏の目が、驚きで愕然と大きく見開かれた。
「韻……麗王殿!!」

韻家の麗王は、優雅なほほ笑みを見せて言った。邪悪な……邪悪な笑みであった。
「ではお前が幽霊船の……！」
はじめて見る白い髪に、総督はすべてを悟っていたようだ。
「几城殿、お久しぶりです。たしか新年の祝い以来……でしたか？」
「悪魔めッ……」
麗王は薄くほほ笑んだ。それから手をふって夏虎になにやら合図をした。
「その悪魔と取引なさいませんか、総督？」
――何を言いだすつもりだ!?
部下を殺され、船をなくし、自分の生命ももうないことを彼はよく理解していた。どんな手で眩ませて、何か聞くつもりなのか……死を前にして総督はせせら笑った。
――さいわい、ただ一人の我が子ミハイルには几城のクリスタルを渡し、逃げのびさせたはずだ……。
「下をご覧なさい、あなたには重要な人がいますよ……」
夏虎があけたのは、床下の階を見通せる窓だった。かなり広い……部屋がはっきりと見渡せた。あちらからは、上がわからない仕掛けになっているようだ。
その下を見て、ウィリアム・几城の表情が大きく変わった。
――ミハイル!!

赤毛の、弱りはてたようによろめく少年が、乱暴な手で引き立てられてその部屋に入ってきた。その腕をつかんでいるのは高チュアンだ。

――かつての部下であり、呪っても呪い足りない男！　奴はミハイルを捕らえていた！

その時まで理性を失わなかった総督の身体が、悪寒のようにふるえだしていた。

彼が見ている下で、高チュアンは腰のサーベルを抜いた。

「待てッ……高チュアン、この犬めが！」

「叫んでも、お声は下までとどきませんよ？」

高チュアンは笑いながら、サーベルをかまえて少年に軽くひと太刀切りつけた。

彼は、自分に勝てない相手と戦うのが好きだった……目の前にいるのは、見知らぬ金髪の少年だ。夏虎が〝黄金の針〟から買ってきて、生け贄として寄港地に捕らえていた。

理由は例によって教えられなかったが、できるだけ手をかけて殺せと命じられた。

かなり長く監禁されていたので、逃げる足も弱っていた。

楽な仕事だった。

――麗王の魔力によって几城の目には、それが自分の息子のミハイルの姿に見えている。まぎれもないミハイル・几城が、裏切り者の手で殺されようとしていた。

赤毛だ、緑の瞳だ。弱い腕で必死に抵抗しながら、ひと太刀ずつ手傷をおわされていく。助けを求めるような絶望の目で、四方の壁をみまわしている……。

「ミハイル、ここだッ……ここにいるぞ!!」
父親は声をふりしぼって叫んでいた。それは愚かな行為であり、麗王は笑った。
吐き気のする喉をこらえて、総督が叫ぶ。
「頼む！　あの子だけは生命を助けてくれッ……」
「できませんね」
麗王は自分だけの冗談で笑った。
――いない者を助けるわけにはいきませんよ。
「だが、高チュアンを殺させてあげることなら可能ですが」
「……なんだとッ!?」
白い髪の麗王は、その胸もとから1個のクリスタルをとりだした。
五星家の形によく似てはいるが、まったく違う……新界のどの術士のものとも違う!?
新界総督が驚きの目をみはった。
――クリスタルの色は、真の黒だったのだ。
韻麗王はクリスタルをかざして、いつくしむようにくちびるをゆがめた。これこそが彼の魔力の源泉であり、イリヤから伝わったものだ。
魔女イリヤのクリスタルは、夏虎の手を経て麗王へ渡り、いまは麗王に従うのだ。
「イリヤがこの黒を生みだした。私は……このクリスタルを完成させるのが夢なのです」

黒いクリスタルは、いまでさえ邪悪な輝きを放っている。だが五星家のクリスタルに対抗するには、まだ力がじゅうぶんとはいえなかった。

麗王のクリスタルが完成した時に、五星家はクリスタルとともに滅亡するのだ。

「黒いクリスタルは人の血を好む……でもこれが本当に糧とするのは、人間の魂なのです」

付き人の夏虎が、大きくうなずいていた。

――憎悪に正気を失い、黒いクリスタルに魂を捧げると誓って死んだ者だけが、クリスタルの奴隷……人鬼になる。

夏虎もかつて……32年前に、この洞窟でイリヤの呪いをとげると誓って自殺したのだ。死体になっても、夏虎は動く。

クリスタルと憎悪の心がある限り、人鬼は術士麗王の手足となってその命ずる悪を果たすのだ……几城総督の目の前で、みるみるその姿が妖しく変わっていく。

牙が見え、関節がねじれて、瞳孔が獣のように細くなった。

――レン・巧猿が船上で見た人鬼も、この夏虎であった。

「だが人鬼となる人間には、資格がいります。うちあけて言えば、そこいらにいるつまらない奴らでは魔力の器になりえない……燃えるような憎悪を抱いて死んだ、生前に呪術の素養のある者。あるいは高潔で力ある人物が堕ちるのがいちばんすばらしい」

――これまでは夏虎ただ一人が、人鬼に変わってみせた者だ。

だが几城殿ならば新界で最高の資格をお持ちだ……と、ささやかれて、瞳が一瞬ほうけたように表情をなくした。

——なんということを言うのだ……この悪魔は……。

麗王は笑いながら階下を指さして、

「ご覧なさい、几城殿……このクリスタルに魂をくれると誓えば、あの男を殺させてあげますよ！」

部下たちをみな殺しにされ、罠に落ちたのはあの男の裏切りからだった。いまも彼自身ここに捕らえられている身体だ……復讐がしたければほかに道はないではないか？

「断る！　ふざけるな、すべて貴様の差し金ではないかッ！」

「それではあなたは、この次に高チュアンに殺させるだけですよ。考えてみるといい、何一つできないままで死んでいくのと、敵の一人を道連れにするのと！　ご覧、総督……あの男が憎くはないのか？」

〝見るな、罠だ！〟

だがどんなに勇敢な者でも、勇気を失う一点を持っている。

几城総督は下からの悲鳴に耳をおさえてうずくまった。麗王が楽しそうに、

「おや可哀想に、腕を折られた！」

こらえることのできない視線が真下を向くと、少年は処刑者に赤毛をつかまれていた。

たったいま、最後の悲鳴と命乞いを笑いながら聞いて、高チュアンはサーベルをその首筋にふりおろし、血の飛沫が……。

「おお……貴様ッツ」

――獣のような絶叫と、血走った目はすでに人間のものではない。

新界総督は狂ったように麗王をふりむいて叫んだ。

「悪魔ッ、欲しいものをくれてやる！　そうすれば高チュアンをよこすといったな……さあ取れ！　生命でも魂でもやるぞ！　だから本当にあの犬を殺させるなッ？　あの男をこの手で八つ裂きにさせるんだな!?」

とまらずにわめき続ける彼の前に、麗王が静かにクリスタルをおいた。

暗黒の輝きに、くいいるようにみつめる目。

夏虎がすばやくかがんで手錠をはずそうとしたが、それより早く新界総督には手順がわかってしまった。

手錠のままでクリスタルをつかむと、いっきに心臓をえぐりぬくのだ。

「……俺は高チュアンを食い殺すことが望みだ!!」

――さて、うつぶせに倒れた身体は、すぐにスッと起き上がった。

「おはよう、新界総督」

麗王が声をかけても、言葉を忘れ果てているので答えられない。

理性のいっさいをなくして、獣のような瞳はただ血に飢えている……。

「いや、一つまだ心が残っているね」

そう言うと、麗王は窓の下を指さした。何もしらない高チュアンが、死体を運びだそうとしていた。新しい人鬼の瞳がギラギラと輝く。

「いいとも！　行って……食い裂いておいで！」

これで二人……階下で引き裂かれる高チュアンの死に様をながめながら、麗王が白い指をおって数えた。

「目眩ましも、ときには役にたつよね。夏虎」

どれほど強い、高潔な魂であっても、きっと駄目になる一点があるものだ。麗王は白い歯を見せた。この少年はそうしたものをよく見つけだす。それは麗王の魔力よりも恐ろしい力だった……階下からは、高チュアンの絶叫がまだ聞こえている。

「クリスタルの完成までには、あと幾人、おいりようなのですか？」

麗王の手にあるのは夏虎と几城、そして麗王自身の呪う力。

五星家のクリスタルは五つだった……だから、

「あと二人、というところかな……一人は父上がよい」

「すると探すのは、あと一人」

獣に食い裂かれたような高チュアンの死体が、浜辺にうちあげられたのは、それから二日

後のことであった。

ハイシャとの一つめの約束をはたすためには、どうしても強力な助っ人がいる。

あくる朝、自分の屋敷の窓辺にたって巧猿はうなずいていた……明るい朝の光がさんさんとふりそそぐ部屋だ。

巧猿には自分に必要なものがよくわかっている。

全滅した新界総督の部隊にかわる、武装した兵力が。

――だが新界に余力はすでになく、アリエナの海上警察は動けない。セントラル・ボードの傭兵は、どうやらことごとく韻長官の手の内にあるようだ。

だいたい幽霊船と対決する……などという命知らずが、そうそういるとは思えない。

――あの魔の炎に対する無力さというのは、韻長官の部隊も結局変わりはないのだから。

残された手段は、もう一つしかないわけだ。

五星家のハイシャに会った翌日、彼は一人、新界の海上にあるセイラ・テンプルをおとずれていた。

レーテア騎士団の王との会見が、彼を待っている。

――彼らは並の傭兵ではない。

巧猿はよく自分にいいきかせていた。

彼らはセントラル・ボードに名前をあずけてはいるが、セントラル・ボードの支配をまったく受けていない者たちだ。

誇り高く、節度を知り、市街で争いごとを起こすことなどまずない。

――韻大人の手先になって、新界の略奪にくわわるおそれは万に一つもない。だが、新界からの依頼をうけさせることも……。

難しい理由があった。

彼ら騎士団は香港の街では、青灰色の衣装と青色のマントをかならず守っている。大公との戦いが終わって以来、肩に白いケープがつけくわえられた。

――この地では戦わぬ。

という、レーテアの意志をしめす印だ。

「アリエナ……彼らを動かして肩布をはずさせることが、僕にできるかな？」

白亜の塔を目前にして、巧猿がポツリとつぶやいた。もちろん、アリエナはそのそばにいない……いたら、不安をこんなにまともな形で口にだすなどできるわけがない。

あの美貌、あの奇妙な気迫のある騎士団の目を……まっすぐに見るだけでも、並の者はうわずって手も足もでなくなってしまう。

その騎士が絶対の敬愛をささげる王というのは、どんな者なのだろう⁉

王家はその神秘の建物の奥ふかくに守られていて、公式ないくつかの行事以外では姿も外

にあらわさない。

――現王はまだ若いと聞いた……。

怜悧で、人をよく見抜く王だという。邪な駆け引きは、その血がうけつけないと。

――思ったとおりに交渉できるだろうか？

みるみるうちに、自信は消えつつあるのだ。

だが、やらねばならない。香港の多くの人にとって――この巧猿自身にとっても――運命を左右する賭けの一手だ。

「レーテアがなんだ！　香港仔が負けはしないぞ！」

力をこめてうなずいて、レン・巧猿は会見にむかった。

――セイラ・テンプルの内部には、警察といえども騎士の許しを得ずに入れない。

レン・巧猿がその建物の深奥、王家の控えの間まで行けたのは、ひとえにイグナチウスという騎士のおかげだった。

――巧猿とはたった一度、嵐の海上で出会っている。

ほんの短いあいだではあったが、巧猿はもちろん忘れはしない。イグナチウスもまた、この香港仔という異人種から深い印象をうけていた。

現王にぜひとも会わねばならない……巧猿が必死であるのを、彼はどこかで理解した。

「……それでお前はその巧猿とやらを、我が王にとりつぐと約したのか!?」

最長老エトルタは、まなじりを決して彼を叱りつけた。あるまじき軽率な行動で、厳罰ものの罪だ。会見そのものも、とうてい許すわけにはいかない。

王家は不可侵なのだ。

「よろしいイグナチウス、お前は私室にもどって沙汰があるまで待つがよい。そして誰か！控えの間まで出て、その訪問者を丁重に追いかえせ！」

「お待ちください、長老！　たしかに異例のことではありますが、あの者は怪しい身分ではありません。香港・五星家の当主とか……非常に真剣に会見を望んでいます！　先夜会った時には、気ままな蕩児のように話しましたが、今朝は一軍の将のような目をしております！　さしでがましいようですが、せめて話を聞くべきだと……」

〝まだ言うか!?〟、最長老エトルタが、この場ですぐに厳罰を与えようと口を開いたところに、思わぬ助けがかかった。

「お待ちくださいな、エトルタ殿」

「王妃様……これはしかし……」

光沢のある柔らかい絹をまとった愛らしい女性が、鈴の音がなるような声で、扉から声をかけ入ってきたのだ。

――騎士団の現王妃、カナリアだった。

腕には生まれたばかりの大切な子を抱いてあやしている。
「レアルは彼に会うおつもりですよ。なぜ、いけないのです？　その者なら、私も娘時代に少し知っております。本当に五星家の当主ですし、障りもないと思いますのに……」
王妃はこの香港の生まれで、わずか2年前までは香港の富家の娘だった。
まだ、二十歳にもならない娘であるが、若き王に心から愛され、日ならずして無事に世継ぎの王子にもめぐまれた幸せに全身が輝いている。
「ほうら、王子が起きてしまいました……エトルタ殿、またさっきのような恐ろしい声を出されると、泣きやみませんと言っていますよ」
美しい笑顔でほほえみながら、身軽く王子をエトルタの目の前に差し出して、抱かせようとする……すばやく、ほかの者たちは王妃の手をさまたげぬよう道をあけた。
「いやいや……なりません、抱き方を心得ませぬゆえ。お本当だ、お目覚めですな？」
すこやかに目を開いている赤児を見て、思わず老いた相好がゆるむのだ。
「エトルタ、なんという顔なのだ。別人と思ったぞ」
明るい笑い声とともに、背の高い気品ある青年が扉を入ってきた。
純白の王の服を着ている……騎士団の現王レアルだった。
「エトルタ、だらしがないぞ！」
続けてもう一人、純白の王衣をきた少年が入ってきた。レアルよりも、9歳年の違う弟王

アルベリヒである。

――レーテアの流儀に従えば、王家の嫡子は成年に達し次第、並んで玉座につくことになっている。

昨年、アルベリヒは18歳で成人となり、兄王と並んで王位の座につくことになった。

兄王よりも性質は活発で、まだ子供らしい短気がぬけないところもある。王として話を聞くよりも、武術の習練をするほうがはるかに楽しいのだ。

騎士団の騎士たちは、それをまた頼もしいと見て愛していた。

長老が熱心に説教しても、残念ながら、兄以外は誰の言うこともあまりきかない……年長の思慮深い兄を、神のように敬愛している。

……最長老のエトルタが威厳のある顔を真っ赤に染めて、懸命に抗弁を続けている。

「いや、これは……次代の王に対する敬慕でございますれば、恥ずかしいものとは思いませぬ！」

「私が幼かった時分には、そんな顔はしておらなんだような気がするぞ？　エトルタは誰よりも厳しい教師だった」

思わずあがる笑い声が、その場の空気をなごませて変えた。

「その男をここに通し、会わせてくれ、エトルタ。異例かもしれないが、イグナチウスがあれほどまでに言うのだ」

何か見過ごしてはならぬ重要な用件のように思える。

「たとえ我らの故郷はここでなくとも、我らもまた香港の街をとおる者であることを忘れてはならない」

会見が許された瞬間、巧猿は夢かとまで思っていた。

控えの間からさらに扉や回廊をいくつも通り、見慣れた紋章の入った扉を開けると、十数人の人々が一様に彼に目をむけた。

中央の席についた青年が、レアルだった。

――あれが王なのだろう。純白の衣装でわかる……傍らにいるのが弟王か。

いや、大勢のなかで独特の衣装がなくても、なぜだか見ればそれとわかるような気がした。特に兄王レアルのほうには、群をぬいた気品があるのだ。

美貌の騎士団の王なのだから、容姿の端麗さもまた当然のように思われるのだが、流れるような銀髪が、純白のマントにかかっているところはどうだろう！

――まずい！　神々しくて口がきけない！

レン・巧猿としたことが！　なんとかして言葉をだそうとした瞬間に、中央からその王の声がかかった。

「巧猿殿、よろしければその席に」

その声で……魔法のように、気持ちが鎮まったのが不思議だ。
チャンスをつかむ本能が、彼の目を底から輝かせる。
「レーテア現王レアル様、お初にお目にかかる。私は香港五星家の巧猿という者です。ぜひともご助力をあおぎたい議があって、無理を承知で参りました！」
「その議とは？」
「きたる元宵節のことです」
それから巧猿は、さまざまな状況を説明した。新界の苦境、魔力を持つ幽霊船、韻長官の魔女狩りの計画……。
「私は香港で生まれました、香港の繁栄がなによりも大事と思っています」
豊かさを愛し、街なみを愛し、美貌にうつつを抜かす奇妙な性質を愛していた。
「韻大人はどうやら新界を切りすてようとしているように思えます。たしかにあの街には、ほかとは違った部分があります……しかし、それを受け入れてこその香港です！」
香港という自治区のうわべだけを見る人々は、新界に多いさまざまな超常の力や、魔斑のある術士たちを指さして〝底知れぬ街〟などというものだ。
だがそれは本質でもなんでもない。危険な魔術・妖術の存在をのみこんで受け入れる力こそが、〝底知れぬ香港〟の源だと信じている。
「少しくらいの毒は、飲みほしてこその香港です……」

巧猿は静かにそう言った。
「本島がこのまま新界に理不尽な弾圧を続ければ、彼らとてやがてはっきりと反抗してくるでしょう。すでにその兆しが見えてもいます」
韻長官はある意味で新界を甘くみている。一つの街の住民が本気で外部に敵意をいだいたら……。
「もしも暴動が起きたら、あれしきの傭兵で足りるわけはないのです！　おさえられると思っているなら韻長官は大馬鹿者だ。香港警察は中立を必死で保っています。しかし警察の力で新界と……韻大人の私兵を同時に取り締まるのは、もうこれ以上は不可能です」
〝流されただけの血はいずれ本島からも流れる……そうなれば香港の繁栄は終わりです〟
真摯な目で、彼は並み居る騎士たちを見回した。
「すると貴君は、この騎士団に加勢を頼みにきたというわけかね？」
長老会の一人が、ここで初めて口をはさんだ。
「誇りたかき騎士団に、警察の隣で華星街を警邏して歩けとでも!?」
一瞬、円卓の輪がどよめいた。違います、と巧猿が叫ぼうとした時に、凛とした声で抑えたのは弟王アルベリヒだった。
「騎士たち！　香港に我々は大きな恩があるのだぞ！　40年前、大公に故郷を追われた我らを受け入れてくれた自治区なのだ……加勢を望まれたなら、手を貸すのが騎士ではない

か！」

「アルベリヒ、ひかえよ！　お前の考えははやまっているぞ」

「しかし、兄上！　騎士団の力は事態を解決するでしょうに」

「そうしてかつて大公が我らを武力で追ったように……よるべなき人々を力で追うのか？」

……和らかな声音であるが、アルベリヒは打たれたようにハッと頭をさげた。

「そうではあるまい？　そして香港のかた、おそらくあなたの望みもそれとは違うことだと思うのだが……」

「ええ、そのとおりです！」

思わず卓上をたたきそうになって、あやうく止めた。

「私が……いえ、五星家の中の四家までがいま望むのは、元宵節を守っていただきたいということです。たかが祭りと思われるかもしれませんが、香港仔の心の絆です」

――千人会議も、それで一つになる。ぐらついている二つの街の絆も、あの光がきっと、つなぎなおしてくれるだろう！

「なにとぞ新界に力を貸してください！　呪術といわれる力のために無力な街です」

力があるために、ほかとは違う命を生きなくてはならない。

――それは、レーテアの騎士たちとも同じではなかろうか？

たとえほかの軍にあてがあっても、巧猿はこの騎士団に力を借りたかった。

なぜなら、

「韻長官が憎んでいるのは、新界の醜さなのかもしれません……」

すくなくとも、彼に賛同する委員の中にはそう思う者がいるはずだ。

「40年前……と、さきほど弟王殿が申された。あの時、香港はあなたがた王家を歓迎した」

駆け引きも脅しもない静かな言葉で巧猿は続ける。

「あなたがたは美しく、力もあった……香港仔なら魅了されずにいられませんでした。そのあなたがたにいま、新界をかばっていただきたいのです。彼も我も……じつは等しく同じであるのだと、美しいレーテアの口から言って欲しいのです！」

……兄王レアルの顔をひたと見たまま、息をのんで答えを待つ。

「巧猿殿とやら、話の事情はよくわかった……そこで貴殿の要請とはなんなのかな。具体的には、我々に何をさせたいのか？」

「まず、王みずからに千人会議に出ていただきたい」

騎士たちのあいだにさざなみが走った。巧猿は譲らず、先を続ける。

「そして新界に力を貸し、幽霊船に挑むと言っていただきたい」

元宵節の夜まで、騎士たちに肩布をはずしていてもらいたい。

船はある……幽霊船の妖術、黒い炎に対して、騎士団の力が有効であるのは先夜見たとおりでわかっていた。

幽霊船の正体はまだわからない。だが、

「敵がどれほど悪知恵にたけていようと、この巧猿がきっとうわまわってみせます！　あの船はなぜか五星家とクリスタルに興味を持っています……先夜も几城の家のクリスタルを狙いました。きっと……きっと奴ら、おびきだしてやる手はあるはずです！」

〝この議……いかがでしょうか？　ご承知いただけるのなら、五星家・巧猿はいかなる値でもかならず払ってみせます！〟

息をのんで見まもる巧猿の目の前で、思慮深いレアル王が笑顔になった。

「我ら騎士団が香港に、多大な恩があるというのは真のことだ。苦境にあれば、この街は我らの助力を期待できる権利がある……王家の騎士たち、どう思う？　恩ある街に不浄の幽霊船など放しておくのは、騎士団の恥というものではないか？」

……一瞬、戦場の風がふきぬけたように、まず若い騎士たちの目が輝きをました。

「よって巧猿殿、値はいらぬ。騎士団は貴公によろこんで力を貸す！」

――アリエナ、やったぞ！

その時、巧猿は心の中で叫んでいた。

「兄上！　さきほど五星家の男におっしゃったことは約束ですか？」

しばらくあと、主だった騎士も長老会もいなくなったその部屋で、弟王の青年が訊ねた。

「約束だ、アルベリヒ……それからおぼえておくがいい。使う力にはかならず返る力というものがある」

巧猿は騎士団の力が意味する先までも読んで、レーテアの助力を求めたのだ。

だから、レアルはその声に応えた。

「力ある者は、かならずそのなすことの先を見通して動かなければならないぞ。そなたは最強の騎士団の王であるのだから！」

「はい、兄上」

アルベリヒは真摯にうなずいたが、すぐに表情を幼くして笑顔になった。

「しかし兄上のように賢くなれるのには、生まれ変わらなければ無理というものです」

誇らしげな目をして、銀髪の兄をみやる。

――騎士団には兄上がおられて、本当によかった！

「賢者の王は兄上にお任せします。私には武術があればそれでいいや！　イグナチウス、やっともどってきたのだな！　あとで手合わせを申し込むぞ、兄上の話が終わったらでよい……約したぞ、よいな！」

見事な豹のような動作で駆け出していってしまった。

「いつまでも子供で困ったものだ……」

苦笑しながら、レアルがふりかえる先には一人の黒髪の騎士がいた。

イグナチウスという名の騎士である。
「素直で、勇敢なおかたです。レアル様と同じ、かけがえのない我らの王たるかたですとも」
「そうだとよいがな、ハハ」
さりげなく視線をあわせて笑いあう……王とその騎士という間柄ではあるが、彼らはそれ以前に親友のような絆で結ばれていた。
ひさしく会わずにいた相手の顔を見て、災いひとつないと知る喜びは大きいものだ。
とりわけ、イグナチウスは長いこと戦地を一人でさまよってきたのだ。
「よく……もどってくれたな。無事で、新しい侍者までも見つけて！」
イグナチウスはそっとほほ笑んだ。
「リューと言います。力のとても強い子です、いえ……強い素質があります」
「言わなくてもいい、すでにエトルタから聞いている」
一瞬うつむきかけたイグナチウスの言葉を、さえぎるように明るく言った。
「じつは決めたことがある、リューは王妃の近衛にもらいたい！」
「カナリア様の近衛？」
そうだ、とレアルはうなずいた。騎士イグナチウスのリューが、片翼しか能力を持たないことは、騎士団内部では暗黙の事実である。

戦地を転々としているあいだはそれでもいい。だがこれから……騎士団はしばらくセイラ・テンプルで集まらねばならぬのだから、ほかの騎士のエリュシオンにまざって、欠けた力が傷になっては可哀相だ。

「カナリアは香港の生まれだし、騎士団と起居するようになってまだ日も浅い。近い年ごろで友達として話せるものができずにさびしがっている……ギルバートやガリアのような大男には、どうしてもなじまないようだしな。リューとなら、すぐに仲よくなれるだろう」

王妃の近衛となれば、騎士団では羨望をあびるほどの名誉な役だ。

王の信頼の厚さをなによりもよく証明する、王が認めた優秀な者なのだ。

――ありがとうございます！　王よ！

言葉にならなくとも輝く表情が伝えている。その目をみかわして、同じことを思っていた。

「もうすぐだぞ、イグナチウス」

イグナチウスがはっきりとうなずいた。

遠く離れた戦地にいてさえ、レアル王の心のうちは彼にはよくわかっていた。騎士団に非常呼集がかかったのは、いよいよ故郷への道に踏み出すためだ！

40年という長い月日を、ここ……香港ですごしていても、騎士団の故郷はなお変わらずにレーテアの故山にある。

その地にもどり、王国を復興する願いを忘れることはできない。
いまもなお四方に敵がいて、待ち伏せの牙を研いでいるが、騎士団にとっても機は熟していた。
――帰るんだ、いまこそな！
もちろんその旅で一人の騎士も失いたくない。すべての騎士と、修業の満ち足りていない待者までも、無傷でレーテアの地に入りたいのだ。
「だから長くかかるだろう、少しずつ……我らの道を進んでいこう」
そのために、長い準備も続けてきた。四方の敵を一つずつ倒していかねばならない……それには、香港の拠点を捨ててしまうことは、得策でないだろう。
望ましくは二人の王がいて、前線と香港で騎士たちをひきいるとよい。
「アルベリヒが成人して、この代の王はこれで二人になった」
武器の補給も難問だったのだが、〝幸いにも王妃の父親は商都最高の兵器商人なのだから〟
……王妃の名を口にする時には、いつも若々しい頬をややそめる。
可憐な少女のような王妃で、出会った時から愛していた。彼女がたとえ何者でなくても、望む気持ちに変わりはなかったのだが、長老の面々が比較的早く認めたのはこの故だった。
「あの……五星家に約束した元宵節の終わるまでは、まだ動くわけにはいかぬ事情に

なってしまったが、やむをえまい。アルベリヒにも聞かれたが、恩は捨てぬ」

「レアル様、私も騎士としてそれを望みます」

うれしそうにほほ笑んだレアルの表情が、ふいにもっとはっきりとした笑顔に変わった。立ちあがって、見たこともないほど誇らかな瞳になると、

「非常に大切なことを忘れていた。こい、イグナチウス！　世継ぎが生まれたんだ！」

遠くから王妃の腕にある姿はべつとして、親友にまだよく、顔を見せてやってもいない。どこよりも厳重な位置にある小部屋が、世継ぎの部屋に変わっていた。

王妃の心からだろう、壁も床もあたたかくここちよく、和らかい色調で守られている。

――はじめてのわが子を慈しむ気持ちがあふれるようだった。

「……これはこれは」

長老エトルタと同じような反応をみせるイグナチウスを、静かにといいながら、レアルがいざなう。

きゃしゃな揺り籠のなかで、赤児は小さなあくびをしながらその指をしゃぶっていた。

「エーオンと名付けたんだ」

「よい名前です」

間近で見ると、王妃の金髪と王の瞳の色をうけついでいるのがよくわかった。

「抱きぐせがつくと、王妃と長老が怒るのでいけない……」

細いガラガラをとってふってやると、機嫌よく手をのばしてバンザイの姿勢になる。

レアルは背後のドアをふりかえり、誰もほかにはいないと確信してから、ようやく思い切って気になる秘めごとをうちあけた。

「……賢そうな顔をしていると思わないか？」

「ハ……御意ッ」

……むせかえる笑いをこらえて、イグナチウスが床とにらみあっている。

何も知らない赤ん坊は、口の中で指を上手に回すだけだ。若い父は、その頬に指をふれてなぞりながら、

「笑っていろ、イグナチウス。お前にもいまにわかる……エーオン、賢い王になれよ。イグナチウスを黙らせてやれ。アルベリヒのように武芸にも秀でたほうがよいな。知も勇も愛も知る、すべてを兼ね備えた王になって欲しい……レーテアに帰還がかなった日にこそ、そうした王が必要になるのだから」

かたわらのイグナチウスが、つとひざまずいてレアルのマントの裾に額をあてた。

願いのこもる静かな声が唱和する。

「騎士団は王家に忠誠を誓う。願わくば、幼いこの王の即位の日は、我らの故郷レーテアの故山で……」

熱い手が、イグナチウスの手を強く握った。ここにいる二人の者たちは臣下と王である。

けれどもその望むところはたった一つ、同じであるのだから……。

そして千人会議が始まった日。

エメラルドグリーンの尖塔の会議場には、香港の有力な市民がこぞって集まっていた。

――かならずしも千人いるわけではない。

香港にある一定の期間住み続け、自治区の繁栄に貢献していると認められた市民なら、誰でもが登録される。

五星家の席は一段高い壇上にあって、三家までがその当主の姿を見せていた。

韻大人、アリエナ・ライル、そしてハイシャ・Bだ。

アリエナの黒い服はまるで喪服のように見える。まだあらわれない巧猿の席をしきりに気にしていた。

――レン・巧猿はあらわれないのか……。

それぞれの思惑が空席の上で交差した。

韻長官はほほ笑み、ハイシャは何も表にはださない。そして警察署長のアリエナは……。

時計の針が開催時刻をすぎてしまったと知ると、気丈な顔がついに蒼白に変わっていた。

「香港の諸君、千人会議をはじめよう！」

韻大人が立ちあがって、朗々たる声音でそう叫んだ。

本島長官の提案から、いきなり会議は新界の問題に突入する。まだ韻長官についていない者、新界から来た者たちは、それぞれ横暴を訴え続けたが、

「しかしいま、この決断をしなければ、元宵節は行えない！」

幽霊船の襲撃はいつまで続けられるのか？　呪われた術士はいつまで逃げおおせるのか？

「問題の魔の船の術士を新界が自発的に、香港海上警察にさしだしてくれたら、こんな問題にはならなかった……」

「術士の正体は新界でもわかっていないんだ！　どこの誰かも知らない人間をどうやって捕らえろと!?」

「バカ者！　ならば新界の強制捜査もやむを得ないではないかッ？」

新界総督の部隊が全滅したいま、韻長官が集めていた傭兵部隊こそが最強の援軍なのだと、千人会議の議員たちが重い心で理解しはじめていた。

〝新界こそ、すべての病因であり、これを生かしておいては香港全体がやがては繁栄をたたれてしまう！〟

韻長官の声が威嚇するかのように、議場の人々にむけられた。

「私は以前からそう主張しつづけていたのだ。聞かなかった者もいた……その者たちはいまどこにいる？　この会場に来ているか？」

新界総督は？　レン・巧猿は？

凍えるような奇妙な空気が会場を支配するなかで、韻長官は人々に選択をせまった。

「香港の諸君、選んでもらおうか……いま、この場に二つの道がある。新界に情けをかけたまま、船や生命までも幽霊船にくれてやるか。それとも正義にすべてを任せて、香港の栄華と繁栄を守りとおすか⁉」

「その〝正義〟というのは、皇花街・皇鱗街を略奪することなのかッ⁉」

一人の議員がたまらずに席を立って叫んだ。韻大人はただ片頬で笑った。

――そうとも、略奪は傭兵たちとの最初の契約に、もう入っていたのだ……。

だが、そんなことは言葉にはださない。彼はただ、議場の人々の顔を見回して、私設部隊はあくまでも韻長官の手で集められたもので、命令権は彼にしかないのだと念をおした。

「契約によって、権利はあくまでも私的なものとなっている。もしも議会の諸君が、私のやり方に賛同してくれなければしかたがない。この兵力はいっさいの手を引くだけだ」

何があっても見ているだけと……あまりのことに、議場の全体が揺れうごく。

「誰でもいい！　新界を切らずにこの難問を解決することができれば、ここに来て言ってみるがいいのだッ！」

――その声に応ずるかのように、議場の大扉がバンと開いた。

「五星家、レン・巧猿です。韻長官のお訊ねに、お答えできると思いますぞ‼」

――レン！　来たのね!!

アリエナの頬にカッと赤みがさして、ほとんど立ちあがりそうになった。

巧猿は次の瞬間、本当に委員たちを立たせて大議場の窓ぎわへといざなった。

「委員諸君……窓の下を見ていただきたい！」

窓の下には紺碧の海が広がる。

その海に橋をかけるようにして、右から左へと船が続いている。

巧猿が手をふる合図だけで、船は千人会議場の正面でとまった。近くまできて、その甲板に青いマントと青灰色の衣装の美貌の若者たちが隊列を組んで並び、議場に敬礼しているのがはっきりとわかった。

――レーテア騎士団！

巧猿は議場の人々にふりむき、大きく手を広げた。

「いかがか！　香港の諸君、レン・巧猿はレーテアの騎士団をまるごと手にいれました。騎士団の力はご存じのはずですな？　巧猿が王家と交わした契約はただ一つ、きたる元宵節の日にこの香港の海上で狩りをさせていただきたい！」

――獲物はもちろん〝幽霊船〟を!!

元宵節の夜まで、航行するあらゆる船をレーテアが護る手筈になっている。

居並ぶ船のどれ一つをとっても、韻長官の私兵全体に匹敵すると思われる。これほど多数

の騎士を一堂に見るのは、場の誰にとっても初めての経験で、
――香港仔には異常な衝撃なんだな、これが！
レン・巧猿にはよくわかっていた。
熱風のような興奮が、すでに議場全体をつつんでいる。
「香港の諸君、これはもはや〝問題〟などではなく、我らが争う必要はなにもない！　たんなるゲームなのです、駒はすべてそろっている。最強の狩人、憎むべき幽霊船！」
元宵節の夜は騎士団が警護すると、巧猿は荒々しい身振りで誘うのだ。
〝そして我々は、あの美しい人々を一堂に集めて見る楽しみを逃せますかな？〟
――眼下の海では、中央の一隻から輝かしい光が見えた。
レン・巧猿のクリスタルの輝きだ。
美しい一人の騎士の手にあずけてあった……その背後にはレーテアの兄弟の王がみずから立って守ってくれていた。
「契約はごく私的なもので、この幽霊船以外に騎士団に狩らせる獲物はありませんぞ、長官！　邪悪の根はただ一つ……それさえ断てばよいのです。
千人会議の諸君、そのあとは諸君らが頼りになるのです。今年の元宵節は力をあわせて盛大にやる……さもなくば、レーテアへの面目がたちませんでしょうが？　我らの意気をかけて華やかにしてみせましょうぞ！」

蜂の巣をつついたような議場で、韻大人が席を蹴立てて去っていった。
紺碧の海に、水色の旗印が翻る……。

あとがきの国から、こんにちは!!

わはは、ほんとーッにお久しぶり！　の井上ほのかです!!
読者のみなさま、お元気ですか♡
ほのかめは、さいわい元気でおりましたが、なにしろ長い話なもので……準備に時間がかかってしまいましたです。
――アルディーン冒険記第3話。香港部門。
神をも恐れぬ全3巻の予定です。
作者が心のなかで、ひそかに香港激闘篇と呼んでいるこの物語は、1冊め（つまり、いま見ているこの本ですね）を、副題『香港五星家』といたしました。続けて、
2巻、『香港魔界行』
3巻、『香港追弔歌』
と、完結させるつもりのロングロングストーリーです（はじめて頭に浮かんだ瞬間、〝ヤバイな〟と思ったくらい長いのです）。

――ど、どうか、ラストまでつきあってやってください!!

相談するとウチの猫は、前足おりおり、ヤバいポイントを数えあげてくれました。

「あのね、お姉ちゃん、このお話ね。話がダラダラ長くて、人物がやたらに多くて、いつにも増して、オドロオドロしいのが大好きって人なら、もしかして気に入ってくれるかもしれないよー」

それって……奇跡みたいな……。

「あと、値段の高いのが好きな人も!!」

いるか、そんな!?

――これではもはや、読者さまのお情けに、おすがりするしか道はないような……。

優しい気持ちって、大切ですよ！　ホントですって!!

――さて、この本の舞台となっているのは〝香港〟ですが、もちろん実在の香港ではありません。

東経114度、北緯22度くらいにあって、みんなが知っている、あの香港とはまったくべつの街だと思ってくださいませ。

〝元宵節〟というのも、もちろんでっちあげの祭りですが、名前だけは本当にあるお祭りからもらってきたものです。

――台湾で、たしか2月くらいにやる本物のお祭りです。香港……でもやるのかどうかは、寡聞にして知りません。

台湾でのほうも、実際に見たことはまだないのですが、爆竹パンパンのすっごい盛況だとか、とにかく見物客はみんな、ヘルメットをかぶっていかなきゃ駄目だとか、魅力的！な話をいろいろと聞きました。ほのかもいつかはいってみたいなと思っています。ヘルメットかぶってねーッ。

屋台の料理や、中華菓子なんかも魅力的だぞ!!

ところで、ニュースといえばほのかは担当さまが替わりました。

前の担当の野村様には、この場をかりて心から感謝……は照れくさいぞっ。

それでも本当にお世話になりました。

思えば井上ほのかナンバー1『アイドルは名探偵』以来、ナンバー11くらいまで、作家ともなんとも（自分でも）わからない奴と、よくぞつきあってくださいました。

思えば野村氏が担当されたなかで、史上一番にタチのわるい奴だったのではないかと、現在ひそかに心配です。とりあえず、身体だけは大事にしてくだされ。

いろいろお世話になったことや、爆笑スキーウエアのことは忘れないぜッ!!（ありゃあ伝説となって語りつがれるよ、きっと）

――新しい担当さまの名前はトミダ様です。
若くて美人のわりに、〝オドロオドロしてるのが、好きですね!〟ときっぱり言う。野村氏に負けないアヤシの人だ!
ダイエットの必要がない人で、ちょっとうらやましい気持ちあり。
ティーンズハート編集部もパワーアップしたことですし、Vを出して、がんばっていきましょう!!
読者のみなさまも、どうかこれからもよろしくお願いします。
なにしろ3巻ですから、みなさまの善意が頼りです。
そうです、このあとがきを読んでいるあなた! おおっと、本屋さんかな? 立ち読みかな? 立ち読みもいいけど、紅茶とケーキはどこ?
ティーンズの読書にはキュートなお茶が似合いますぜッ……いやホント、お試しください。必要なのはケーキとカップの可愛いの! いま読んでいるこの本もついでだから買っちゃおう。さあ、キュートなそこのあなた! いますぐレジへGOだ!!

井上ほのか

人気爆発の「都市戦記・妖魔アルディーン」シリーズ、香港三部作の第1弾は、いかがでしたか？ぜひ、感想をお寄せください！

♡ファンレターのあて先♡

〒162-91　東京都牛込郵便局私書箱48号　講談社　文芸図書第四出版部気付「井上ほのか」係

いつもすてきなイラストで大人気の瀬口恵子先生。KCフレンド「幻影学園II」も好評です。応援のおたよりを、どしどしお寄せください。

♡ファンレターのあて先♡

〒162-91　東京都牛込郵便局私書箱48号　講談社　少女フレンド編集部気付「瀬口恵子」係

井上ほのか(いのうえ・ほのか)
1970年1月5日、東京生まれ。やぎ座、血液型B型。「アイドルは名探偵」で衝撃デビューを飾った。克樹と真名子のわがままコンビが活躍する、この「アイドルは名探偵」シリーズをはじめ、読みごたえ抜群の本格推理「少年探偵セディ・エロル」シリーズも好評です。そして、初のSFアクション「都市戦記・妖魔アルディーン」シリーズにも話題集中!
好きなものは、リバー・フェニックス、ハンコ集め、映画に読書、それからローラースケートと、いちばんはなんたって東山紀之だッ。

講談社X文庫

teen's heart

都市戦記・妖魔アルディーン3
香港五星家(ホンコンファイブ・スターズ)
井上ほのか
●
1992年11月5日　第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 編集部 03-5395-3507
販売部 03-5395-3626
製作部 03-5395-3615
本文印刷—豊国印刷株式会社
製本———株式会社 堅省堂
カバー印刷—双美印刷株式会社
デザイン—山口 馨
©井上ほのか 1992 Printed in Japan
本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第四出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-198638-4　(文4)

大人気ティーンズハート

アイドルは名探偵・シリーズ

アイドルは名探偵

イラスト/瀬口恵子



真名子＆克樹のわがまま・アイドル名探偵コンビが、さっそうとデビューしたのが、この本です。スタジオを舞台に連続殺人が！　事件を追う真名子も追いつめられて……!?　超・話題の１作です！

アイドルは名探偵2
それはKISSから始まった

イラスト/瀬口恵子



ロケ地・ハワイで、真名子と克樹の大活躍！　ギャングたちの暗号を手に入れたふたりですが、おかげで、マネージャーのマキさんが誘拐されてしまい……!?　またまた人気沸騰の〝ドル探〟です。

アイドルは名探偵3
愛してるっていわせたい

イラスト/瀬口恵子



真名子、ごきげんナナメで始まる第３弾。今度の依頼人は、17歳で日舞のお師匠、流し目得意の着物美人。謎の死をとげた彼女の婚約者が克樹にそっくりだとしても……克樹にくっつきすぎよッ！



井上ほのかの

アイドルは名探偵4

いつまでもそばにいて

イラスト／瀬口恵子

抜群のルックスとウソばっかしの口説き文句で、女の子を次々に狂わせてしまう清史郎。この芸能界一の問題児と共演することになった真名子。ホントに大丈夫!?　ところが、その清史郎の秘密に真名子が気づいたときには、恐怖の殺人計画は進められていたのです……。

⚜今月の新刊⚜

話題の講談社X文庫〈ティーンズハート〉シリーズ

都市戦記・妖魔アルディーン3 **香港五星家**(ホンコン ファイブ・スターズ) 井上ほのか 定価420円
涼の新たな冒険！ 香港三部作、スタート!! イラスト／瀬口恵子

プロポーズ 小林深雪 定価390円
プロポーズ——それは、最高のプレゼント。 イラスト／牧村久実

キスだけじゃイヤII **ハネムーンは危険がいっぱい** 林葉直子 定価390円
助けて直也！ ほかの人と結婚させられるの!! イラスト／くりた陸

秋の十和田湖幽霊事件 風見　潤 定価390円
40日前に死んだはずの男が、再び殺された!? イラスト／かやまゆみ

青 花井愛子 定価420円
ごめんなさいを言いそびれてしまったら——。 イラスト／三浦実子

シンデレラをつかまえて 秋野ひとみ 定価400円
今回は、シンデレラ宝石盗難事件で～す。 イラスト／赤羽みちえ

女ともだち⑥ 倉橋燿子 定価390円
ささはオーディションの一次審査にパスした! イラスト／荻丸雅子

嫌われたくないの 若林真紀 定価390円
あなたの本当の気持ち、確かめるのが怖い。 イラスト／村田順子

《恋人たち》は眠らない—運命のタロット2— 皆川ゆか 定価420円
《魔法使い》と《恋人たち》の闘いの行方は? イラスト／乱魔猫吉

すばる7 真夏の誓い(ちか) ゆうき☆みすず 定価390円
昴がバレーをやめる!? そこで仲間たちは…。 イラスト／中村みき

夢からさめたらあなたがいたの しおざわ千絵 定価390円
結がアルバイトさきで知り合った大樹は…!? イラスト／森村あきよ

ロンリーハートを抱きしめて 原田やよい 定価390円
花梨は光司のラブレターの代筆を頼まれて。 イラスト／如月美帆

〈ティーンズハート〉シリーズは毎月5日発売です。

——もし、お近くの本屋さんで見つからない場合は、
お店の人にご注文くださいね♡——